



ISBN 978-4-906888-06-1

# 地球研言語記述論集 6

千田俊太郎・伊藤雄馬（編）

言語記述研究会

総合地球環境学研究所  
「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」プロジェクト

2014年3月



## 地球研言語記述論集 6

### 目次

序文 .....	千田 俊太郎	i
カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ .	鈴木 博之	1
ムラブリ語の文法スケッチ .....	伊藤 雄馬	41
モンゴル語における語頭母音挿入 .....	植田 尚樹	73
ジンポー語の資料と文法注釈—人間の唾の力はなぜなくなったか—	倉部 慶太	85
奄美喜界島小野津方言の談話資料 .....	白田 理人	107
スワヒリ語の前鼻音化阻害音について .....	古本 真	127
コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロークと音素配列—自由形態素を中心に—	宮川 創	141





## 「地球研言語記述論集」第6号

### 序言

千田 俊太郎

記述研は、今年度も新しいメンバーを迎えながら若干不定期ながら例会が開かれた。本来の活動の據点であった地球研から少しく遠ざかり、京都大学の施設を借りての例会が主だった。気軽に参加できて、誰に気兼ねするでもなく、本音の議論を交はしてゆく本研究会のスタイルは變はらない。

ところで、私はこの研究会の創設時からの会員だが、2011年度より今年度の9月まで熊本大学に奉職してみた関係で例会参加もなかなかかなはずにみた。10月より幽霊会員から復歸したところで、思ひも掛けず序言を書くことになった。そのやうなわけで、このところの研究会の様子をお傳へすることはできないが、以下の感想言をもつて序言に代へさせていただきたい。

本論集は七本の論言を収めてある。一つ一つに執筆者の個性が反映してゐて、言語の記述がこれほど個性的でありうるのかと感心した。また、いづれも若い勢ひに溢れてゐる。例会での活潑な言語談議を思ひ起こさせる。

鈴木博之さんの「カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の言法スケッチ」は「音體系」、「名詞句」、「動詞句」、「言のタイプと分類」の四つの柱からなる少々特徴的な言法スケッチである。鈴木さんはこの構成を「句構造の記述」といふ枠組みだといふ。「名詞句」の記述の比重が高く、なかでも格體系に多くのページが費やされてゐることから、今回の記述における鈴木さんの関心の中心を垣間見てとれる。全體に豊富な例示がなされてをり、資料の價値は長く残るであらう。鈴木さんの音記述に関する獨特の思ひ入れは常の通りである。

伊藤雄馬さんの「ムラブリ語の言法スケッチ」は「音韻論」、「標識・接語・接辭、節・句構造」、「品詞論」、「形態論」、「その他の言法範疇」、「語彙」からなる、これまた獨特の構成である。「語彙」が言法のいかなる位置を占めるか。伊藤さんは語彙意味論の分野と借用についての議論を組み込んでゐる。この言法スケッチの特徴は非言の提示が所々になされることにもある。また用語の定義と議論の筋道をしつかり付けてやりたいといふ意氣ごみがよく傳はつてくる。このスケッチに肉付けをするとどんな言法ができあがるか楽しみである。

植田尚樹さんの「モンゴル語における語頭母音添加」は語頭の r 及び語頭の子音連続に關する母音添加の實態を調査、調査語彙には「全話者の全環境で必ず母音添加が起こる、という語は1語もない」といふ狀況ながら、母音添加は「語頭に r を持つ語、語頭子音連続を持つ語ともに、子音の直後という環境において臈も母音添加の頻度が高く、言頭では頻度が低い」傾向や「語頭の r の前に添加される母音は、強勢を持つ母音ではなく、r の直後の母音がコピーされている」などの結論を得た。言語一般に、借用語がどのやうにレキシコンに記載されてゐるのか、

考へさせられる内容である。

倉部慶太さんの「ジンポー語の資料と音法注釈」は全 22 ページのうち約 6 ページが資料といふ構成で、資料の提出のみならず、倉部さんの興味を中心を知ることができる。例へば「はじめに」で示されたサブグルーピングの根拠や音法註釋 4 に詳しい對句表現などは、獨立の論音もすでに書かれてある。テキストは、實はグロスがついてみれば読めるといふものではない。その意味からも詳しい註釋は有り難いものである。また、一篇の論音にならないやうな細かい事實、しかしその言語を読み解くのに必要な情報を、世に傳へる方法として、たいへん参考になる。

白田理人さんの「奄美喜界島小野津方言の談話資料」も特徴的である。モノログでない少數言語のテキストはまだまだ少ないやうに思ふが、本資料は三人の話者による會話を扱つてある。會話資料にはモノログには見られない多くの特徴が現れる。質問と應答の在り方だけではない。發話は別の發話者に相槌を打たれ、補はれ、遮られる。書き起こしの苦勞が傳はつてくる。音法形式でいふと、談話標識、應答表現、音末助詞などの用法には、このやうな資料なしに記述ができないものも多いはずである。

古本真さんの「スワヒリ語の前鼻音化阻害音について」は前鼻音化音素を樹てる可能性について形態・音韻的に論じたものである。純粹に音韻論的な事實からは前鼻音化音素の系列を認める分析の方が「好ましい」。しかし、一つの音素をなすはずの前鼻音部と阻害音部の間に形態素境界があるやうにみえることがある。これは、9/10 クラスの名詞接頭辭 (の一部) とホストの間にシステマティックに出現してしまふ。古本さんの主要な議論は 9/10 クラスの接頭辭に移つてゆく。その結論は、この形態的な事實が前鼻音化阻害音の不在といふ音韻的な分析を必ずしも補強しないといふことにならう。慎重を期する表現だが、要は、前鼻音化音素を考へない理由はないといふのである。

脳後はこの論集には珍しく古典語を扱つた、宮川創さんの「コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおけるスープラリニアーストロークと音素配列」である。宮川さんは、從來論據が不十分ながら採用されてきた、スープラリニアーストローク (SS) が成節子音を表はすといふ説について、豊富な具體例に基づいて再檢證を行なふ。主に音配列上の特徴を檢證した結果、辭書記載の單語のうち SS が付された部分が音節のソノリテイピークとなつてあるパターンが約 67% と過半数を占め、これに合致しない場合も音配列の制約を考慮に入れた音節構造付與規則でほぼ説明が可能だといふ結論を得てある。

甲午年某 某日  
千田俊太郎

# カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ

鈴木 博之

キーワード：カムチベット語、rGyalthang 下位方言群、名詞句、動詞句

[要旨] 本稿では、中国雲南省香格里拉県小中甸郷吹亞頂行政村で話されるカムチベット語吹亞頂 [Choswateng] 方言 (Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群) について、名詞句と動詞句および文のタイプの簡便な記述を行う。特に格体系と動詞句を構成する接辞を詳しく取り上げて記述する。

## 1 はじめに

中国雲南省迪慶藏族自治州香格里拉県を中心に話されるカムチベット語 Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群 rGyalthang (建塘) 下位方言群に属する各種方言<sup>1</sup>は、瞿靄堂・金效静 (1981) や張濟川 (1993) などの先行研究がカムチベット語の中の独立方言とみなす「迪慶方言」を代表する方言群であるといえる。この方言群を代表する rGyalthang 方言は、陸紹尊 (1990, 1992)、Hongladarom (1996, 2000, 2007ab)、Wang (1996)、《中甸県誌》(1997:147-153)、《雲南省誌》(1998:421-441)、王曉松 (2008)、趙金燦・李玉朋 (2014) などの先行研究が記述を行っている<sup>2</sup>。

rGyalthang 下位方言群に属する諸方言は音声方面において多様な異なりをもつ方言群であるが、その多くは同下位方言群内部による歴史的音変化によって説明がつく点が多く、歴史的な差異が共時的に現れていると言える (Suzuki 2013)。この中で、本稿で記述する香格里拉県小中甸郷和平行政村吹亞頂 [Chos-ba-steng] 自然村 (「區哇迪」と書かれることもある) で話される Choswateng 方言は最も古態的な音特徴を保持している方言である (Suzuki 2013、鈴木 2014)。小中甸郷は自然村ごとに音声特徴において方言差が認められる。吹亞頂自然村の周辺に分布する集落で酷似する方言が話されているかどうかはまだ調査できていない。

吹亞頂村に居住するチベット語母語話者の普段の言語使用は、ほぼ土地のチベット語方言を用いて行われ、必要に応じて漢語 (西南官話雲南方言) の使用も見られる。大部分の村民はこれら二言語を併用する。このため、Choswateng 方言の使用環境は、rGyalthang 下位方言群に属する方言群の中では良好な部類に入ると考えられる。呉光范 (2009:295<sup>3</sup>) によれば、吹亞頂村の人口は 171 人で、この数を Choswateng 方言の話者数と見積もることができる。

<sup>1</sup> 方言区分に関する最新の見解は鈴木 (2014) を参照。rGyalthang 下位方言群に属する方言は、現段階では香格里拉県建塘 [rGyal-thang] 鎮、小中甸 [Yang-thang] 郷、格咱 [sKad-grags] 郷、三壩郷および洛吉郷に分布する。

<sup>2</sup> 長らく rGyalthang 方言の記述に携わってきた Krisadawan Hongladarom 氏は、2005 年当時同方言の記述文法を用意しているということであった (同氏との個人談話) が、未だ出版されていない。

<sup>3</sup> 2005 年末のデータに基づく。

本稿で用いる Choswateng 方言の言語資料は、筆者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はロゾン・ラモ [bLo-bzang Lha-mo] さん（女性）で、吹亞頂村の出身である。語彙調査および文法調査ともに漢語を媒介言語とした翻訳形式を中心に行った。筆者は諸般の事情で調査をほぼ吹亞頂村以外で行ってきたが、一度だけ調査協力者の実家を訪れたことがあり、民話の収集および言語使用に関する情報収集を行うことができた。

本稿の構成は、Choswateng 方言の音体系の概要（2 節）に始まり、名詞句（3 節）、動詞句（4 節）、文のタイプと分類（5 節）の順で記述を行う。内容は Choswateng 方言の記述に的を絞り、近縁方言やチベット文語形式との対比という観点からの分析は行わない<sup>4</sup>。語釈つき例文には通し番号を与える。末尾に索引を兼ねたもくじを配する。

筆者はかつて2種のカムチベット語方言に関する文法スケッチを提出した（鈴木 2011, 2012）。これらは形態・統語について品詞別の記述を目指したものであったが、結果として動詞の記述は動詞句の記述に相当するものとなった。そのため今回は句構造の記述という枠組みの中で品詞別の概要の記述を含める形で Choswateng 方言の素描を行う。また、澤田 (2013) や Tshe-ring Lha-mo (2013) の記述も参考にし、文のタイプの記述にも意を用いた。そのため、先の2種とは趣を異にするものであるが、同方言の輪郭を示すという目的は達成できると考える。なお、本スケッチは、名詞句・動詞句といった分類方法から漏れる周辺的な要素の記述が不十分であるほか、なお詳細な分析を必要とする部分が少なくない。これについては、個別に稿を改め行うことにする。

## 2 Choswateng 方言の音体系

表記には音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。なお、音体系と音声分析の詳細は鈴木 (2014) を参照。

### 2.1 音節構造

Choswateng 方言の最大の音節構造（分節音の配列）は、鈴木 (2005) を参照して以下のよう  
に記述できる。

${}^cC_iGVCC$  および  $CC_iGVCC$

このうち  $C_i$ （初頭子音）と  $V$ （音節核の母音）が必須であり、 $C_iV$  を音節の最小構成とみなすことができる。

初頭子音連続において、 ${}^cC_i$  と  $CC_i$  が区別されるのは、第1要素が鼻音の時に限られる。

Choswateng 方言に認められる末子音には、単子音に /ʔ, j/、複子音に /jʔ/ がある。このうち、/ʔ/ が大部分の例を占める。

これに超分節音素として声調が加わって実現される。ただし声調は原則的に語単位でかかるが、接辞類が付加される場合には必ずしも語単位ではなく形態素単位になる（2.2 参照）。

<sup>4</sup> Choswateng 方言における主要なチベット文語形式との対応関係は鈴木 (2014) が記述している。

## 2.2 超分節音素

Choswateng 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の4種が認められる。

ˉ : 高平                  ˊ : 上昇                  ˋ : 下降                  ˆ : 上昇下降

声調は原則として語単位でかかるが、最大で2音節を単位とし、3音節以降は低平～中平のピッチで発音され、弁別的でない。

声調のかかる単位の中には各種接尾辞類（格標識、名詞化標識、動詞接尾辞など）も含まれるが、接頭辞がある場合は接頭辞の声調パターンが語全体の声調に影響し、必ずしも中核的な語の声調が維持されるとは限らず、動詞複合形式では中心となる各形態素（動詞語幹や TAM 標識）に接頭辞がつくたびに声調が新たに設定される。特定の接頭辞は独立した声調を担うこともある。

以上の声調記号は語（または音節）の初頭に付される。

## 2.3 母音

舌位置による一覧は次のようになる。

ɿ-ʅ	i	ɯ	u
e	ə	o	
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立しているため、計4種の対立が認められる。ただし、全ての舌位置について4種の対立が認められるわけではない。特に長鼻母音は出現に制限が見られ、語例もきわめて限定的である。

母音の舌位置の表記は、実際の発音に最も近い補助記号を用いない音標文字で行う。母音の性質上、音環境によって舌位置に変動が認められるが、本稿ではその記述を省略する。

摩擦性母音/ɿ-ʅ/はそれぞれ先行子音によって相補分布し、1音素である。ただし両者の調音方法に明確な異なりがあるため、書き分ける<sup>5</sup>。相補分布の条件は次のとおり。[ɿ]はそり舌音に後続し、[ʅ]はそれ以外の子音に後続する。また、この音素の音声実現はしばしば強い咽頭化を伴う。長母音として現れる例がほとんどである。

「短母音+声門閉鎖音/?/」の組み合わせは、語（形態素）によって語中において長母音と交替することがある。この場合は実際の発音に基づいて記述する。

<sup>5</sup> この措置は Choswateng 方言に関連する言語としては王曉松 (2008) の rGyalthang 方言の記述に適用されているほか、漢語北京方言（または普通話）の記述でも一般的に行われており、朱曉農 (2010:307, 310) でも踏襲されている。

## 2.4 子音

音節構造の主子音 (C<sub>i</sub>) 位置に現れる要素の一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>		c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>	
	無声無気	p	t	ṭ		c	k	ʔ
	有声	b	d	ḍ		ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>	t͡s <sup>h</sup>	t͡ɕ <sup>h</sup>			
	無声無気		ts	t͡s	t͡ɕ			
	有声		dz	d͡z	d͡ʑ			
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	ʃ <sup>h</sup>	ç <sup>h</sup>	ç <sup>h</sup>	x <sup>h</sup>	
	無声無気		s	ʃ	ç	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʑ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w				j		

硬口蓋閉鎖音系列/c<sup>h</sup>, c, ɟ/は舌背全体が広く硬口蓋に密着するタイプの調音動作で実現するのではなく、硬口蓋中部から後部にかけてのより狭い範囲で閉鎖を形成する。ただし前部軟口蓋音 ([k̟] など) で現れることは、音声学的に存在するとしても、まれである。

また、Choswateng 方言に見られる子音連続の組み合わせ数は比較的多いが、その組み合わせのパターンは単純で、前鼻音、前気音、わたり音を含むものに分けられる。前の2者とわたり音は独立して現れることができるから、最大で3子音連続を形成するが、その出現頻度は低い。

## 3 名詞句

### 3.1 名詞句の基本構造

Choswateng 方言における名詞句は、中心となる語が名詞の場合、おおよそ以下のような構造で現れる。

(指示詞)-(関係節)-名詞-(形容詞)-(指示詞/数詞)-格標識-(主題標識)

名詞句は基本的に何らかの格標識 (ゼロ形態含む) を伴うと分析できる。しかし実際の記述の上では、一部の場所・時間などを表す名詞句がゼロ形態による格標識をとるものは絶対格ではなく位格におかれていると考え、ゼロ形態素 (∅) および語積をいちいち表示しない。

また、格標識には主題標識が後続しうる。主題標識は名詞句のみに付加される。

指示詞は2か所に現れうるが、同時に現れることはまれである。詳細は 3.3.2 参照。

## カムチベット語小中甸・吹亞頂[Choswateng] 方言の文法スケッチ

修飾句は名詞化接辞を伴う名詞句の場合は被修飾語である名詞に前置され、形容詞もしくはそれに準じる形態の場合は被修飾語である名詞に後置される。両者の修飾句は共起可能である。

また、名詞化接辞を伴う名詞句それ自体が名詞と同等に機能するときも以上の名詞句構造をとる。

以上のうち、名詞句の中心となる名詞に先行する指示詞、関係節、形容詞は、音節数に関わらず独自に声調を担うことができる。

名詞句の中心となる語には、名詞のほかに代名詞も現れる。代名詞の場合、名詞句はおおよそ以下のような構造で現れる。

### 代名詞-(数詞)-格標識-(主題標識)

代名詞は、形態によっては、格標示を格標識ではなく語幹の形態変化によって表すものがある。なお、代名詞は修飾語(句)を伴わない。

## 3.2 名詞

単音節語、2音節語が多い。派生語や複合語の場合、3音節や4音節で1語になっているものもある。

### 1. 単音節語

<sup>h</sup>nō「空」、<sup>h</sup>sa「土」、<sup>h</sup>gwə「頭」、<sup>h</sup>pa?「ぶた」

### 2. 2音節語

<sup>h</sup>da wa「月(天体)」、<sup>h</sup>tʃu ni?「泉」、<sup>h</sup>pu s<sup>h</sup>a「息子」、<sup>h</sup>ə ljə「梨」

### 3. 3音節語

<sup>h</sup>lā mbwə tʃ<sup>h</sup>ə「象」、<sup>h</sup>čā: ka ljə?「蝶」、<sup>h</sup>nō ha <sup>h</sup>t<sup>h</sup>a?「シャツ」

### 4. 4音節語

<sup>h</sup>lō fia s<sup>h</sup>əj pō「柳」、<sup>h</sup>ŋu ja: k<sup>h</sup>ō bu「みかん」、<sup>h</sup>ʔa wə ŋe tswə「鸚鵡」

3、4音節語と考えられるものの中には、1～2音節ごとに個別の声調を担うものもある。たとえば<sup>h</sup>sē <sup>h</sup>zu s<sup>h</sup>a「キッチン」、<sup>h</sup>na lo <sup>h</sup>t<sup>h</sup>a: s<sup>h</sup>a「イヤリング」などがある。

語構成について見ると、次のような接尾辞がよく見られる：/pa, ba, ma, wa, pwə, bwə, mwə/。いずれも語彙的に決まっており、基本的に生産的であるとは言えない。/ma/には「雌性」を表す場合には、各種動物名に付加されて「めすの～」を表す。特徴的なのは/wa/で、本来語・外来語を問わず各種地名に付加されて「～(出身)の人」の意味を表す、数少ない生産的な接辞である。

## 3.3 代名詞

人称代名詞、指示詞、疑問詞類に分けて述べる。

### 3.3.1 人称代名詞

人称代名詞は、人称と数が区別される。



人称	単数	複数	双数
1	ʼŋa	ʼʔa wo kē ʼʔa na kē [排除]	ʼʔa wo nəj ʼʔa na nəj [排除]
2	ʼtɕʰuʔ	ʼtɕʰuʔ ŋɑ: kē	ʼtɕʰuʔ ŋɑ: nəj
3	ʼkʰwə	ʼkʰo ŋɑ: kē	ʼkʰo ŋɑ: nəj

「性」は区別されない。「双数」は「複数」の形式に数詞「2」を付加して表すことができ、それ以外の数も現れうるため、体系としては数詞によって数が明示される複数と、そうでない複数の対立を認めることができる。「敬称」は認められない。1人称複数および双数には「包括」「排除」の区別がある。双数形は、以上に示した形式に/ka/が後続する場合がある。文意が明快であれば、各複数形の最後の音節は脱落することが可能である。

各人称の単数は、格標識を伴うと代名詞語幹の形態が変化するほか、場合によっては形態変化のみで表し、次のようになる。

格	1人称単数	2人称単数	3人称単数
絶対格	ʼŋa	ʼtɕʰuʔ	ʼkʰwə
属格	ʼŋi:	ʼtɕʰiʔ	ʼkʰu:
能格	ʼŋɛ:	ʼtɕʰuʔ	ʼkʰə: / ʼkʰə:-jə
格標識を伴うとき	ʼŋi-	ʼtɕʰuʔ-	ʼkʰo- / ʼkʰu-

格標識を伴うときの人称代名詞の形態は、以上に示した形式のほか、絶対格でもよい。

以上のほか、「～の家の/～の家族の」という表現が見られる。形態としては/ʼʔa<sup>h</sup>dzi/「私(たち)の家の」、/ʼtɕʰu<sup>h</sup>dzi/「あなた(がた)の家の」、/ʼkʰo<sup>h</sup>dzi/「彼(ら)の家の」となる。形態上は全体で1つの代名詞とみなすことができるが、通常は修飾用法として用いられ、名詞化接辞もとることができる。ほかに/ʼʔa na/「我々一家」という形式が認められる。

- (1) ʼʔa na kē-φ ʼtɕʰə jə ʼtɕʰuʔ-φ ʼma-<sup>h</sup>õ-reʔ  
 1.[複/排]-[絶] なぜ あなた-[絶] [否]-見える-[判]  
 私たちにはどうしてあなたが見えないのでしょうか?

### 3.3.2 指示代名詞

指示詞は近称、遠称、超遠称の区別があり、事物(人も含む)と場所の異なる系列がある。

	近称	遠称	超遠称
事物	ʼndjə / ʼndjə / ʼʔə ndjə	ʼwo tje / ʼtjə	ʼʔa tje
場所	ʼnde za / ʼndi je / ʼndi duʔ	ʼfio tje / ʼfio duʔ / ʼte duʔ	ʼʔa tje za / ʼpʰu duʔ

3人称代名詞と同形の/ʼkʰwə/も既知の人・事物に関する指示代名詞「それ」として機能する。複数の事物を示す形式に、/ʼʔa ŋi<sup>h</sup>ə/「これら」、/ʼʔa tə<sup>h</sup>ə/「あれら」がある。

様態の指示詞には、/ʼfio ŋi<sup>h</sup>da/「このような」、/ʼfio tə<sup>h</sup>da/「あのような」がある。

指示詞は代名詞の機能と形容詞の機能を兼ねる部分がある。指示形容詞として用いる場合、/ʼndjə/「この」と/ʼtjə, ʼtje/「あの」が修飾対象の名詞に前置される。指示形容詞は独立の声調を持つ。これらが単なる指示形容詞として、ただしその指示力がほぼ失われた状態として用

いられるとき、名詞に後置され、かつ独立した声調を担わない。

- (2) ˈndjə ˈpʰɑʔ-φ-tə ˈʔa ˈdzi-tə ˈreʔ  
 この ぶた-[絶]-[主] 1.[属]-[名] [判]  
 このぶたは我々一家のです。
- (3) ˈʔa na-φ ˈpʰu duʔ ˈndɔʔ  
 我々一家 あそこ [存]  
 我々一家はあそこに住んでいます。
- (4) ˈɕe wa-ndjə-φ ˈhtjeʔ-sʰa ˈka: ze ˈreʔ  
 もの-[指]-[絶] 与える-[名] どこ [判]  
 このものを渡す場所はどこですか？

### 3.3.3 疑問詞類 (形容詞・副詞も含む)

ˈsʰu ʼ誰」、ˈsʰu ŋɑ: kē ʼ誰々」

- (5) ˈtɕʰuʔ-φ ˈsʰu-φ ˈji  
 2-[絶] 誰-[絶] [判]  
 あなたは誰ですか？

ˈtɕʰə<sup>6</sup> ʼ何」、ˈkə dju / ˈkə lju ʼ何」

- (6) ˈtɕʰuʔ ŋɑ: kē-φ ˈtɕʰə-φ ˈje-ˈndɔʔ  
 2.[複]-[絶] 何-[絶] する-[進]  
 あなたたちは何をしていますのですか？

ˈka le ʼどの」

- (7) ˈʔa wo kē-φ ˈka le ˈlɔ-φ ˈŋgwə  
 1.[複]-[絶] どの 道-[位] 行く  
 我々はどの道を行きましようか？

ˈka: ze ʼどこ」

- (8) ˈɕe wa-ndjə-φ ˈhtjeʔ-sʰa ˈka: ze ˈreʔ  
 もの-[指]-[絶] 与える-[名] どこ [判]  
 このものを渡す場所はどこですか？

ˈka: jə ʼどこで」

- (9) ˈtɕʰuʔ-φ ˈka: jə ˈŋu-wa  
 2-[絶] どこで 買う-[過]  
 あなたはどこで買いましたか？

ˈka: ʼどこへ」

- (10) ˈkʰwə-φ ˈka: ˈpa-ˈŋgwə-reʔ  
 3-[絶] どこへ [方]-行く-[判]  
 彼はどこへ行ってしまいましたか？

<sup>6</sup> [tɕʰə] という発音も認められる。

˘ka: le 「どこから」

- (11) ˘kʰwə-φ ˘ka: le ˘fio-ŋgwə-re?  
3-[絶] どこから [方]-行く-[判]  
彼はどこから来ましたか？

˘ka: wa 「どこの人」

- (12) ˘kʰwə-φ ˘ka: wa ˘re?  
3-[絶] どこの人 [判]  
彼はどこの人ですか？

˘kə zē 「いつ」

- (13) ˘tʰəʔ-φ ˘ka zē ˘pʰə-ŋw  
2. 単-[絶] いつ [方]-泣く  
あなたはいつまで泣いているのですか？

˘kə zoʔ 「どう (する)、どのような方法で」

- (14) ˘sʰa-φ ˘ka zoʔ ˘ŋa-ŋgo-re?  
肉-[絶] どう 切る-[未]-[判]  
肉はどのように切りますか？

˘kə zeʔ 「どれぐらい、いくら」

- (15) ˘n dʒə ˘pə sʰa-φ ˘ŋ dʒi ˘kō ˘kə zeʔ ˘re?  
この 牛肉-[絶] 500g 1 いくら [判]  
この牛肉は 500g いくらですか？

˘tʰəʔ jə<sup>7</sup> 「なぜ」

- (16) ˘kʰwə-φ ˘tʰəʔ jə ˘ma-fiō-reʔ ˘n dwoʔ  
3-[属] なぜ [否]-来る-[判]  
彼はどうして来ないのですか？

なお、次のような文では疑問詞が含まれていても疑問を表さない。

- (17) ˘sʰw-φ ˘ze jī nə ˘ŋgwə ˘ma-ʰpuʔ  
誰-[絶] としても 行く [否]-あえてする  
誰であっても行く勇気はありません。

- (18) ˘ŋa-φ ˘tʰəʔ-φ-la ˘ŋeʔ  
1-[絶] 何-[絶]-も [存/否]  
私は何も持っていません。

次の文は文脈により解釈が2通りある。

<sup>7</sup> ˘tʰəʔ jə という形式は、そもそも ˘tʰəʔ-jə (何-[具]) であったと考えられる。

- (19) ʔtɕʰuʔ-φ ʔtɕʰə-φ ʰiŋu:  
 2-[絶] 何-[絶] 必要である  
 a. あなたは何が必要ですか？  
 b. あなたは何かを必要としています。

### 3.4 名詞化標識

頻繁に見出される名詞化標識には/nə/、/tə/、/zə/、/sʰa/がある。/nə/は基本的に「人、行為者、道具」を表し、/tə/は「行為」を表し、/zə/は「事物」を表し、/sʰa/は「事物」を表すほかに「場所」を表す用法もある<sup>8</sup>。形容詞の名詞化は/tə/に限定される。

名詞化前	名詞化後
ʔtsʰõ ʰi dzoʔ 「商売する」	ʔtsʰõ ʰi dzoʔ-nə 「商人」
ʰiʃõ 「歌う」	ʰiʃõ-tə 「歌うこと」
ʰiʧʰa 「食べる」	ʰiʧʰa-zə 「食べ物」
ʰiʧʰõ 「飲む」	ʰiʧʰõ-sʰa 「食べ物」
ʰsẽ ʰi zu 「ごはんを作る」	ʰsẽ ʰi zu-sʰa 「キッチン」
ʰkuu ʰkuu: 「白い」	ʰkuu ʰkuu:-tə 「白いもの」

以上のうち、事物を指すものとして用いられる/zə/と/sʰa/の異なりは、前者が名詞化される語が表す動作をこれから行うものを特に示し、後者はより抽象的な意味で用いられる。また、/tə/は行為を表明することから、「歌う」の動詞語幹に付加されても「歌」という意味で用いられない。実際の使用においては行為の主体を含む形式で用いられることが多い。

- (20) ʰŋa-φ ʔkʰə: ʰiʃõ-tə-φ ʰiẽ-ʰi dõ  
 1-[絶] 3.[能] 歌う-[名]-[絶] 聞く-愛する  
 私が彼が歌うのを聞くのが好きです。

/nə/は主に「人、行為者、道具」を表す名詞句を形成する場合に用いられる(21, 22)。

- (21) ʰpʰej dzə-φ ʔʧʰuʔ-nə-φ ʔtɕʰuʔ-φ ʰʔa-zẽ  
 コップ-[絶] 壊す-[名]-[絶] 2-[絶] [疑]-[判]  
 コップを壊したのはあなたですか？

- (22) ʰʔa lju-φ-de ʰçwa-φ ʰi zõ-nə-φ ʰreʔ  
 猫-[絶]-[主] ねずみ-[絶] 捕まえる-[名]-[絶] [判]  
 猫というのはねずみを捕まえるもの[動物]です。

名詞化した名詞句は修飾句になれるが、例文を見る限り必ず被修飾語(句)に前置される。以上に挙げた名詞化標識のうち、修飾句としても用いられるものに/tə/と/nə/がある。

- (23) ʔkʰə:-φ ʰi zwə-tʰũ-tə ʔtsʰaj-φ ʰma-zõ  
 3.[能] 作る-[達]-[名] おかず-[絶] [否]-おいしい  
 彼が作ったおかずはおいしくありません。

<sup>8</sup> 名詞化接辞のうち、/tə/と/sʰa/は、音環境によってそれぞれ [də] と [za] という発音になるときがある。

- (24) ʼpe: gwə-φ      ʼkwē-nə      ʼçi:-φ      ʼka:      ʼpa-ŋgwə-reʔ  
 チベット服-[絶]    着る-[名]    子供-[絶]    どこへ    [方]-行く-[判]  
 チベット服を着た子はどこへ行ってしまいましたか？

以上に述べた以外に/jaʔ/という名詞化接辞があり、「不確定の出来事」を表す (15)。

- (25) ʼŋa-φ    ʼtɕʰaʔ-φ    ʼŋuj-φ    ʼlō      ʼdʒe:-jaʔ-φ    ʼhʉʔ-ʰsō  
 1-[絶]    2-[絶]      お金-[絶]    もってくる    忘れる-[名]-[絶]    驚く-思う  
 私はあなたがお金をもってくるのを忘れていたのではないかと危惧しています。

「忘れる」などの特定の動詞については動詞句を名詞化接辞を必要とせず動詞連続のような構造をとる。

/sʰa/は、「場所」の意味で後続の名詞句を修飾するとき、さらに属格標識が後続する (16)。

- (26) ʼfio tje-tə    ʼkʰo ŋa: kē-φ    ʼla mwə-φ    ʼtʰō-sʰa-jə      ʼsʰa [sʰa-φ    ʼji  
 ここ-[主]    3.[複]-[絶]    [人名]-[絶]    見かける-[名]-[属]    場所-[絶]    [判]  
 ここは彼らがラモを見かけた場所です。

なお、補文標識は名詞化標識とは異なるか、または必要とされない。  
 動詞句に名詞化標識を付加する慣用的表現に次のようなものがある。

- (27) ʼŋa-φ    ʼfio-tə      ʼhʉiʔ    ʼhʉe la    ʼsō mwə    ʼnō-ɕō  
 1-[絶]    来る-[名]    1      とても    おいしい    においがする-[受]  
 私は (部屋に) 入るなりとてもよい香りがしました。(いい気持ちです)  
 この場合、名詞化標識を伴う名詞句に格標示は行わない。

### 3.5 格体系

Choswateng 方言は、文法格として他動詞の行為者をマークする能格型の格体系を持つ。

#### 3.5.1 格標識一覧表

Choswateng 方言における格標識の一覧は次のとおりである。

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
無標 (φ)	絶対格	(位格)
jə	能格	
ji / jə		属格
hē		具格
tsə / wə / tə		与格
nə / wa		位格
tsʰə / tɕi		奪格
peʔ		比較格

Choswateng 方言は、文法格として絶対格と能格のみが機能する。

以上のうち、能格/属格はそれぞれ形態的に同一のものとして実現されうる。ただし属格は [ji] と発音されることが多い。これらは格の機能、そして格標識の脱落の可否において異なるため、

分離して扱う。

一方、絶対格は無標であり、例文中に  $\phi$  で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なっている。以下の例文において、音形式の認められない位格は一律表示しない<sup>9</sup>。格標識の連続は認められない。属格標識は、それに名詞化接辞/ta/が後続することができ、「～のもの」を意味する<sup>10</sup>。また、/tə/は主題標識として用いられることもあり、この場合格標識とは共起しないようである。すなわち、主題標識は絶対格もしくは位格につく。

このほか、与格にも /-tə/ という形式があり、単なる方向ではなく受益者を表す場合によく用いられ、しばしば [də] と発音される。

なお、人称代名詞は特定の格について形態変化によって標示する。詳細は 3.3.1 を参照。また、人称代名詞にのみ現れる格標識があり、共格 /-kə di/ 「～と一緒に」などがある。

### 3.5.2 用法

以下、文法格 (S/A/P 標示)、非文法格 (非 S/A/P 標示) の順に、簡潔に用法を記述する。

#### 文法格：絶対格

絶対格の用法としては、判断動詞の主語および補語、存在動詞の主語および所有者、自動詞の主語、他動詞の目的語 (被動者)、他動詞の主語 (行為者)、使役文における被使役者などがある。

判断動詞の主語および補語

- (28)    ʔk<sup>h</sup>wə- $\phi$     ʔs<sup>h</sup>u- $\phi$     ʔreʔ  
          3-[絶]    誰-[絶]    [判]  
          彼は誰ですか？

存在動詞の主語および補語

- (29)    ʔtɕ<sup>h</sup>uʔ- $\phi$     ʔ<sup>fi</sup>zo-tə    ʔtɕ<sup>h</sup>õ- $\phi$     ʔka:    ʔjuʔ  
          2-[絶]    作る-[名]    家-[絶]    どこ    [存]  
          あなたが建てた家はどこにあるのですか？

自動詞、形容詞述語の主語

- (30)    ʔʔa tje    ʔs<sup>h</sup>ěj p<sup>h</sup>ũ- $\phi$     ʔ<sup>h</sup>kõ-də    ʔs<sup>h</sup>ə-nə  
          あの    木-[絶]    乾燥する-[接続]    死ぬ-[現認]  
          あの木は枯れて死んでいます。

他動詞の被動者

<sup>9</sup> 時間 (/ʔa rēj/ 「今日」、/ʔnõ ɕeʔ/ 「夜」など)・空間 (/ʔ<sup>fi</sup>gõ/ 「上」、/ʔsoʔ/ 「下」など) を表す語は、品詞としては名詞の一種と考えられるが、格標識を伴わない形式は通常意味上は位格として用いられると考え、絶対格の標示を行わない。

<sup>10</sup> 文の構造上、この種の属格は絶対格におかれていると分析できるかもしれないが、本稿では絶対格の記述を行わない。

- (31) ʔ<sup>n</sup>djə ʔji jə-φ ʔkə zoʔ ʔ<sup>n</sup>dɛj  
 この 文字-[絶] どう 読む  
 この文字はどのように読みますか？

他動詞の行為者

- (32) ʔti: ʔŋa-φ ʔtɕ<sup>h</sup>uʔ-φ ʔtjə-φ ʔ<sup>h</sup>tɛ-zə  
 後ほど 1-[絶] 2-[絶] あれ-[絶] 見せる-[未]  
 後ほど私はあなたにそれを見せましょう。

受益者

- (33) ʔk<sup>h</sup>ə: ʔŋa-φ ʔ<sup>h</sup>tje:-ɕɔ̃  
 3.[能] 1-[絶] 与える-[受]  
 彼は私に（何かを）くれました。

使役文における被使役者<sup>11</sup>

- (34) ʔ<sup>h</sup>u-jə ʔtɕ<sup>h</sup>uʔ-φ ʔsa-jĩ  
 誰-[能] 2-[絶] 食べる-[判]  
 誰があなたに食べさせましたか？

文意が明確であれば、すべての文法格の表示が行われる名詞句は絶対格で現れうる。

- (35) ʔk<sup>h</sup>wə-φ ʔtɕ<sup>h</sup>uʔ-φ ʔta li ʔwāʔ  
 3-[絶] 2-[絶] 大理 派遣する  
 彼はあなたを大理に派遣します。

文法格：能格

能格は他動詞の主語（行為者）を示すが、代名詞である場合を除き、その使用は任意であり、行為者を強調したり対比したい場合に特に用いられる。ただし行為者が被動者より後に来る場合<sup>12</sup>は、ほぼ義務的に用いられる。

行為者が文頭にある場合

- (36) ʔtɕ<sup>h</sup>uʔ ʔ<sup>l</sup>gu le: ʔmjɛ-φ ʔ<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>a-nə  
 2.[能] さっき 葉-[絶] 食べる-[現認]  
 あなたはさっき葉を飲みました。

行為者が被動者より後に来る場合<sup>13</sup>

- (37) ʔca-φ-tə ʔk<sup>h</sup>ə: ʔsa-t<sup>h</sup>ũ  
 鶏-[絶]-[主] 3.[能] 殺す-[完]  
 鶏は彼に殺されました。

被動者が表示されない場合

<sup>11</sup> 使役文における動詞が自動詞でも他動詞でも、被使役者は絶対格で標示される。また、(34)のように、使役を表す形態素がつかなくても、文脈が特定されている場合は使役文として解釈される。(34)が「誰があなたを食べましたか？」と解釈されることはないのである。

<sup>12</sup> この語順の場合、日本語では受け身で訳すほうが意味的に近いと考えられる。

<sup>13</sup> この場合、文頭にくる名詞句には主題標識がつくことが通例である。

(38) ʔkʰə: ʔŋa-φ ʰtje:-çõ

3.[能] 1-[絶] 与える-[受]

彼は私に（何かを）くれました。

原因を表す場合（無生物の行為者としての解釈）

(39) ʔçʰu:-jə ʔna:-φ ʰni:-tʰũ-nə

雹-[具] 裸麦-[絶] 枯れる-[完]-[現認]

雹で裸麦が枯れてしまっています。

名詞句の中に現れる行為者を示すときにも能格標示が維持される。

(40) ʔtçʰuʔ ʔŋa-jə ʔruʔ-tə ʰšʰej-ziʔ-φ ʔkʰə:

2.[能] 私-[能] する-[名] 薪-1-[絶] 持って入る

あなたは私が割った薪を持って入りなさい。

使役文の使役者も能格で現れる。

(41) ʰshu-jə ʔtçʰuʔ-φ ʔsa-jĩ

誰-[能] 2-[絶] 食べる-[判]

誰があなたに食べさせましたか？

能格が期待される場合に絶対格を用いるのも文法的で許容される。

(42) ʔwo tje-φ ʔŋa-φ ʔtʰʂʰa ʔnə-çʰe:

あれ-[絶] 1-[絶] 食べる [否]-知っている

あれは私は食べることができません。

(43) ʔʔa wo kē-φ ʔkʰwə-φ ʔtʰʂʰa ʔma-tʂʰuʔ-kə

1.[複/包]-[絶] 3-[絶] 食べる [否]-よろしい-[気]

私たちは彼に食べさせてはいけません。

#### 非文法格：属格

属格は所属、属性を表す際に用いられる。属格標識は/ji, jə/である。人称代名詞の場合、形態変化のみで属格を表す。

(44) ʔni: ʔruʔ

1.[属] 友人

私の友人

(45) ʔtçʰuʔ-φ ʔnə-jə ʔçe ra-φ ʔma-ruʔ

2-[絶] 人-[属] もの-[絶] [否]-動かす

あなたは人のものを動かしてはいけません。

代名詞、人名および人間を表す普通名詞には<sup>m</sup>dzi/がついて意味的には属格として用いられ、「～の家の、～の場所の」の意味をもつ。

(46) ʔtçʰu <sup>m</sup>dzi ʔpu mwə

2.[属] 娘

あなたの家の娘



属格に名詞化接辞/tə/がつくことで、「～のもの」という名詞句として用いることができる。

- (47) ˈnɔdjə ˈhɔsɪ: ca:-φ ˈshu-ji-tə ˈre?  
 この 金のコップ-[絶] 誰-[属]-[名] [判]  
 この金のコップは誰のものですか？

なお、/tə/という音形には多数の意味が存在し、次の例のように1文中に共起することもある。

- (48) ˈnɔdjə ˈjə jə-φ-tə ˈtɕʰiʔ-tə-φ ˈʔa-re? ˈtə ˈtɕʰiʔ-tə-φ  
 この 本-[絶]-[主] 2.[属]-[名]-[絶] [疑]-[判] または 3.[属]-[名]-[絶]  
 ˈʔa-re?  
 [疑]-[判]  
 この本はあなたのですか、それとも彼のですか？

#### 非文法格：具格

具格は道具、材質、手段などを示す際に用いられる。

##### 材質

- (49) ˈtjə ˈhɔgɔ-φ-tə ˈdo ˈdzə-jə ˈhɔsɔʔ-hɛ ˈdɔ-ɾe?  
 あの 箱-[絶]-[主] [人名]-[能] 鉄-[具] 打つ-[判]  
 あの箱は、ドジュが鉄で打って作りました。

##### 道具

- (50) ˈtjə ˈtsʰə-φ-tə ˈla mwə-jə ˈsʰɛj ˈje-hɛ ˈdɔ  
 あの 犬-[絶]-[主] [人名]-[能] 棍棒-[具] 打つ  
 あの犬はラモが棍棒で打ちました。

#### 非文法格：与格

与格は受益者・受領者および行為の向かう先を示す際に用いられる。各標識の形態としては、/tsə/がよく使われるが、ほかにも/wə/や/tə/などが認められる。これらの間の詳しい差異は不明であるが、/tə/が受益者を表すときによく現れ、/tsə/は中立的な行為の向かう先を表す場合に用いられるように見える。これらの与格標識は文脈が明瞭であれば省略されることがしばしばある。

##### 受益者・受領者

- (51) ˈŋa-φ ˈtɕʰuʔ-tə ˈkʰɔ mwə ˈhɔtɕiʔ-φ ˈɕʰu  
 1-[絶] 2-[与] 桃 1-[絶] 洗う  
 私はあなたのために桃1個を洗います。
- (52) ˈtɕʰuʔ-φ ˈmbe duʔ-wə ˈtɕʰu-φ ˈtsə kə ˈhɔʔ  
 2-[絶] 花-[与] 水-[絶] 少し 撒く  
 あなたは花に少し水をやりなさい。
- (53) ˈkʰə: ˈwə ˈkʰo-tə ˈjə jə ˈhɔtɕiʔ-φ ˈhɔtɕeʔ-tʰi  
 3.[能] また 3-[与] 本 1-[絶] 与える-[完]  
 彼女はまた彼に本1冊をあげました。

行為の向かう先

- (54)    `tɕ<sup>h</sup>ɕʔ-φ    `s<sup>h</sup>ɯ-tɕə    ʔə-zə  
 2-[絶]    誰-[与]    尋ねる-[未]  
 あなたは誰に尋ねるつもりですか？

次のような場合、与格の有無は意味するところが異なる。

- (55) a    `tɕ<sup>h</sup>ɕʔ-φ    `k<sup>h</sup>o-tɕə    ʔa kɯ    ʔ<sup>m</sup>beʔ  
 2-[絶]    3-[与]    おじさん    呼ぶ  
 あなたは彼に向かって「おじさん」と呼びなさい。
- b    `tɕ<sup>h</sup>ɕʔ-φ    ʔ<sup>h</sup>wə-φ    ʔa kɯ    ʔ<sup>m</sup>beʔ  
 2-[絶]    3-[絶]    おじさん    呼ぶ  
 あなたは彼のことを（「おじいさん」ではなく）「おじさん」と呼びなさい。

非文法格：位格

位格は無標の位置・方向を示す。文意が明快な場合は省略可能で、しばしば絶対格として現れる。

- (56)    ʔrə-nə    ʔ<sup>h</sup>ō: tse la-φ    ʔ<sup>m</sup>ō-reʔ  
 山-[位]    きのご類-[絶]    多い-[判]  
 山にはきのご類が多いです。
- (57)    ʔ<sup>h</sup>ə:    ʔ<sup>h</sup>ēj p<sup>h</sup>ū    ʔ<sup>h</sup>ta-zɪʔ-φ    ʔri: ʔrəʔ-t<sup>h</sup>i  
 3.[能]    木    馬-1-[絶]    くくりつける-[完]  
 彼は木に馬をくくりつけました。

また、「～にとって」という表現で用いられる。

- (58)    ʔ<sup>h</sup>a-nə    ʔtɕɯ xwa-φ    ʔmi mje-fia    ʔ<sup>h</sup>sō-ɕō  
 1-[位]    菊の花-[絶]    小さい-[気]    思う-[受]  
 私には菊の花が小さいと思われます。

/ʔ<sup>h</sup>tɕ/「上」、/ʔ<sup>h</sup>ē/「前」など空間・時間を表す語には意味的には位格におかれていると考えられるが位格標識がつかない。また、これらに先行する名詞句は格標識を必要としないが、絶対格におかれているともいえないため、格が標示されないと分析する。ただし両者は互いに独立した声調を担うため、空間・時間を表す語は格標識への文法化の度合いが高いともいえない。

- (59)    ʔɕə lja    ʔ<sup>h</sup>ja    ʔnō ni    ʔ<sup>h</sup>ə:    ʔ<sup>h</sup>sō-φ    ʔ<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>a-t<sup>h</sup>i  
 梨    5-[絶]    内    3.[能]    3-[絶]    食べる-[完]  
 5個の梨の中で、彼は3個食べました。
- (60)    ʔlwə    ʔ<sup>h</sup>sō    ʔ<sup>h</sup>ē    ʔja-φ    ʔ<sup>h</sup>gwə-nō  
 年    3    前    1-[絶]    行く-[経]  
 3年前私は行ったことがあります。

非文法格：奪格

奪格は時間・空間の起点を表す。奪格標識には2つの形態が認められるが、使い分けの基準ははっきりしない。

- (61) ʰiǝ-φ-tə      ʰte duʔ-tsʰə      ʰfiō-nə  
 風-[絶]-[主]    あちら-[奪]    来る-[現認]  
 風はあちらから来ています。

- (62) ʰde ʰge-tɕi    ʰla sʰa    ʰnɛ: pə la    ʰdzō tʰaʔ-φ    ʰka zɛ      ʰjuʔ  
 [地名]-[奪]    [地名]    間                  距離-[絶]      どれぐらい    [存]  
 デルゲからラサまでの間にどれぐらいの距離がありますか？

非文法格：比較格

比較格は比較対象を表し、起点を示す場所格の一種と考えられる。

- (63) ʰdjə    ʰmbe duʔ-φ    ʰtje    ʰmbe duʔ-peʔ    ʰdzi:-nə  
 この    花-[絶]                  あの    花-[比]                  美しい-[現認]  
 この花はあの花よりきれいです。

- (64) ʰtɕʰuʔ-φ    ʰŋa-peʔ    ʰdzɕ:-tsʰa ji    ʰdzuʔ  
 2-[絶]      1-[比]    走る-[?]      速い  
 あなたは私より走るのが速いです。

以上のように、比較される程度を表す語（たいていは形容詞）は文末に置かれる。

3.6 数詞・量詞

3.6.1 基数詞

以下に1から29までの形態を示す。

	+10	+20
0	ʰtɕɕu	ʰnə ɕʰu
1	ʰtɕiʔ	ʰnə ɕʰu ʰtsa: ʰtɕiʔ
2	ʰnəj	ʰnə ɕʰu ʰtsa: nəj
3	ʰsō	ʰnə ɕʰu ʰtsa: sō
4	ʰzə	ʰnə ɕʰu ʰtsa: zə
5	ʰŋa	ʰnə ɕʰu ʰtsa: ŋa
6	ʰtɕʰ?	ʰnə ɕʰu ʰtsa tɕʰ?
7	ʰdɛ	ʰnə ɕʰu ʰtsa: dɛ
8	ʰdzeʔ	ʰnə ɕʰu ʰtsa: dzeʔ
9	ʰgu	ʰnə ɕʰu ʰtsa: gu

20 台の数は「20 + つなぎの要素<sup>h</sup>tsai/<sup>14</sup> + 1 の位」で表し、「30」以降のきりの悪い数字も20 台と同様の構成をとる。

30 から 100 までのきりのよい数は以下のようになる。

ˊs<sup>h</sup>õ t̚sɯ 「30」

ˊzə<sup>h</sup> t̚sɯ 「40」

ˊŋa<sup>h</sup> t̚sɯ 「50」

ˊtɕ: t̚sɯ 「60」

ˊ<sup>h</sup>dẽ t̚sɯ 「70」

ˊ<sup>h</sup>dze: t̚sɯ 「80」

ˊ<sup>h</sup>gɯ<sup>h</sup> t̚sɯ 「90」

ˊ<sup>h</sup>dza 「100」

「100」から「199」までは「100 + 各種 2 けたの数」を並列して構成する。

「1000」以上の数は以下のようなものがある。

ˊ<sup>h</sup>tõ t̚<sup>h</sup>a? 「1000」

ˊ<sup>h</sup>tə t̚<sup>h</sup>a? 「10000」

ˊ<sup>m</sup>bu t̚<sup>h</sup>a? 「100000」

### 3.6.2 序数詞

序数詞は基本的に基数詞に /ʔä/ を先行させることによって形成されるが、「第 1」は /ʔä ˊtã mwə/ となる点に注意が必要である。

### 3.6.3 量詞

量詞は大きく類別詞と計量の単位 (度量衡の単位を含む) に分けられるが、前者は Choswateng 方言には認められず、名詞 (句) に直接数詞を後続させることができる。また、度量衡の単位は漢語をそのまま用いることが多い。

量詞を含む語順は「名詞 + 量詞 + 数詞」である。何らかの容器による単位を表す場合、「1」に /kõ/ が用いられる。また、「1」の場合は声調を担わず、先行名詞 (もしくは量詞) とともに 1 つの声調を形成する。<sup>h</sup>tei?/ は [tei?] と発音されることがある。

(65) ˊnə {<sup>h</sup>tei? / ˊnəj}

人 {1/2}

1 人の人 / 2 人の人

(66) ˊl̥ ˊt̚<sup>h</sup>a<sup>h</sup> <sup>h</sup>tei?

靴 対 1

1 そろいの靴

<sup>14</sup> 後続の 1 の位が「6」の場合に形式が異なる。声調は後続の 1 の位とともに 1 つの声調範囲を形成し、下降調となる。

- (67)    ʔa raʔ    ʔca:    kō  
          酒       瓶       1  
          1 瓶の酒

### 3.7 形容詞：修飾用法として

Choswateng 方言における形容詞は、名詞に後続させて修飾語として用いられる場合と、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合がある。ここでは、名詞を修飾する構造について述べる。

修飾用法として用いられる形容詞の形態としては、以下のようなものが代表的である。

1. 1 音節語幹  
     <sup>h</sup>dzō 「緑色の」、ʔnu: 「間違った」、<sup>h</sup>kō 「ひまな」
2. 重複語幹およびそれに準じるもの  
     ʔmi mje 「小さい」、<sup>h</sup>so<sup>h</sup>soʔ 「薄い」、ʔnaʔ naʔ 「黒い」
3. 1 音節語幹+接尾辞  
     ʔrēj bwə 「長い」、<sup>h</sup>tō ba 「空の」、<sup>h</sup>ci: ɕʰa 「明るい」
4. 2 音節語  
     <sup>n</sup>da<sup>n</sup>de 「大きい」、<sup>h</sup>kō rī 「高い」、<sup>n</sup>dzō rēj 「遠い」

重複タイプは、必ずしも第1音節と第2音節の音形式が同じになるとは限らない。また、重複それ自体は形態の一特徴であり、形容詞の修飾用法および単純な述語用法<sup>15</sup>であることを明示する以外に特別な意味機能があるわけではない。

文中で修飾語として用いられる場合、形容詞は被修飾名詞に後置されるのを基本とし、数詞は形容詞に後続する。形容詞が複数ある場合、数量を表す形容詞が最後にくる。

- (68)    ʔja-φ    ʔmbe duʔ    <sup>h</sup>mo<sup>h</sup>mo:    <sup>h</sup>dze pa-φ    ʔjuʔ  
          1-[絶]    花            赤い            多くの-[絶]    [存]  
          私は多くの赤い花を持っています。

### 3.8 主題標識

主題標識は/tə/<sup>16</sup>で、語用論的に特定の名詞句を主題化したいときに格標識の後ろに現れ、同時に名詞句の終止を示す。また、息継ぎや考えながら発話するときのフィラーとして機能する場合があり、必ずしも付加された名詞句を主題化しているとは限らない。

- (69)    ʔa lju-φ-tə    ʔɕwa-φ            <sup>h</sup>zō-nə  
          猫-[絶]-[主]    ねずみ-[絶]    捕まえる-[現認]            注<sup>17</sup>  
          猫とはねずみを捕まえるものです。

<sup>15</sup> 特定の述語用法の場合には重複しない例がある。4.3 参照。

<sup>16</sup> 音声学的には [tə, də, te, de, tō, dō] など、さまざまな音声実現が認められる。

<sup>17</sup> TAM 接辞の/nə/は後ろに他の TAM 接辞をとらないため、この発話は<sup>h</sup>zō/ 「捕まえる」が述語になる。もし/reʔ/などの判断動詞が後続する場合、この/nə/は名詞化接辞として機能し、構造が異なる。

次のような例では、語用論的な観点から必ず主題標識が用いられる。

- (70)    <sup>ˈ</sup>ɕwa-φ-tə            ʔa lju-φ    <sup>h</sup>caʔ-mē  
           ねずみ-[絶]-[主] 猫-[絶]        恐れる-[否/判]  
           ねずみが猫を恐れません。

#### 4 動詞句

##### 4.1 動詞句の基本構造

Choswateng 方言における動詞句は、動詞語幹が単独すなわち動詞連続を形成していない場合、おおよそ以下のような構造で現れる。

(方向接辞)-(否定辞/疑問接辞)-動詞語幹-(TAM 標示部分)-(疑問接辞/語気助辞)

このうち、TAM 標示部分は複数の接辞群から成立しており、否定辞がここに現れる場合もある。そのとき否定辞は動詞語幹に先行しえない。

##### 4.2 動詞の種類

動詞は述語動詞と本動詞に分けることができる。

###### 4.2.1 述語動詞

述語動詞には、判断動詞と存在動詞がある。これらは単独用法のほかに動詞句末接辞として置かれて動詞句を形成する要素にもなる。これらには後述の TAM 接辞はつかない。

判断動詞および存在動詞の一部には、語幹そのものに肯定と否定の2種がある。以下に一覧表を掲げる。

	肯定	否定
判断動詞	ʔi	ʔmē
	ʔreʔ	ʔma-reʔ
	ʔzē	
	ʔā / ʔā mboʔ	
存在動詞	ʔjuʔ	ʔneʔ
	ʔnō	ʔnə-nō / ʔma-nō
	ʔdoʔ	ʔnə-doʔ / ʔma-doʔ

判断動詞の /ʔi/ と /ʔreʔ/ の使い分けは、前者が発話内容に話者自らを関連づける (egophoric) ときに用いられ、そうでない (non-egophoric) 場合は後者が用いられる。 /ʔzē/ は事実関係の断定 (定義) を意味する場合によく用いられる。特別な否定形は認められない。 /ʔā, ʔā mboʔ/ の詳しい用法は不明である。なお、 /ʔā/ が単独で用いられる例は認められない。

- (71)    <sup>ˈ</sup>ŋa-φ    <sup>ˈ</sup>peʔ-φ            {ʔi/ʔzē}  
           1-[絶]   チベット人-[絶]    {[判]/[判]}  
           私はチベット人です。

- (72) ʼŋa-φ ʼlo sɿ-φ ʼmē  
 1-[絶] 先生-[絶] [否/判]  
 私は先生ではありません。
- (73) ʼkʰwə-φ ʼpʰɑʔ-φ ʼreʔ  
 3-[絶] ぶた-[絶] [判]  
 それはぶたです。
- (74) ʼʰlo ʰzō də ʰtciʔ ʼla mwə ʼnəj ka-φ ʼɕwo sē-φ ʼʔā mboʔ  
 [人名] と [人名] 2人-[絶] 学生-[絶] [判]  
 ロゾンとラモの2人は学生です。

過去の事柄について判断を表す場合、/ʼreʔ/が用いられる傾向にある。

- (75) ʼkʰwə-φ ʼŋē-tə ʼlo sɿ-φ ʼreʔ  
 1-[絶] 以前-[主] 先生-[絶] [判]  
 彼は以前先生でした。

推測を述べる場合には、判断動詞に後続する要素が存在するのを前提に、/ʼjī/が用いられる。

- (76) ʼtjə ʼʔa lju-φ-də ʼkʰo ʰdzi-tə ʼʔa-jī-ʰzei-ŋō  
 あの 猫-[絶]-[主] 3.[属]-[主] [疑]-[判]-[推]-[判]  
 あの猫は彼らの家のでしょう。

不確定な事柄についての話者の判断や話者個人の感想を述べる場合、判断動詞は/ʼzē/が選択され、なおかつ TAM 標識の中の述語動詞/-jī/を伴うことができる。

- (77) ʼkʰwə-φ ʼlo sɿ-φ ʼzē-jī  
 3-[絶] 先生-[絶] [判]-[判]  
 彼は先生でしょう。

存在動詞については、/ʼjuʔ/は主に所有および話者のよく知っている事物の存在を表し、/ʼnō/は見ている非人物の存在を表し、/ʼnɔʔ/は人物の存在を表すのが基本的な用法といえる。ただし、後2者の使い分けは話者によって判断基準が異なり、話者の管理下にある有生物（家畜なども含む）に/ʼnɔʔ/を用いる話者もいる。/ʼjuʔ, ʼnɔʔ/には判断動詞が後続できる。

- (78) ʼŋa-φ ʼʔa dɑʔ ʼji jə ʼmbū ʰtciʔ-φ ʼjuʔ  
 1-[絶] 宗教経典 巻 1-[絶] [存]  
 私は1巻の宗教経典を持っています。
- (79) ʼŋa-φ ʼpej tēi ʼnɔʔ  
 1-[絶] [地名] [存]  
 私は北京にいます。
- (80) ʼkʰwə-nə ʼtsʰə-φ ʼnɔʔ-reʔ  
 3-[位] 犬-[絶] [存]-[判]  
 彼のところには犬がいます。

- (81) ˦tɕʰõ ˦ŋɛ: ma-tə ˦ndzõ mba ˦htɕiʔ-φ ˦nõ  
 家 前-[主] 橋 1-[絶] [存]

家の前には1本の橋があります。

次のように、話者がその存在をよく知っているが見えない場合は/juʔ/が選択される。

- (82) ˦ɕwo tʰã-φ-tə ˦ndzõ ʰkʰa: {˦juʔ/\*˦nõ}  
 学校-[絶]-[主] 町のはずれ [存]

学校は町のはずれにあります。

判断動詞以外の TAM 接辞は存在動詞にはつかないため、文脈によって存在している状態の時期が決定される。

- (83) ˦ti ni: ˦tɕʰuʔ-φ ˦ka: ˦ndoʔ  
 あの日 2-[絶] どこに [存]

あの日あなたはどこにいましたか？

存在動詞の否定は/juʔ/が否定語幹/ɲɛʔ/をもつ。˦nõ/および/˦ndoʔ/の否定は、3つある否定辞(4.4.2 参照)を本来の差異にしたがって用いることが可能である。

- (84) ˦tsʰa-zə-φ ˦tɕʰə-ziʔ-φ ˦ɲɛʔ  
 食べる-[名]-[絶] 何-1-[絶] [否/存]

食べるものは何一つありません。

- (85) ˦ʔa ni: ˦tɕʰõ ˦nĩ-φ ˦ma-nõ  
 祖父 家 古い-[絶] [否]-[存]

祖父の古い家はなくなっています。

- (86) a ˦lõ-φ ˦ɲɛʔ  
 道 [否/存]

道は(そもそも)ありません。

- b ˦lõ-φ ˦ɲə-nõ  
 道 [否]-[存]

道は(以前はありましたが今はなくなって)ありません。

なお、本動詞/˦deʔ/「いる、住んでいる」も意味的に有生物の存在表現として用いられる<sup>18</sup>。

- (87) ˦tɕʰõ ˦nõ ni ˦ndɕu: mə-φ ˦deʔ-nə  
 家 内 客-[絶] いる-[現認]

家の中にはお客がいます。

- (88) ˦ni: ˦puw sʰa: φ ˦ma-˦deʔ-nõ  
 1.[属] 息子-[絶] [否]-いる-[判]

私の息子がいなくなりました。

<sup>18</sup> /˦deʔ/「いる」を本動詞とするのは、たとえば 4.5.1 で扱う TAM 接辞のうち、判断動詞以外が付加できることによる。



#### 4.2.2 本動詞

動詞の形態としては、次のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹

<sup>h</sup>tʰɔ̃「飲む」、<sup>h</sup>mwə「耕す」

2. 語幹（音節数を問わない）＋補助動詞（/<sup>h</sup>dzoʔ/や/<sup>h</sup>jeʔ/）「する」

ʔnə<sup>h</sup>da<sup>h</sup><sup>h</sup>dzoʔ「銃撃する」、<sup>h</sup>də<sup>h</sup>dō<sup>h</sup><sup>h</sup>jeʔ「衝突する」

/<sup>h</sup>dzoʔ/に先行する部分には漢語の動詞がそのまま挿入されることがある。

本動詞の語幹自体は無変化であるが、命令形と非命令形で語幹が異なる動詞がある。

語義	非命令形	命令形
行く	<sup>h</sup> gwə	<sup>h</sup> ō
来る	<sup>h</sup> ō	<sup>h</sup> uʔ

また、動詞の要求する項の数とその格標示の観点から、次のような分類が可能である。

1. 自動詞（主語は絶対格）

<sup>h</sup>gwə「行く」、<sup>h</sup>ju「泣く」

2. 他動詞（行為者は能格か絶対格、被動者は絶対格）

ʔnə<sup>h</sup>「買う」、<sup>h</sup>ci<sup>h</sup>「書く」

本動詞のみで完結する文は、ほとんどの場合「命令」「勧誘」などの意味を表す。

- (89) <sup>h</sup>tʰɔ̃-φ <sup>h</sup>rō rō <sup>h</sup>tʰɛ  
 2-[絶] 自分自身で 考える  
 あなたは自分自身で考えなさい。

- (90) <sup>h</sup>ci<sup>h</sup>-φ <sup>h</sup>ma<sup>h</sup>dō  
 子供-[絶] [否]-叩く  
 子供を叩くな。

#### 4.3 形容詞：述語用法として

ここでは、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合の形容詞について述べる。

形容詞の形態は修飾用法の場合と変わらない。ただし、接辞類が付加されるとき、重複するタイプの語幹は非重複形となり、/pwə, mwə/などの接尾辞が脱落するのが通例である。また、本動詞と同様に何も付加されずに名詞句として用いられるが、格標識を付加する場合は名詞化接辞/tə/が必要とされる。

- (91) <sup>h</sup>dzi<sup>h</sup>-tə-φ <sup>h</sup>dzi<sup>h</sup>-nə  
 美しい-[名]-[絶] 美しい-[現認]  
 美しいことには美しいです。

形容詞述語が比較級を表す場合、接辞類が付加されてもされなくても、重複するタイプの語

幹は非重複形となり、/pwə, mwə/などの接尾辞が脱落するのが通例である。

- (92) ʔkʰwə-φ ʔŋa-peʔ ʔlwə ʔhso ʔtʰə  
 3-[絶] 1-[比] 年 3 大きい  
 彼は私より3歳年上です。

- (93) ʔmjē-φ ʔtʰa-tə-peʔ ʔkʰoʔ ʔdzoʔ ʔjaʔ-reʔ  
 薬-[絶] 食べる-[名]-[比] 点滴を打つ よい-[判]  
 薬を飲むよりも点滴を打つほうがよいです。

形容詞述語が最上級を表す場合、比較級の形式に接尾辞/wa/がつき、かつ直前に/ʔkē/が置かれる。接尾辞/wa/の後ろに TAM 接辞も付加されうる。

- (94) ʔkʰwə-φ-tə ʔkʰo ʔdzi ʔpā ʔnō ni ʔkē ʔtʰo wa-nə  
 3-[絶]-[主] 3-[属] クラス 内 最も高い-[現認]  
 彼は彼らのクラスの中で最も背が高いです。

- (95) ʔŋa:çō ʔna ʔkē ʔtʰə wa-φ ʔŋa:  
 買う-[受] ならば 最も大きい-[絶] 買う  
 買うのならば、最も大きいものを買いなさい。

形容詞述語はたいてい主語の状態を表すが、構文によっては発話外に意味上の主語をとることがある。

- (96) ʔtʰuʔ-φ ʔçhā-nə ʔa-ʔdzi:nə  
 2-[絶] 心-[位] [疑]-美しい-[現認]  
 あなたは心の中で(それを)美しいと感じますか？

#### 4.4 接頭辞類

##### 4.4.1 方向接辞

方向接辞と考えられる要素には、次の5種類がある<sup>19</sup>。

1. 上方：ʔja:-
2. 下方：ʔwə-
3. 向心：ʔtsʰə-
4. 離心：ʔpʰa-
5. 中立：ʔpə-

中立以外の接辞は、通常移動動詞に付加され、移動の方向を示す。向心・離心の基準点は、通常発話者に置かれる。中立の接辞は、動作の完了を強調したり、命令の意味をもつ。また、特定の動詞と結びついて直接方向とは関係のない慣用的な表現もあるが、その場合は方向接辞と共通の要素は独立した声調を担う場合があり、ふるまいが異なる。

<sup>19</sup> 「中立」の方向接辞は以下に解説するように、純粹に方向を示すものではないが、接辞それ自体のふるまいや他の方向接辞とも共起しない点を考慮し、方向接辞と同列に扱うことにする。

- (97) ʼsh̥5 nə ʼtʃʰu tsʰuʔ ʰtʃu wə-ŋgwə-zə  
 明日 時間 10 [方]-行く-[未]  
 (私は) 明日 10 時に下の/下手のほうに行きます。
- (98) ʼtʃʰuʔ-φ ʰtsʰə-fiō  
 2-[絶] [方]-来る  
 あなたはこちらに向かって来ます。(帰ってきます)
- (99) ʼŋe: ʼjə ʔə-φ ʰkʰo-tə ʰpə-ʰtjeʔ  
 1.[能] 本-[絶] 3-[絶] [方]-与える  
 私は本を彼にあげました。

#### 4.4.2 否定辞

否定辞には、以下の3種がある。

1. 未来否定：ʼnə-
2. 非未来<sup>20</sup> 否定：ʼma-
3. 状態否定：ʼku:-

未来否定と非未来否定の異なりは次のようである。

- (100) a ʼŋa-φ ʰha ʼnə-gwə  
 1-[絶] [否]-わかる-[判]  
 私はわかりません。(1つもわかるところに達していない) 注<sup>21</sup>
- b ʼŋa-φ ʰha ʼma-gwə  
 1-[絶] [否]-わかる-[判]  
 私はわかっています。(少しはわかったところがある)

否定辞は、それが動詞句のどこに配されようとも、必ず声調を担う。

- (101) ʼŋa-φ ʰʃe̞j-nə ʰgwə-ʼnə-gu:  
 1-[絶] 畑-[位] 行く-[否]-[必要]  
 私は畑へ行かなくてもよいです。

非未来否定は禁止命令<sup>22</sup>にも用いられる。

- (102) ʼçi:-φ ʼma-ʰdō  
 子供-[絶] [否]-叩く  
 子供を叩くな。

状態否定は述語動詞や形容詞の否定に用いられる。

<sup>20</sup> 非未来とは行為がすでに起こっている「現在」および「過去」の事柄をさす。また、[ʼmə]と発音されることもある。

<sup>21</sup> (100)の動詞/ʰha ʼkwə/「わかる」のような形態素分析のできない複音節からなる動詞は、その接辞類を最終音節に付加するが、語釈の上では接頭辞が初頭にくる。

<sup>22</sup> 禁止命令の/ʼma-/は常に[ʼma]と発音される。非未来否定か禁止命令かは文脈によって決まる。

- (103) ʔkʰwə-φ-tə ʔtsʰõ mba-φ ʔka:zẽ  
 3-[絶]-[主] 商人-[絶] [否]-[判]  
 彼は商人ではありません。
- (104) ʔʔə ndjə-φ-tə ʔtʂʰa ʔka:nẽ  
 これ-[絶]-[主] 食べる [否]-してよい  
 これは食べられません。

#### 4.4.3 疑問接辞

疑問接辞は疑問文を形成するとき用いられるほか、推量や推測を述べるときにも現れる。

疑問文を形成する接辞は接頭辞と接尾辞がある。ただし両者は共起しない。

ここでは接頭辞について述べる。疑問接頭辞には/ʔa-/が認められる。疑問接頭辞は動詞語幹に否定辞がつかない場合に限って現れる。動詞が TAM 接辞を伴う場合、疑問接頭辞は動詞語幹ではなく TAM 接辞の直前にも現れうる。

- (105) ʔndjə ʔjə jə-φ-tə ʔtɕʰiʔ-tə-φ ʔʔa-reʔ  
 この 本-[絶]-[主] 2.[属]-[名]-[絶] [疑]-[判]  
 この本はあなたのですか？

選択疑問文の場合は疑問接頭辞がついた述語動詞に由来するであろうʔa reʔが用いられる。

- (106) ʔtɕʰuʔ-φ ʔmi ɕjẽ-φ ʔtʂʰa-zə ʔʔa reʔ ʔɕ sɿ-φ  
 2-[絶] ビーフン-[絶] 食べる-[未] [選択疑問] もち米麵-[絶]  
 ʔtʂʰa-zə  
 食べる-[未]  
 あなたはビーフンを食べますか、それとももち米麵を食べますか？

疑問接頭辞ʔa-と同一形態であるが、疑問を表さず自問を表す事例も認められる。

- (107) ʔndjə ʔɕʰa-φ-tə ʔhta-ʰde: nə tə ʔndzi:nə de  
 この 肉-[絶]-[主] 見る-[進] あと 美しい-[現認] て  
 ʔʔa-zõ-tʂʰə  
 [疑]-おいしい-[否/推]  
 この肉は見てみると美しいですが、おいしいかな？

推量や推測を述べる場合、ʔa-が動詞語幹もしくは特定の接尾辞に先行し、かつ動詞句末に述語動詞を伴う形式で表す事例がある。

- (108) ʔkʰwə-φ ʔʔa-ŋgwə-ʰze:zẽ  
 3-[絶] [疑]-行く-[推]-[判]  
 彼はたぶん行きます。

#### 4.5 接尾辞類

##### 4.5.1 TAM を表す接辞群

動詞語幹の後部には TAM を表す接辞がつく。この接辞は動詞句に付加され、限られた例で複数の要素が共起することもある。それに加えて、話者の発話に対する態度 (M) を表現する述

語動詞が後続しうる。配列をモデル化すると、次のようになる。

(TA 接辞-1)-(TA 接辞-2)-(AM 接辞)-(述語動詞)

一番うしろに語気を表す助辞もしくは諾否疑問用の疑問接辞が付加されうる。また、可能性・推測を表す表現を構成する要素も述語動詞に後続しうる。

それぞれに入る接辞類の形態の一覧は次のようである。

1. TA 接辞-1

-zə, -tʃə, -<sup>h</sup>dzə, -tci

2. TA 接辞-2

-gwi, -<sup>h</sup>dei, -e<sup>h</sup>oʔ, -t<sup>h</sup>ũ, -t<sup>h</sup>i, -ts<sup>h</sup>ɿ, -wa, -e<sup>h</sup>õ, -ŋõ, -<sup>h</sup>zei, -sə

3. AM 接辞

-nə, -caʔ

4. 述語動詞

-jĩ, -mĩ, -reʔ, -zẽ, -ŋõ, -<sup>n</sup>doʔ

TA 接辞を4種類に分けたのは、配列のみが問題になるのではなく、次のような異なりが認められることによる。

TA 接辞-1 は述語動詞が付加される場合が多く、かつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができないものである。

TA 接辞-2 は述語動詞を必ずしも必要とせずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができるものである。ここに含まれる接辞群は、1つの動詞句に並列して用いることができる。

AM 接辞は基本的に述語動詞をとらずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができないものである。

述語動詞は、大半がそれ自体単独で用いられる場合(4.2.1 参照)と同一の形態である。

ただし動詞句は以上のいずれの接辞を伴わなくても文を終止することができる。

述語動詞・本動詞・形容詞に共通して付加できるものと、どれかに限定されるものに分かれる。また、述語動詞が本動詞の位置を占め、以上の接辞類をとる場合もあるが、あまり見かけない。

動詞句を否定する場合は否定辞(接頭辞)が本動詞につく場合と、動詞句末接辞に否定形を用いる場合がある。疑問文の場合は疑問接頭辞が TAM を表す接辞につくことがある。TAM 接辞にこれらの接頭辞を付加する場合は本動詞と異なる独立の声調範囲を形成する。述語動詞の否定形と同じ形式が単独で用いられる場合も同様である。

TA 接辞-1 の例

-zə (不確定未来)

カムチベット語小中甸・吹亞頂[Choswateng] 方言の文法スケッチ

(109) ʔtɕʰuʔ-φ ʔsʰu-tɕə ʔtə-zə  
 2-[絶] 誰-[与] 尋ねる-[未]  
 あなたは誰に尋ねるのでしょうか？

(110) ʔtjə-φ ʔla ʔjaʔ-zə-nō  
 あれ-[絶] も よい-[未]-[判]  
 (そうであれば) あれはよいと思います。

-tʂə (予定未来)

(111) ʔtɕʰuʔ-φ ʔtə rēj ʔgwə-tʂə-jī ʔtə ʔsʰō nə ʔgwə-tʂə-jī  
 2-[絶] 今日 行く-[予未]-[判] または 明日 行く-[予未]-[判]  
 あなたは今日行くつもりですか、それとも明日行くつもりですか？

-ʰdzə (状態、習慣)

(112) ʔŋa-φ ʔrō rō ʔa: ʔtjə fiō ʰda ʔkə zoʔ ʔjeʔ-ʰdzə-reʔ ʔsʰō-nə  
 1-[絶] 自身で ああ あのように どう する-[状態]-[判] 思う-[現認]  
 私自身「ああ、どうやったらあのようなになるのか」と思います。

(113) ʔkʰwə-φ ʔmi: tʰē ʔkwo mī ʔjī-ʰdzə-reʔ  
 3-[絶] いつも 過敏症のある [判]-[状態]-[判]  
 彼はいつも過敏症のある状態です。

-tɕi (完了状態)

(114) ʔmbe duʔ ʰja-φ ʔʰtʂəʔ-tɕi-nə  
 花瓶-[絶] 割れる-[完了状態]-[現認]  
 花瓶は割れたままです。

TA 接辞-2 の例

-gɕ: (必要性を合意する未来)

(115) ʔŋa-φ ʔʂēj-nə ʔgwə-ʔnə-gɕ:  
 1-[絶] 畑-[位] 行く-[否]-[必要]  
 私は畑へ行かなくてもよいです。

-ʰde: (現在進行)

(116) ʔnə ʔkō-φ ʔtsʰə la ʔdō-ʰde:-nə  
 人 群れ-[絶] 踊る-[進]-[現認]  
 多くの人が踊っています。

-ɕʰoʔ (継続)

(117) ʔtə rēj ʔtʂʰi fia ʔna ʔde-φ ʔpəʔ-ɕʰoʔ  
 今日 雨 大きな-[絶] 降る-[継続]  
 今日大雨が降り続いています。

-tʰū (現在完了)

- (118) ʼŋa-φ ʼnde za ʼlwə ʼh[ʃw ʼnə ʃʰw-φ ʼfi de: tʰũ  
 1-[絶] ここ 年 10 20-[絶] 住む-[完]  
 私はここに数十年住んでいました。

- (119) ʼtsʰaj-φ ʼʰjəʔ ʼfiō-tʰũ  
 おかず-[絶] 冷える 来る-[完]  
 おかずは冷たくなりました。

-tʰũに否定辞がつく場合、「まだ～していない」の意味になる。

- (120) ʼkʰwə-φ ʼtʰu: ʼhse: ʼma-tʰũ  
 3-[絶] まだ 目を覚ます [否]-[完]  
 彼はまだ目を覚ましていません。

-tʰi (達成)

- (121) ʼkʰwə-φ ʼʃũ pã ʼje: tʰi  
 3-[絶] 仕事に行く-[達]  
 彼は仕事に行きました。

-tsʰ₁ (完了)

- (122) ʼkʰwə-φ ʼfiō-ŋgwə-tʰ₁ ʼjī tə ʼŋa-φ ʼŋgwə ʼfiō-wa-sʰə  
 3-[絶] [方]-行く-[完] のち 1-[絶] ちょうど 来る-[過]-[?]  
 彼が出ていってから、私がちょうど来ました。

-wa (過去)

- (123) ʼtʰeʰuʔ-φ ʼka: jə ʼŋu-wa  
 2-[絶] どこで 買う-[過]  
 あなたはどこで買いましたか？

-eō (発話者にかかわる受益)

- (124) ʼŋa-φ ʼfiō-tə ʼhʰtʰiʔ ʼhʰtse la ʼʃō mwə ʼnō-eō  
 1-[絶] 来る-[名] 1 とても おいしい においがする-[受]  
 私は(部屋に)入るなりとてもよい香りがしました。(いい気持ちです)

受益以外に、発話者による行為が近く完了した近過去の意味でも用いられる。

- (125) ʼŋa-φ ʼŋgwə je ʼhpeʔ-eō  
 1-[絶] さっき 着く-[近過去]  
 私はさっき着きました。

-nō (経験)

- (126) ʼtʰeʰuʔ-φ ʼŋu: tə ʼjə je-φ ʼŋa-φ ʼkē ʼhʰta-nō  
 2-[絶] 買う-[名] 本-[絶] 1-[絶] すべて 見る-[経]  
 あなたが買った本については、私はすべて読んだことがあります。

- (127) ʼŋa-φ ʼkʰwə-φ ʼnʰtsʰa ʼŋgwə-nō  
 1-[絶] 3-[絶] 家-[絶] 行く-[経]  
 私は彼の家に行ったことがあります。

-<sup>h</sup>ze: 23 (推測)

- (128) ʔ<sup>h</sup>wə-φ ʔ<sup>h</sup>gwə-ʔsə-ʔa-<sup>h</sup>ze:-ŋō  
 3-[絶] 行く-[未]-[疑]-[推]-[判]  
 彼はたぶん行くでしょう。

-sə (伝聞)

- (129) ʔ<sup>h</sup>wə-φ ʔ<sup>h</sup>tʰō-ʔa-tʰŋ-sə ʔa jī  
 3-[絶] 飲む-[疑]-[完]-[伝聞] [付加疑問]  
 彼は飲み終えたのでしょうかねえ？

AM 接辞の例

-nə (現認)

- (130) ʔ<sup>h</sup>wə-φ ʔ<sup>h</sup>jdʔ-nə  
 3-[絶] 滑って転ぶ-[現認]  
 彼は滑って転びました。(その現場を目撃しました)

-caʔ (伝聞、非視覚確認)

- (131) ʔ<sup>h</sup>wə-φ ʔlo sɿ-φ ʔā-<sup>h</sup>ze:-caʔ  
 3-[絶] 先生-[絶] [判]-[推]-[伝聞]  
 彼は先生だそうです。
- (132) ʔndjə ʔsē-φ-tə ʔma-zō-caʔ  
 この ごはん-[絶]-[主] [否]-おいしい-[非視覚確認]  
 このごはんはおいしくありません。

述語動詞の例

-jī/-mī (判断)

- (133) ʔŋa-φ ʔnə-ŋgwə ʔsō-ʔmī  
 1-[絶] [否]-行く 思う-[否/判]  
 私は行かないと思っているのではありません。

-ʔā mboʔ (判断)

- (134) ʔ<sup>h</sup>wə-φ ʔkʰɛ tsō ʔfō-ʔā mboʔ  
 3-[絶] 昨日 来る-[判]  
 彼は昨日来ました。

-ŋō (判断)

- (135) ʔtʰɿ fia-φ ʔpɔʔ-ʔa-<sup>h</sup>ze:-ŋō  
 雨-[絶] 降る-[疑]-[推]-[判]  
 雨が降っているでしょう。

-<sup>h</sup>doʔ (進行)

<sup>23</sup> この形式は単独で用いられることがほとんどなく、疑問接頭辞か述語動詞を伴う。



- (136) ʔtɕʰuʔ-φ ʔtɕʰə-φ ʔjeʔ-ndɔʔ  
 2-[絶] 何-[絶] する-[進]  
 あなたは何をしているのですか？

以上のうち、いくつかの接辞は組み合わせて用いることができる。

- (137) ʔŋa-φ ʔtɕʰuʔ ʔŋi-tsə ʔŋõ-tʰũ-wa-nə ʰsə jã-φ ʔtɕʰa  
 1-[絶] 2.[能] 1-[与] 炒める-[完]-[過]-[名] 豆-[絶] 食べる  
 私はあなたがわたしのために炒めてくれた豆を食べましょう。

#### 4.5.2 疑問接尾辞・語気助辞

疑問接尾辞には /-ja/ と /-fiɛ:/ があ。主に動詞句に否定辞が含まれているような例、すなわち否定諾否疑問文を形成するときに用いられる。前者は常に独立の声調を担うが、後者は声調を担わない。いずれもやや反語的なニュアンスを帯びる。

- (138) ʔtɕʰuʔ-φ la ʔha ʔma-gwə-ʔja  
 2-[絶] も [否]-知っている-[疑]  
 あなたも知らないのですか？ (いや、知っているでしょう？)

- (139) ʔŋɛ: ʔtɕʰiʔ-tsə ʔce:-jĩ-mě-fiɛ:  
 1.[能] 2-[与] 言う-[判]-[否/判]-[疑]  
 私はあなたに言っていませんでしたか？ (言った気がします)

語気助辞としてもっともよく観察されるのは /-fia/ である。疑問接尾辞と異なり、単独の声調を担うことはない。「念押し」の意味で用いられ、TAM は先行する接辞群によって決まると考えられる。

- (140) ʔŋa-φ ʔŋẽ ʔjoʔ-fia  
 1-[絶] 先に 寝る-[気]  
 私は先に寝ますね。

ほかにも、命令のときに用いられる /-ziʔ/ や「依頼」の意味で用いられる /-ruʔ/ も語気助辞に数えられる。

- (141) ʔtɕʰuʔ-φ ʔjə ʔə-φ ʔhta-ziʔ  
 2-[絶] 本-[絶] 見る-[気]  
 あなたは本を読みなさい。

- (142) ʔjə ʔə-φ ʔfiə tje ʔma-ʰzɑʔ-ruʔ  
 本-[絶] あそこ [否]-置く-[気]  
 本をあそこに置かないで下さい。

なお、 /-ziʔ/ と /-ruʔ/ が連続した /-zi: ruʔ/ は「祈願」の語気助辞として用いられる。

- (143) ʔtɕʰuʔ-φ ʔjaʔ pwə-ʔzi: ruʔ  
 2-[絶] よい-[気]  
 お元気で。(あなたがよくありますように)

#### 4.5.3 可能性・推測を表す表現

「たぶん～、おそらく～」などの可能性・推測をあらわす表現は非常に豊富にあり、全体像はまだつかめていない。基本的な構成法には、肯定の推測の場合「/ʔa-/ + 本動詞 + /-<sup>h</sup>ze:/ + 述語動詞」となるが、中には「本動詞 + 述語動詞 + /ʔa-<sup>h</sup>ze:/ + 述語動詞」となる事例もある。このときの述語動詞は判断動詞に限られ、また上述の判断動詞の用法とは異なって用いられる。否定の推測の場合「/ʔa-/ + 本動詞 + /-tʂ<sup>h</sup>ə/」となる。

- (144) ʔ<sup>h</sup>wə-φ ʔjəʔ-ʔä-ʔa-<sup>h</sup>ze:-reʔ  
 3-[絶] [存]-[判]-[疑]-[推]-[判]  
 彼はおそらく持っているでしょう。

- (145) ʔ<sup>h</sup>wə-φ ʔa-<sup>h</sup>tʂ<sup>h</sup>a-tʂ<sup>h</sup>ə  
 3-[絶] [疑]-食べる-[否定推測]  
 彼はおそらく食べていないでしょう。

#### 4.6 動詞連続

動詞語幹は何の接続要素を伴うことなく並列することができる。継起する動作を表したり、移動動詞やその他「可能」「使役」などを表す動詞も動詞連続を形成できる。動詞連続を構成する第1の動詞語幹が1音節語で接頭辞・接尾辞ともに取らない場合、第1の動詞語幹と第2の動詞語幹で1つの声調範囲を形成する。

- (146) ʔtʂ<sup>h</sup>əʔ-φ ʔka zē ʔ<sup>h</sup>tʂ<sup>h</sup>a-<sup>h</sup>gwə  
 2-[絶] いつ 食べる-行く  
 あなたはいつ食べに行きますか？

- (147) ʔŋa-φ ʔj<sup>h</sup>keʔ-φ -<sup>h</sup>zō-<sup>h</sup>dō-nə  
 1-[絶] 英語-[絶] 学ぶ-愛する-[現認]  
 私は英語を学ぶのが好きです。

- (148) ʔŋa-φ ʔtə<sup>h</sup>tʂiʔ ʔ[ɛ-<sup>h</sup>tʂoʔ-ruʔ  
 1-[絶] ちょっと 考える-させる-[気]  
 私に考えさせてください。

#### 4.7 呼応する動詞句表現

Choswateng 方言には2句以上の動詞句を結ぶ固定された表現があり、そこに現れる現象には以上の記述に現れなかったものも含まれる。

[部分重複]-jō + 動詞/形容詞 + [部分重複]-jō + 動詞/形容詞 「～も～も」

- (149) ʔ<sup>h</sup>o<sup>h</sup> dʒi ʔpu s<sup>h</sup>a:-φ-tə ʔ<sup>h</sup>kō-jō -<sup>h</sup>kō rī ʔ<sup>h</sup>dʒaʔ-jō -<sup>h</sup>dʒaʔ pa  
 3.[属] 息子-[絶]-[主] [重]-も 高い [重]-も 太い  
 彼の家の子息は背も高くよく太っています。

ʔ<sup>h</sup>o: rə + 形容詞 + ʔ<sup>h</sup>o: rə + 形容詞 「時に～時に～」

- (150) ʔʰo: rə ʔʰa: ʔʰo: rə ʔcō  
 時に 暑い 時に 寒い  
 時には暑く、時には寒いです。

ʔjō+動詞句+ʔjō+動詞句「～したり～したりする」

- (151) ʔjō ʔʰtʂʰa ʔjō ʔma-ʔʰtʂʰa  
 たり 食べる たり [否]-食べる  
 食べたり食べなかつたりします。

ʔmē na tə+動詞句+ʔmē na tə+動詞句「～するか～するかである」

- (152) ʔndjə ʔjə ʔə-φ ʔmē na tə ʔpəʰtsō ʔmē na tə ʔnə kə-tə ʔpəʰtjeʔ  
 この 本-[絶] するか [方]-売る するか 他人-[与] [方]-与える  
 この本は、売ってしまうか、ほかの人にあげなさい。

ʔpu +形容詞+ʔpu +形容詞「より～ならより～」/ʔpu-peʔ ʔpu<sup>24</sup> +動詞句「どんどん～」

- (153) ʔtʂʰuʔ-φ ʔpu-peʔ ʔpu ʔma-φ ʔda-ŋō  
 2-[絶] どんどん 母-[絶] 似ている-[判]  
 あなたはどんどん母親に似てきています。

## 5 文のタイプと分類

### 5.1 文の成立

Choswateng 方言における発話は、間投詞のようなものを除いたとしても、名詞か動詞のどちらか一方で成立する 1 語文がある。

- (154) ʔpʰaʔ-φ  
 ぶた-[絶]  
 ぶた (だ) !

- (155) ʔŋgwə  
 行く  
 行こう。

(154) は、発話者が家畜小屋に何がいるのか見たのちの発話として成立する。(155) は頻繁に認められる発話である。

また、名詞句からなる 1 語文を除けば、動詞句を伴わない名詞文はほとんど用いられない。ただし、定義的な意味をもつ発話は、述語動詞を省略する表現が認められる。ただし頻繁には現れない。

- (156) ʔtə rēj-φ ʔkʰe tsō-jə ʔshō nə-φ  
 今日-[絶] 昨日-[属] 明日-[絶]  
 今日は昨日の明日 (です)。

<sup>24</sup> 形態素 ʔpu 自体の意味は不明であるが、-peʔ は比較格標識である。

また、間投詞を除いて名詞句からも動詞句からも漏れる語が認められる。次のような例は副詞と呼ぶことができる：/la/<sup>25</sup>「～も（また）」、/rõ rõi/「～自身（で）」、/kě kě/「みんな（で）」、/ʰtse la/「とても」など。副詞は基本的に修飾する動詞句の直前に置かれる。ただし/la/は名詞句に後続する形で用いられる。

(157) ʰkʰwə-φ-tə ʰrõ rõi ʰja: ʰtse la ʰsõ  
 3-[絶]-[主] 自身 上の とても 思う  
 彼は自分自身誇らしいととても思っています。

(158) ʰkʰwə-φ ʰgwə-çə: ʰna ʰja-φ ʰla ʰgwə  
 3-[絶] 行く-言う ならば 1-[絶] も 行く  
 彼が行くと言うなら、私も行きましょう。

接続詞については 5.4 を参照。

## 5.2 文のタイプ

Choswateng 方言においては、平叙文と疑問文が形態統語的に明確に区別される。命令文は命令の対象（通常は2人称）が伴わず発話として成立している場合をいうが、実際にはほとんどの場合で2人称代名詞が文中に現れることが可能で、このとき記述の上では平叙文と変わらず、発話時の語気などによって機能が変わってくるといえる。また、文のタイプとしては勧奨文や祈願文が言及されうるが、Choswateng 方言では命令文もしくは平叙文と形式上変わることがない。

以下、平叙文、疑問文、命令文について記述する。

### 5.2.1 平叙文

(159) ʰkʰwə-φ ʰpi:φ ʰjuʔ-reʔ  
 3-[絶] 子牛-[絶] [存]-[判]  
 彼は子牛を持っています。

(160) ʰkʰwə-φ ʰma-ᵐtʰõ-tʰi  
 3-[絶] [否]-飲む-[達]  
 彼は飲みませんでした。

次の文は意味的には禁止命令を表しているが、文のタイプとしては平叙文と変わらない。

(161) ʰtçʰʰʔ-φ ʰjə ʰjə-φ ʰma-çi:  
 2-[絶] 文字-[絶] [否]-書く  
 あなたは字を書いてはいけません。

次の文は意味的に祈願を表しているが、文のタイプとしては平叙文と変わらない。

<sup>25</sup> 声調は不定である。

- (162) ʔtɕʰuʔ-φ ʰi de mwə-ʔzi ruʔ  
 2-[絶] 元気だ-[気]  
 お元気で。(あなたが元気でありますように)

### 5.2.2 疑問文

疑問文には諾否疑問文、疑問詞疑問文、付加疑問文、選択疑問文などの種類がある。

諾否疑問文は疑問接辞を動詞句に付加して表す。4.1 で述べたように、疑問接頭辞は動詞/形容詞語幹の直前に付加されるか、TAM 接辞群の中の TA 接辞-2 および述語動詞の直前に付加される。疑問接尾辞の場合は動詞句末に付加される。

- (163) ʔtɕʰuʔ-φ ʔa-nʰõ-çõ  
 2-[絶] [疑]-見える-[受]  
 あなたには見えませんか？
- (164) ʔtɕʰuʔ-φ ʔa-jaʔ-nə  
 2-[絶] [疑]-よい-[現認]  
 あなたは元気ですか？
- (165) ʔtɕʰuʔ-φ ʔsʰeʔ-ʔa-tʰũ-çõ  
 2-[絶] 疲れる-[疑]-[完]-[受]  
 あなたは疲れませんか？
- (166) ʔkʰwə-φ ʔla sʰa ʔgwə-ʔa-reʔ  
 3-[絶] [地名] 行く-[疑]-[判]  
 彼はラサに行きましたか？
- (167) ʔtɕʰuʔ-φ ʔma-ʰgũ-ʔja  
 2-[絶] [否]-必要である-[疑]  
 あなたはいらないのですか？
- (168) ʔkʰwə-φ ʔçwo sɛ-φ ʔmẽ-ʔa-reʔ  
 3-[絶] 学生-[絶] [否/判]-[疑]-[判]  
 彼は学生でないのですか？
- (169) ʔkʰwə-φ ʔnʰõ-ʔma-n dɔʔ-fiɛ:  
 3-[絶] 飲む-[否]-[進]-[疑]  
 彼は飲んでいなかったのですか？

付加疑問文は原則文末に「ʔa/+判断動詞」を配するが、声調が異なるものに、ʔa reʔがある<sup>26</sup>。これらの要素が付加疑問文を形成する要素として現れる場合、語源のように形態素分析を行わない。

<sup>26</sup> この要素は ʔa-reʔ ([疑]-[判]) に由来するものである。ただし声調のパターンが異なる。この慣用用法といえるだろう。

- (170) ʔo<sup>n</sup>dzɔ    ʔje:-<sup>h</sup>gɯ:    ʔa reʔ  
 このように    する-[必要]    [付加疑問]  
 このようにするべきですよ？

- (171) ʔtɕ<sup>h</sup>ɯʔ-φ    ʔh<sup>h</sup>pē-φ    ʔka:-<sup>n</sup>doʔ    ʔa jī  
 2-[絶]    兄弟-[絶]    [否]-[存]    [付加疑問]  
 あなたには兄弟がいないのですよ？

選択疑問文の場合、選択する要素の間にʔa reʔ を配する<sup>27</sup>か、または接続詞ʔtə 「または」を用いる。

- (172) ʔtɕ<sup>h</sup>ɯʔ-φ    ʔmi ɕjē-φ    ʔtɕ<sup>h</sup>a-zə    ʔa reʔ    ʔɛ sɿ-φ  
 2-[絶]    ビーフン-[絶]    食べる-[未]    [選択疑問]    もち米麵-[絶]  
 ʔtɕ<sup>h</sup>a-zə  
 食べる-[未]  
 あなたはビーフンを食べますか、それとももち米麵を食べますか？

- (173) ʔ<sup>n</sup>djə    ʔjə ʔə-φ-tə    ʔtɕ<sup>h</sup>iʔ-tə-φ    ʔa-reʔ    ʔtə    ʔtɕ<sup>h</sup>iʔ-tə-φ  
 この    本-[絶]-[主]    2.[属]-[名]-[絶]    [疑]-[判]    または    3.[属]-[名]-[絶]  
 ʔa-reʔ  
 [疑]-[判]  
 この本はあなたのですか、それとも彼のですか？

### 5.2.3 命令文

- (174) ʔlɔ-zɿʔ  
 起きる-[気]  
 起き上がりなさい。

- (175) ʔma-ɕa  
 [否]-動く  
 動くな！

次のように、勧誘も命令文と構造的に同じになる。

- (176) ʔ<sup>n</sup>gwə  
 行く  
 行きましょう。

### 5.3 文の埋め込み

平叙文の埋め込みでは、補文標識を伴わない。

<sup>27</sup> これも付加疑問の事例と同じく、ʔa-reʔ ([疑]-[判]) に由来するといえ、また声調パターンも異なっ  
 て現れる。同様に、語源のように形態素分析を行わない。

(177) ʼŋa-φ ʼtʂʰa-ʼma-ŋō ʼjō ʼmī  
 1-[絶] 食べる-[否]-[経] も [判/否]  
 私は食べたことがないわけでもありません。

(178) ʼkʰwə-φ ʼŋgwə ʼcə: ʼna ʼŋa-φ ʼla ʼŋgwə  
 3-[絶] 行く 言う ならば 1-[絶] も 行く  
 彼が行くというのなら、私も行きます。

諾否疑問文の埋め込みでは、埋め込まれた文に補文標識/-tci/を伴うことが多い。

(179) ʼkʰo ʰdzɪ ʼma-φ ʼkʰwə-φ ʼje ʰə-φ ʼʔa-ʰdēj-tci ʼhsō-tsə  
 3.[属] 母-[絶] 3-[絶] 本-[絶] [疑]-読む-[補] 思う-[気]  
 彼の母は彼が勉強するかどうか心配しています。

疑問詞疑問文の埋め込みでは、補文標識を伴わない。

(180) ʼtʂʰuʔ-φ ʼʔa ni-φ ʼmbejʔ ʼtʂʰə-φ ʼjeʔ-ʰdzə ʼsɪ:  
 2.[能] おば 呼ぶ 何-[絶] する-[状態] 言う  
 あなたはおばさんと呼んで何をするように言うのですか？

(181) ʼŋa-φ ʼrō rō ʼʔa: ʼtjə ʰiō ʰda ʼkə zoʔ ʼjeʔ-ʰdzə-reʔ ʼhsō-nə  
 1-[絶] 自身で ああ あのように どう する-[状態]-[判] 思う-[現認]  
 私自身「ああ、どうやったらあのようなになるのか」と思います。

#### 5.4 複文

等位関係を表す並列文は通常接続詞を必要とせず、第1文には TAM を表す接辞類がつかないことが多い。

(182) ʼtʂʰuʔ-φ ʼtow fu-φ ʼŋu: ʼŋa-φ ʼtʂʰa-φ ʼŋu:-fia  
 2-[絶] 豆腐-[絶] 買う 1-[絶] 肉-[絶] 買う-[気]  
 あなたは豆腐を買って、私は肉を買いますね。

(183) ʼkʰwə-φ ʼʰdza ʰkeʔ-φ-la ʼtʂʰi: ʼjī ʰkeʔ-φ-la ʼtʂʰi:-reʔ  
 3-[絶] 漢語-[絶]-も 知っている 英語-[絶]-も 知っている-[判]  
 彼は漢語も知っているし、英語も知っています。

条件や時間的順序に従って継起する事象を時間を表す要素を用いず表す場合、接続詞ʼna が用いられる。

(184) ʼtje-φ ʼtʂʰō-φ ʼhta ʼna ʼnə-φ ʼʰdeʔ-nō  
 あの 家-[絶] 見る と 人-[絶] いる-[判]  
 あの家を見ると、人がいます（いるのが目視で確認できます）。

(185) ʼŋa-φ ʼtʂʰu tsʰəʔ ʼʰdzeʔ ʼfio la ʼtsə-ʼma-ʰiō ʼna ʼtʂʰuʔ-φ  
 1-[絶] 時間 8 まだ [方]-[否]-来る ならば 2-[絶]  
 ʼrō rō ʼshō  
 自分で 去る.[命]  
 私が8時にまだこちらに来なかったら、あなたは自分で帰りなさい。

譲歩を表す場合にも接続詞`na が用いられる。

- (186) ʼŋa-φ ʼŋi[ʂʰa-tʰŋ]-ʼma-tʰũ ʼna ʼŋi[ʂʰa-gu:  
 1-[絶] 食べる-[完]-[否]-[完] ても 食べる-[必要]  
 私は食べ終わることがなくても、食べたいです。

nə tə<sup>28</sup> 「～のあと、～なので」

- (187) ʼŋi[ʂʰa-tʰũ ʼŋi[tʰŋ-tʰũ nə tə ʼtsʰə ja-φ ʰtsō-nə-φ  
 食べる-[完] 飲む-[完] あと 野菜-[絶] 売る-[名]-[絶]  
 ʼrə-ŋgwə-tʰũ  
 [方]-行く-[完]  
 食べて飲んだあと、野菜を売る人は帰っていきました。

- (188) ʼtʰəʔ ŋa: nəj ka-φ ʼŋjē ʰtʰei? ŋa ʰha ʰkwə-zē nə tə ʼŋa-φ ʼtē  
 2.[双]-[絶] 以前から 知っている-[判] なので 1-[絶] また  
 ʰʂe: ʰnə-ʰtʰe?  
 [否]-紹介する  
 あなたたち2人は以前から知り合いだったので、私が再び紹介はしません。

ʼrēj 「～しているときに」

- (189) ʼsē-φ ʼŋi[ʂʰa ʼrēj ʼjə jə-φ ʼma-ŋdzə?  
 ごはん-[絶] 食べる とき 本-[絶] [否]-見る  
 ごはんを食べているときに本を読むな。

ʼti: 「～のあとで<sup>29</sup>」

- (190) ʼŋa-φ ʼŋjē ʼŋgwə ʼti: ʼtʰəʔ-φ ʼʂʰu?  
 1-[絶] 先に 行く するので 2-[絶] 来る.[命]  
 私は先にいきますから、そののちあなたはあとで来なさい。

ʼma zə tə 「～しないだけでなく」

- (191) ʰʂwa-φ-tə ʼʔa lju-φ ʰʂa? ʼma zə tə ʰmʰuʔ ŋa-wə  
 ねずみ-[絶]-[主] 猫-[絶] 恐れる しないだけでなく 追い払う-[?]  
 ねずみが猫を恐れない上、(ねずみが猫を) 追い払います。

ʰtʰa hē<sup>30</sup> 「～のために」

- (192) ʰkʰwə-φ ʼpeʔ-φ ʼzē ʰtʰa hē ʰpeʔ ʰkeʔ-φ ʰʂeʔ-ʂʰi:-nə  
 3-[絶] チベット人-[絶] [判] のために チベット語-[絶] 話す-できる-[現認]  
 あなたはチベット人なので、チベット語を話すことができます。

<sup>28</sup> この形式は声調を担わない。形態的に見ると、2種類の名詞化接辞が連続しているようであるが、このような分析は困難であろう。同様に、第1音節がAM接辞、第2音節が名詞化接辞という分析も、(188)のように述語動詞にAM接辞がつく事例があるため、困難であろう。ゆえに、声調を担わない理由は現段階では不明である。

<sup>29</sup> これは副詞として「後ほど」の意味で単独で用いられることもある。

<sup>30</sup> 第2音節は具格標識/hē/と関連すると考えられる。



略号表

文法機能語で略号を作らないものは直接 [ ] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。語形変化で何らかの文法的機能を表す場合は、語義のあとに . をはさんで機能を書き入れる。

[絶] .....	絶対格	[否] .....	否定辞
[能] .....	能格	[方] .....	方向接辞
[与] .....	与格	[疑] .....	疑問接辞
[属] .....	属格	[未] .....	不確定未来
[位] .....	位格	[予未] .....	予定未来
[具] .....	具格	[進] .....	進行
[奪] .....	奪格	[過] .....	過去
[比] .....	比較格	[完] .....	現在完了
[名] .....	名詞化標識	[達] .....	達成
[複] .....	複数	[経] .....	経験
[双] .....	双数	[受] .....	受益
[量] .....	量詞	[推] .....	推測
[判] .....	判断動詞	[気] .....	語気助辞
[存] .....	存在動詞	[補] .....	補文標識
[重] .....	重複	[主] .....	主題標識
[命] .....	命令形		

参考文献

- 澤田英夫 (編) (2013) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 第 69 号 1-23
- (2011) 「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」 大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 3, 1-35
- (2012) 「カムチベット語燕門・斯嘎 [Sakar] 方言の文法スケッチ」 稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 4 (大西正幸博士還暦記念号), 123-158
- (2014) 「カムチベット語香格里拉県小中甸郷吹亞頂 [Choswateng] 方言の音声分析と語彙：rGyalthang 下位方言群における方言差異に関する考察を添えて」 『国立民族学博物館研究報告』
- Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a Preliminary Report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 69-92
- (2000) Rgyalthang Tibetan lexicon and an appraisal of a Southeast Asian wordlist. *Mon-Khmer Studies* 30, 83-94

## カムチベット語小中甸・吹亞頂[Choswateng] 方言の文法スケッチ

- (2007a) Grammatical peculiarities of two dialects of Southern Kham Tibetan. In : Roland Bielmeier & Felix Haller (eds.) *Linguistics of the Himalayas and Beyond*, 119–152, Mouton de Gruyter
- (2007b) Evidentiality in Rgyalthing Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 30.2, 17–44
- Suzuki, Hiroyuki (2013) *Overview of the dialects spoken in rGyalthing from the historical perspective*. Paper presented at 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Ulaanbaatar)
- Tshe-ring Lha-mo (2013) *Khams sDe-dge-skad-kyi brda-sprod*. 民族出版社
- Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalthing Tibetan phonology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol.19.2/Fall, 55–67
- 陸紹尊 (1990) 〈藏語中甸話的語音特點〉《語言研究》第 2 期 147–159
- (1992) 〈雲南藏語語音和語匯簡介〉《藏學研究論叢》第 4 輯 120–131 西藏人民出版社
- 瞿靄堂・金效靜 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第 3 期 76–84
- 王曉松 (2008) 〈對中甸藏語方言的粗淺認識——從語音上看中甸方言的特點和規律〉《王曉松藏學文集》368-378 雲南民族出版社
- 吳光范 (2009) 《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》雲南人民出版社
- 《雲南省誌》編纂委員會 (1998) 《雲南省誌 卷五十九 少數民族語言文字誌》雲南民族出版社
- 雲南省中甸縣地方誌編纂委員會編 (1997) 《中甸縣誌》雲南民族出版社
- 張濟川 (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 中央民族學院出版社
- 趙金燦・李玉朋 (2014) 〈建塘藏語聲調實驗〉《四川民族學院學報》第 1 期 64–68
- 朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

### [付記]

筆者による Choswateng 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)
- 平成 25 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167)

目次		4	動詞句	19	
1	はじめに	1	4.1 動詞句の基本構造 . . . . .	19	
2	Choswateng 方言の音体系	2	4.2 動詞の種類 . . . . .	19	
2.1	音節構造 . . . . .	2	4.2.1 述語動詞 . . . . .	19	
2.2	超分節音素 . . . . .	3	4.2.2 本動詞 . . . . .	22	
2.3	母音 . . . . .	3	4.3 形容詞：述語用法として . . .	22	
2.4	子音 . . . . .	4	4.4 接頭辞類 . . . . .	23	
3	名詞句	4	4.4.1 方向接辞 . . . . .	23	
3.1	名詞句の基本構造 . . . . .	4	4.4.2 否定辞 . . . . .	24	
3.2	名詞 . . . . .	5	4.4.3 疑問接辞 . . . . .	25	
3.3	代名詞 . . . . .	5	4.5 接尾辞類 . . . . .	25	
3.3.1	人称代名詞 . . . . .	5	4.5.1 TAM を表す接辞群 . . . . .	25	
3.3.2	指示代名詞 . . . . .	6	4.5.2 疑問接尾辞・語気助辞 . . .	30	
3.3.3	疑問詞類 (形容詞・副詞も含む) . . . . .	7	4.5.3 可能性・推測を表す表現 . .	31	
3.4	名詞化標識 . . . . .	9	4.6 動詞連続 . . . . .	31	
3.5	格体系 . . . . .	10	4.7 呼応する動詞句表現 . . . . .	31	
3.5.1	格標識一覧表 . . . . .	10	5	文のタイプと分類	32
3.5.2	用法 . . . . .	11	5.1 文の成立 . . . . .	32	
3.6	数詞・量詞 . . . . .	16	5.2 文のタイプ . . . . .	33	
3.6.1	基数詞 . . . . .	16	5.2.1 平叙文 . . . . .	33	
3.6.2	序数詞 . . . . .	17	5.2.2 疑問文 . . . . .	34	
3.6.3	量詞 . . . . .	17	5.2.3 命令文 . . . . .	35	
3.7	形容詞：修飾用法として . . .	18	5.3 文の埋め込み . . . . .	35	
3.8	主題標識 . . . . .	18	5.4 複文 . . . . .	36	
			略号表	38	
			参考文献	38	

## ムラブリ語の文法スケッチ\*

伊藤 雄馬

京都大学／日本学術振興会

キーワード：ムラブリ語、オーストロアジア語族、クム語派、文法スケッチ

### はじめに

本稿はムラブリ語 (Mlabri) A 方言の文法の輪郭を示すことを目的とする。ムラブリ語にみられる特徴の概略を以下に列挙する。

**<音声・音韻>** 声門化有声閉鎖音、声門化わたり音、無声鼻音、無声流音が音素として認められる。音節末に位置する閉鎖を伴う子音 (閉鎖音、鼻音、側面接近音) は、全て無開放 (unreleased) である。無声鼻音、無声側面音、また震え音は特定の環境で成節的な子音となる。

**<形態>** 活用、曲用、格変化による語形変化のない、孤立的な言語である。接頭辞、接中辞が存在し、重複も見られるが、いずれも生産性が低い。

**<統語>** SV、AVO、NA である。所有表現は所有者-所有標識-被所有物の順序であり、地域的、類型論的に特異である。

**<その他の文法範疇>** 人称代名詞は、双数形から複数形を形成する点で類型論的に特異である。具格を表す形式がなく、「手段の目的語」(object of instrument) でのみ具格を表しうる。

**<語彙>** 「食べる・飲む」を意味する語彙が複数存在し、食べる対象などによる使い分けが存在する。借用語にはタイ祖語の形式を残すとみられる語彙が存在する。

以下、本稿では断りのない限り筆者の独自の調査データに基づくものとする。また、日本語と対照して興味深い例を適宜取り上げる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず1章では、系統と社会言語学的情報について述べる。2章では、音韻論について概説する。3章では、標識 (marker)・接語 (clitic)・接辞 (affix) を定義し、また基本的な節・句構造について述べる。4章では、品詞論について述べる。5章では、形態論について概説する。6章では、その他の文法範疇について概説する。7章では、語彙の中でも特徴的な語彙、また借用語について述べる。

---

\* 本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25・4309 「北タイの危機言語ムラブリ語のドキュメンテーションとその分析」の助成を受けたものである。本稿の執筆にあたっては、吉田和彦氏、白田理人氏から多くの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表す。当然、本稿にありうべき誤りの責任は全て筆者にある。

## 1 系統・社会言語学的情報

### 1.1 系統

オーストロアジア語族 (Austroasiatic)、北方モン・クメール諸語 (Northern Mon-Khmer languages)、クム語派 (Khmuic) に分類されることが多い (cf. Sidwell 2009)。Rischel (2007) は、クム語派に属するとされるティン語 (T'in) とムラブリ語の間に音対応が認められることを明らかにし、ムラブリ語とティン語の間に系統関係の存在を示唆した。ただし、他のオーストロアジア語族内の別の語派、例えばパラウン語派 (Palaungic) やカトゥ語派 (Katuic) との関係も示唆されており、系統の位置づけについて研究者間の統一的な見解は未だ得られていない。

### 1.2 地域・人口・方言

ムラブリ語は、タイとラオス国境の山岳部で話される、話者数約 400 人の言語である (付録参照)。Rischel (2007: 30) によると、ムラブリ語には A、B、C 方言の 3 つの方言が存在する。

A 方言話者が最も数が多く、タイ北部のナーン県 (Nan) に 3 箇所、プレー県 (Phrae) に 2 箇所の村があり、そこに定住している。人口は 2013 年の段階で約 400 人である (cf. Nimonjiya 2014)。B 方言話者は、ナーン県のドーンプライワン村 (Ban Don Phrai Wan) に 3 名、別の村に 2 名、合計 5 名確認されている。両方言話者はお互いを同一民族と認めているが、交流はない。筆者の調査では、A 方言話者が B 方言話者を「凶暴・人食い」と恐れて忌避しており、この態度が交流のない原因のひとつと考えられる。C 方言話者はラオスのサイニャブリー県 (Sainyabuli Province) に住んでおり、人口は 2013 年の時点で 13 人と報告があるが、詳細は不明である。

本稿では、ナーン県のフアイユアク村 (Ban Huai Yuak) で話される A 方言を扱う。

### 1.3 方言間に見る「言語の難解化」

方言間で注目すべきは、語形の差である。ライプツィヒ・ジャカルタ基礎語彙表 (The Leipzig-Jakarta List of Basic Vocabulary) で挙げられている 100 語を両方言間で比較したところ、65 語はほぼ語形が一致するのに対して、35 語が A 方言と B 方言で音対応では説明できないほど語形が異なることが分かる (cf. Haspelmath & Tadmor 2009)。表 1 にその一部を挙げる。

表 1 A 方言と B 方言で語形の異なる例

	A 方言	B 方言
「犬」	braŋ	sɔʔ
「肉」	cin	t <sup>h</sup> ac
「話す」	tɔŋ	glaʔ
「来る」	leh	pruk

## 2 音韻論

### 2.1 音節構造

まず、便宜のために音節構造のテンプレートを図1に示す。

$$\overbrace{(C_{-2})C_{-1}}^{\text{(副音節)}} \overbrace{C_1(C_2)(C_3)V(C_4)}^{\text{主音節}}$$

図1 音節構造テンプレート

音節は主音節と副音節の2つに大別できる。主音節は、単独で現れ、母音を音節核に持つ音節であり、副音節は主音節に先行する位置のみに現れ、子音を音節核に持つ音節である。

主音節の頭子音は3つのスロットに分けている。これは主音節の頭子音連続が最大3子音連続であること、また音素配列を説明するのに有効であるための便宜上のモデルである。主音節の頭子音  $C_1$  は義務的であるが、末子音  $C_4$  はそうではない。

副音節は  $C_{-1}$  の子音が音節核を担い、 $C_{-1}$  単独で形成される場合と、 $C_{-2}$  と  $C_{-1}$  の両方で形成される場合がある。ただし、それぞれの場合で音節核  $C_{-1}$  に現れうる子音が異なる。

また副音節の音節核と主音節の頭子音、つまり  $C_{-1}$  と  $C_1$  の組み合わせには制約がある。よって、図1の音節構造テンプレートでは副音節と主音節を並べて記載してある。

### 2.2 超分節要素

ムラブリ語は超分節要素(声調、強勢、母音の長短など)によって語彙を弁別しない。ただし、強勢は音韻語の境界を示す境界表示機能を担う。母音の長短も、常にではないが、強勢を持つ音節にのみ現れうるため、境界表示機能を一部担う。

### 2.3 音韻語

音韻語1つにつき、1つの強勢を持つ。強勢位置は音韻語の最終音節である。

また、1音韻語は必ず2モーラ以上<sup>1</sup>であるとする、最小語制約が存在する。この制約の存在は、開音節の自由形式が長母音で発音されることから分かる。本稿では、最小語制約によって長母音で発音される形式を母音連続で表記する(例1e)。例1に示す例は全て1音韻語をなす。

- (1) a. boʔ ['bo:ʔ~boʔ] 「乳」  
 b. goh ['goh] 「折れる」  
 c. tmʔoʔ [tm.ʔo:ʔ] 「蛇」  
 d. pa-goh [pa.'goh] 「折る ([使]-折れる)」  
 e. <sup>?</sup>bʌʌ [<sup>?</sup>bʌ:] 「葉」

<sup>1</sup> 本稿では母音と末子音をモーラに数える。例えば [CVC] と [CV:] は2モーラ、[CV] は1モーラと数える。

## 2.4 音素目録

### 2.4.1 母音

表 2 に母音の目録を示す。

表 2 母音の目録

	前舌	後舌/非円唇	後舌/円唇
狭	i	ɯ	u
半狭	e	ɤ	o
半広	ɛ	ʌ	ɔ
広	a		

母音には 10 の音素を認める。前舌、後舌の母音があり、後舌のみ円唇性により対立する。広母音は前舌母音のみ存在する。

### 2.4.2 子音

頭子音と末子音の体系が異なるため、頭子音と末子音を別の体系として提示する。なお、副音節の  $C_{-2}$ 、 $C_{-1}$  は頭子音と同じ体系として本稿では扱う。表 3 に頭子音の目録、表 4 に末子音の目録を示す。

表 3 頭子音の目録

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	有声	b	d	j	g	ʔ
	無声	p	t	c	k	
	帯気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>		k <sup>h</sup>	
	声門化	ʔb	ʔd			
摩擦音	無声		s			h
鼻音	有声	m	n	ɲ	ŋ	
	無声	<sup>h</sup> m	<sup>h</sup> n	<sup>h</sup> ɲ	<sup>h</sup> ŋ	
震え音	有声		r			
	無声		<sup>h</sup> r			
側面音	有声		l			
	無声		<sup>h</sup> l			
わたり音	有声	w		y		
	声門化	ʔw		ʔy		

## ムラブリ語の文法スケッチ

頭子音には 32 の音素を認める。閉鎖音は、有声、無声、帯気、さらに両唇と歯茎には声門化の系列がある。鼻音、震え音、側面音には無声と有声の対立がある。わたり音は、有声と声門化の系列がある。なお、声門閉鎖音は有声に分類される (cf. 5.1.1)。硬口蓋閉鎖音は破擦音 (affricative) として発音される (jak ['dʒak] 「行く」、cʌŋ ['tʃʌŋ] 「歯」)。声門化閉鎖音はしばしば入破音 (implosive) として発音される (<sup>ʔ</sup>biʔ ['<sup>ʔ</sup>biʔ~biʔ] 「芋虫」、<sup>ʔ</sup>dʌŋ ['<sup>ʔ</sup>dʌŋ~'dʌŋ] 「見る」)。無声鼻音、無声側面音は前半部分が無声である (<sup>h</sup>lak ['<sup>h</sup>lak] 「ない」、<sup>h</sup>mɛʔ ['<sup>h</sup>mɛʔ] 「新しい」)。

表 4 末子音の目録

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p	t	c	k	ʔ
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
側面音	有声	l			
	無声	l <sup>h</sup>			
震え音		r			
摩擦音			ɕ		h
わたり音	w		y		

末子音には 16 の音素を認める。調音点、調音法については頭子音と同じである。閉鎖音・鼻音・震え音に声や氣息などによる対立がなく、側面音のみに有声と無声の対立が存在する。閉鎖を伴う子音は全て無開放 (unreleased) である<sup>2</sup> (kup ['kup<sup>̚</sup>] 「雲」、kum ['kum<sup>̚</sup>] 「傷痕」、pol ['pol<sup>̚</sup>] 「毛布」)。無声側面音は、後半部分が無声である (pol<sup>h</sup> ['pol<sup>̚</sup>]) 「鹿の一種」)。

## 2.5 音素配列

### 2.5.1 母音連続

母音の音素配列を表 5 に示す。狭母音からはじまる母音連続のみ観察される。

表 5 母音連続

i-	io	jioŋ	「父」
	iʌ	wiʌŋ	「町」
	ia	ciak	「鹿」
u-	uɣ	kuɣy	「籠」
	uʌ	suʌk	「塩」
	ua	suak	「結ぶ」

<sup>2</sup> 慣例ではないが、鼻音・側面接近音についても無開放の記号 (̚) を本稿では用いる。



また、表 5 に挙げた母音連続と、わたり音と母音の連鎖は音韻的に区別される (例 2)。

- (2) a. wiΔŋ 「町」 vs. myxy 「妻」  
 b. kuxy 「籠」 vs. kwxy 「バナナの種類」

### 2.5.2 主音節の頭子音連続

音素配列を説明するのに、まず図 1 で提示した音節構造テンプレートの子音  $C_{-2}$ 、 $C_{-1}$ 、 $C_1$ 、 $C_2$ 、 $C_3$  それぞれの位置に現れうるかによって、頭子音を 8 つの自然類に分類する。

表 6 頭子音の自然類

	自然類	音素例	子音
(I)	阻害音類	b, p, p <sup>h</sup> , s など	声門音以外の閉鎖音・摩擦音
(II)	鼻音類	m, n, ŋ, ŋ	有声鼻音
(III)	震え音類	r	有声震え音
(IV)	側面音類	l	有声側面音
(V)	わたり音類	w, y	わたり音
(VI)	声門音類	ʔ, h, <sup>ʔ</sup> b, <sup>ʔ</sup> d, <sup>ʔ</sup> w, <sup>ʔ</sup> y	声門音、声門化閉鎖音・声門化わたり音
(VII)	無声共鳴音類	<sup>h</sup> m, <sup>h</sup> n, <sup>h</sup> l など	無声鼻音・無声側面音
(VIII)	無声震え音類	<sup>h</sup> r	無声震え音

次に、8 つの自然類の分布を表 7 に示す。 $C_{-1}$  の丸括弧は、 $C_{-2}$  のスロットが埋められている場合のみ現れうることを表す。

表 7 自然類の分布

	$C_{-2}$	$C_{-1}$	$C_1$	$C_2$	$C_3$
(I)	+	-	+	-	-
(II)	-	(+)	+	-	-
(III)	+	+	+	+	-
(IV)	-	(+)	+	+	-
(V)	-	-	+	-	+
(VI)	-	-	+	-	-
(VII)	-	+	+	-	-
(VIII)	-	+	-	-	-

最も分布の広い自然類は震え音類 (III) であり、 $C_3$  以外の全ての位置に現れうる。最も分布の狭い自然類は、声門音類 (VI) と無声震え音類 (VIII) である。

## ムラブリ語の文法スケッチ

主音節における、頭子音連続の可能な組み合わせ、及びその例を表 8 に示す。

表 8 主音節の頭子音連続

C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	例		
阻害音類	震え音類	-	preʔ	[ˈpreʔ]	「トウガラシ」
阻害音類	側面音類	-	pleʔ	[ˈpleʔ]	「果実」
阻害音類	-	わたり音	pyee	[ˈpye:]	「トカゲの一種」
鼻音類	震え音類	-	mrek	[ˈmrek]	「絞る」
鼻音類	側面音類	-	mɫaʔ	[ˈmɫaʔ]	「ムラブリ」
鼻音類	-	わたり音	myɣɣ	[ˈmyɣɣ]	「妻」
阻害音類	震え音類	わたり音	grwɛc	[ˈgrwɛc]	「爪」
阻害音類	側面音類	わたり音	klwen	[ˈklwen]	「方向」

3 子音連続は、前半の 2 子音が副音節となる場合もある (例 3)。

- (3) a. grwɛc [ˈgrwɛc~gr̩.ˈwɛc] 「爪」  
 b. klwen [ˈklwen~k̩l̩.ˈwen] 「方向」

### 2.5.3 副音節

副音節の可能な組み合わせを表 9 に示す。なお、以下からは、音節境界が子音と子音の間にある場合のみ、ピリオドによってその音節境界を示す。

表 9 副音節

C <sub>-2</sub>	C <sub>-1</sub>	例		
-	震え音類	r.map	[r̩.ˈmap]	「畑」
-	無声共鳴音	<sup>h</sup> n.taʔ	[ <sup>h</sup> n̩.ˈtaʔ]	「尾」
-	無声震え音	<sup>h</sup> r.leʔ	[ <sup>h</sup> r̩.ˈleʔ]	「笑う」
阻害音類	鼻音類	sm.bɛp	[sm̩.ˈbɛp]	「口」
震え音類	鼻音類	rm.bah	[rm̩.ˈbah]	「側面」
阻害音類	震え音類	kr.poʔ	[kr̩.ˈpoʔ]	「雷」
阻害音類	側面音類	kl.muy	[k̩l̩.ˈmuy]	「毛」
震え音類	側面音類	rl.rɛl	[r̩l̩.ˈrɛl]	「夕暮れ」

C<sub>-1</sub> が鼻音類、C<sub>1</sub> が阻害音類のとき、2 つの音は同器官的である (例: 表 9 の「尾」、「口」、<sup>h</sup>n̩.cak [ˈn̩.ˈtɕak] 「ネズミの一種」、<sup>h</sup>n̩.kok [ˈn̩.ˈkok] 「銃」)。

## 2.6 イントネーション

イントネーションのかかる単位は文である<sup>3</sup>。よって、イントネーションは文の境界を表示する機能を持つ。

いくつか種類が認められるが、とりわけ、文末の音節を裏声で長く発音するイントネーションが特徴的である(以下、これを裏声イントネーションと呼び、上向き矢印 ↗ で表す)。裏声イントネーションは、命令、非難、忠告などの発話や、間投詞の発話に観察される(例 4)。

- (4) a. maʔ    ʔoh↗  
       与える [1 単]  
       「私にくれ。」  
       b. hεε↗  
       [間]  
       「えー！(非難)」

## 3 標識・接語・接辞、節・句構造

本章では、標識・接語・接辞を定義し、その後、基本的な節・句構造をみる。

### 3.1 標識・接語・接辞

本稿では、音韻語の指標となった最小語制約と強勢付与可能性により、拘束形式を標識、接語、接辞に分ける(表 10)。

表 10 標識・接語・接辞

	最小語	強勢
標識	+	+
接語	-	+
接辞	-	-

標識は最小語制約にかない、かつ強勢を付与しうる(例 5a)。接語は最小語制約にはかなわな  
 いが、強勢を付与しうる(例 5b)。接辞は最小語制約にかなわず、かつ強勢を付与できない(例  
 5c)。

- (5) a. kɔbɔ jak [kɔ.bɔ.'dʒak~kɔ.'bɔ.'dʒak] 「行かない」  
       b. ʔa=wɔl [ʔa.'wɔ:l~ʔa.'wɔ:l] 「行った」  
       c. pa-buul [pa.'bu:l]、\*[ʔpa.'bu:l] 「殺す([使]-死ぬ)」

<sup>3</sup> この定義は循環論法的である。

### 3.2 基本的な節構造

基本的な構成素の並び他動詞主語-述語-目的語 (AVO)、自動詞主語-述語 (SV) である。なお、主語と目的語は文脈によって省略されうる (例 6 の話者 B の発話)。

- (6) 話者 A mɛh mak ʔoh leh  
 [2 単] 好む [1 単] [諾否]  
 「あなたは私が好きか？」  
 話者 B mak  
 好む  
 「好きだ。」

#### 3.2.1 動詞述語節

動詞が述語となる節は、自動詞では主語-述語 (SV、例 7a)、他動詞では主語-述語-目的語 (AVO、例 7b)、二重他動詞では主語-述語-関節目的語-直接目的語 (AV-IO-DO、例 7c) の順である。

- (7) a. ʔoh <sup>h</sup>r.leh  
 [1 単] 笑う  
 「私は笑う。」  
 b. ʔoh mak mɛh  
 [1 単] 好む [2 単]  
 「私はあなたが好きだ。」  
 c. ʔoh maʔ mɛh <sup>h</sup>ŋ.keʔ  
 [1 単] 与える [2 単] 薪  
 「私はあなたに薪をあげる。」

叙述法は特別な標識を必要としない。疑問法は節末の疑問標識、もしくは疑問語 (interrogatives) で示す (例 8b、c)。疑問語疑問文には疑問標識は必要ない。命令法は、イントネーションなどで表す。

- (8) a. mɛh jak leh  
 [2 単] 行く [諾否]  
 「あなたは行くか？」  
 b. mɛh jak kaleŋ  
 [2 単] 行く どこ  
 「あなたはどこへ行くか？」

### 3.2.2 名詞述語節

名詞句が標識を伴わずに述語となりうる。つまり、名詞句を述語として機能させるための標識(コピュラなど)は存在しない(例 9a)。名詞述語を否定する場合は、否定接語 ki=と mɛn「正しい」を用いて表す(例 9b)。

- (9) a. gɔh hɲ.keʔ  
       [近 2] 薪  
       「これは薪だ。」  
       b. gɔh ki=mɛn hɲ.keʔ  
       [近 2] [否]=正しい 薪  
       「これは薪でない。」

## 3.3 基本的な句構造

### 3.3.1 名詞句

名詞句は基本的に主要部主導型 (head-initial) の構造である(例 10)。

- (10) a. braɲ tr.nap  
       犬 大きい  
       「大きい犬」  
       b. braɲ nii ʔoh mak  
       犬 [関] [1 単] 好き  
       「私の好きな犬」

### 3.3.2 動詞句

動詞句は主要部終端型 (head-final) の構造を示す。否定、テンス・アスペクト、モダリティなどを表す形式は動詞に先行する(例 11)。

- (11) a. ʔoh kɔbɔ jak  
       [1 単] [否] 行く  
       「私は行かない。」  
       b. ʔoh kalɔy jak  
       [1 単] [過未完] 行く  
       「私は行かなかった。」  
       c. ʔoh dalɔy jak  
       [1 単] [義] 行く  
       「私は行かなければならない。」

## 4 品詞論

### 4.1 品詞概略

ムラブリ語の品詞は名詞、動詞、その他に大別できる。なお、品詞は語の単位に適用される。指標は (A) 動詞の項になれるか、(B) 否定標識を取るかの 2 点である (表 11)。

表 11 品詞分類

	(A)	(B)
名詞	+	-
動詞	-	+
その他	-	-

### 4.2 名詞

名詞は、動詞の項となる唯一の品詞である。他に、名詞句の主要部となる (例 12a)、所有表現の所有者・被所有物となる (例 12b)、主語・述語となる (例 12c)、という機能を持つ。

- (12) a. tr.ləh tr.nap  
鍋 大きい  
「大きい鍋」
- b. məh di=?ɛw  
[2 単] [連]=子  
「あなたの子」
- c. ?oh mla?  
[1 単] ムラブリ  
「私はムラブリだ。」

### 4.3 動詞

動詞は否定標識をとれる唯一の品詞である。動詞は状態動詞と動態動詞に大別できる。

状態動詞は並置 (juxtaposition) により名詞を修飾できるが、動態動詞はできない (例 13)。

- (13) a. braŋ tr.nap  
犬 大きい  
「大きい犬」
- b. \*braŋ jak  
犬 行く  
「\*行く犬」

状態動詞は程度を表す標識 hik 「とても」を取りうるが、動態動詞は取れない (例 14)。

- (14) a. hik tr.nap  
 とても 大きい  
 「とても大きい」  
 b. \*hik jak  
 とても 行く

#### 4.4 その他

その他に含まれる品詞は様々だが、本稿では副詞と間投詞についてのみ述べる。

##### 4.4.1 副詞

本稿では場所副詞と時間副詞についてみる。

場所副詞には、川を陸標にした副詞が存在する (表 12)。

表 12 川を陸標にした場所副詞

川下	川上	向こう岸
tijuxy	taŋ.nɣɣ	tuɔɔɔh

時間副詞は相対的な日を表し、比較的豊富である (表 13)。

表 13 日を表す時間副詞

昨日	今日	明日	明後日	明々後日	4日後
t <sup>h</sup> waa	tal+ɔɔh	muɪʔuun	muɪhuuɪ	maɩtuɪ	maɩuɪ

副詞の統語位置は文頭か、動詞句の後である (例 15)。

- (15) a. tal+ɔɔh mɛh jak kalɛŋ  
 今日 [2 単] 行く どこ  
 「今日あなたはどこへ行くのか？」  
 b. məy ʔɣh r.map taŋ.nɣɣ  
 [3 単] する 畑 川上  
 「彼は川上で畑仕事をしている。」  
 c. ɔɔm jak tuɔɔh  
 [禁] 行く 向こう岸  
 「向こう岸へ行くな。」

## ムラブリ語の文法スケッチ

### 4.4.2 間投詞

間投詞は、常にイントネーションを伴って現れ、単独で文を成す (表 14)。

表 14 間投詞

非難	落胆	驚き	失敗
hɛɛ	bijɾɾ	ʔihii	bat <sup>h</sup> oo

特定の親族に対する呼びかけにのみ用いることができる間投詞が存在する。本稿では、そのような間投詞を「呼称 (address term)」と呼ぶ (表 15)。

表 15 呼称

父	母	配偶者	子
mɾm	mɾʔ	səŋ.k <sup>h</sup> ət	ʔim.roɕ

- (16) a. hɛɛ ↗ səŋ.k<sup>h</sup>ət ↗ mɛh jak kalɛŋ  
 [間] [呼. 配偶者] [2 単] 行く どこ  
 「おい妻よ、お前はどこへ行くのか？」

### 4.5 機能語

品詞横断的な語類として、指示語 (demonstrative) と疑問語を認める。

#### 4.5.1 指示語

指示語は指示 (reference) と照応 (anaphora) の機能を持つ。

指示の観点から、話し手と聞き手の両方に近いものを指す「近称 1」、話者の近くにあるものを指す「近称 2」、話者の遠くにあるものを指す「遠称」の 3 種類が認められる (表 16)。

表 16 指示語

	近称 1	近称 2	遠称
名詞	k <sup>h</sup> ihit	gɬh	ɲɬʔ
副詞	k <sup>h</sup> ihit	gɬʔ	ɲɬh

指示語は、名詞と副詞のいずれかとして機能する。名詞として機能する場合と、副詞として機能する場合とでは、「近称 2」と「遠称」は語末の声門音が入れ替わる (表 16)。



副詞として機能する場合は、場所を表す副詞として動詞句を修飾する (例 17)。

- (17) a. ʔoh mak gΛh  
 [1 単] 好む [近 2]  
 「私はこれを好む。」
- b. dɔk gΛʔ  
 置く [近 2]  
 「ここに置く。」

#### 4.5.2 疑問語

ムラブリ語の疑問語は、疑問代名詞、疑問副詞に大別できる。疑問代名詞を表 17 に示す。

表 17 疑問代名詞

なに	だれ
近称	遠称
cigΛʔ	ciɲΛh tumlaʔ

「なに」には 2 種類あり、副詞用法の指示語の gΛʔ 「近称 2」、ɲΛh 「遠称」をそれぞれ含む。「近称 2」を含む疑問代名詞は、指示語 gΛh 「近称 2」とのみ共起可能であり、「遠称」を含む疑問代名詞には制限はない (例 18a, b)。「だれ」は、mlaʔ 「ムラブリ」を後部に含む。

- (18) a. gΛh {cigΛʔ/ciɲΛh}  
 [近 2] {なに [近]/なに [遠]}  
 「これは何？」
- b. ɲΛʔ {\*cigΛʔ/ciɲΛh}  
 [遠] {\*なに [近]/なに [遠]}  
 「あれは何？」

次に疑問副詞を表 18 に示す。

表 18 疑問副詞

いくつ	いつ	どう	どこ
pan+ʔdɻɻ	hwan+ʔdɻɻ	sin.ʔdee	kalɛŋ

「いくつ」、「いつ」には不定を表す標識 ʔdɻɻ が含まれる (cf. tal ʔdɻɻ 「いつか (日 [不定])」)。「いくつ」、「どう」の pan, sin は、不定標識の代わりに副詞用法の指示語をつけることが可能である (pan gΛʔ 「このくらいの量・大きさ」、sin ɲΛh 「あのように」)。

## ムラブリ語の文法スケッチ

疑問副詞の統語位置は、節末である (例 19)。

- (19) a. mɛh pɻʔ pan+<sup>2</sup>dɻɻ  
[2 単] 持つ いくつ  
「あなたはいくつ持っているか？」
- b. mɛh jak hwan+<sup>2</sup>dɻɻ  
[2 単] 行く いつ  
「あなたはいつ行くか？」
- c. bih lam sin.<sup>2</sup>dee  
切る 木 どう  
「木をどう切るか？」

日本語の「なぜ」に相当する、理由を尋ねるためだけの疑問語は存在しない。理由を尋ねる場合、疑問代名詞 *ciɲɬh* 「なに」か疑問副詞 *sin.<sup>2</sup>dee* 「どう」を用いて理由を尋ねる。

まず、*ciɲɬh* 「なに」を単独で用いた場合、理由を尋ねる表現となりうる (例 20)。

- (20) *ciɲɬh*  
なに [遠]  
「なぜ？」

また、*ciɲɬh* 「なに」を動詞述語文の文末に置くことでも理由を尋ねる表現となる (例 21)。その場合、「なぜ V するのか」という意味となる。

- (21) jak *ciɲɬh*  
行く なに [遠]  
「なぜ行くのか？」

他動詞の場合も「なに」を文末に置くことで疑問を表しうるが、他動詞の目的語を尋ねているのか、理由を訪ねているのか曖昧になる (例 22)。

- (22) ʔɻʔ *ciɲɬh*  
食べる [穀] なに [遠]  
「何を食べたか?/なぜ食べるのか？」

「どう」を用いて理由を尋ねる方法は、「どう」*sin.<sup>2</sup>dee*のみを用いる方法、*ʔɻh* 「する」と *sin.<sup>2</sup>dee* 「どう」を共に用いる方法がある (例 23)。

- (23) mɔy bec {*sin.<sup>2</sup>dee/ʔɻh sin.<sup>2</sup>dee*}  
[3 単] 泣く {どう/する どう}  
「彼はどうして泣くのか？」

## 5 形態論

ムラブリ語は、屈折や曲用による形態法が存在せず、接辞法、重複法も生産的でないことから、形態論の乏しい言語であると言える。本節では、接辞法、複合法、重複法について述べる。

### 5.1 接辞法

ムラブリ語には、接頭辞、接中辞が認められる。まず、接頭辞について述べ、次いで接中辞について述べる。

#### 5.1.1 接頭辞

接頭辞には名詞語根をホストとする集合接頭辞と、主に動詞語根をホストとする使役接頭辞、名詞化接頭辞が存在する。

集合接頭辞は名詞語根をホストとし、集合名詞 (collective noun) を形成する (例 24)。

- (24) a. ja-ʔuy 「女たち」 ([集]-女)  
 b. ja-pol<sup>h</sup> 「鹿たち」 ([集]-鹿)  
 c. ja-kwɔɾ 「部外者たち」 ([集]-部外者)

使役接頭辞は主に動詞語根をホストとし、使役動詞を形成する。

この使役接頭辞には、異化 (dissimilation) が観察される。語根の頭子音が有聲の時は無声の接頭辞 pa-、語根の頭子音が無声の時は有聲の接頭辞 ba-が現れる (例 25a, b)。語根の頭子音が声門閉鎖音の場合は、無声の使役接頭辞が現れる (例 25c)。よって、声門閉鎖音は有声音と分析する (cf. 表 3)。また、使役接頭辞は親族名詞をホストとしうる (例 25d)。

- (25) a. pa-buɪ 「殺す」 ([使]-死ぬ)  
 b. ba-hot 「落とす」 ([使]-落ちる)  
 c. pa-ʔyʔ 「食べさせる」 ([使]-食べる [穀])  
 d. pa-diŋ 「兄/姉とする」 ([使]-兄姉)

名詞派生接頭辞は主に動詞語根をホストとし、それが表す動作に関連する名詞を形成する (例 26a, b)。また、単数の一人称と二人称の人称代名詞をホストとすることができ、その場合「私の所有物・あなたの所有物」という名詞を派生する (例 26c, d)。

- (26) a. pr-nɔn 「寝床」 ([名]-寝る)  
 b. pr-ʔyɪh 「やり方」 ([名]-する)  
 c. pr-ʔoh 「私の所有物」 ([名]-[1 単])  
 d. pr-mɛh 「あなたの所有物」 ([名]-[2 単])

ただし、これらの接辞は一部の語根に使用が限られており、生産性が低い。例えば、geŋ 「家」に付けて\*ja-geŋ、jak 「行く」に付けて\*pa-jak、\*pr-jak としても意味は通じない。

## ムラブリ語の文法スケッチ

### 5.1.2 接中辞

接中辞には名詞派生接中辞が存在する。動詞語根をホストとし、その動詞語根が表す動作と関連する名詞を形成する。この接中辞には複数の異形態が観察される。それぞれの異形態が現れる環境を表 19、例を例 27 に示す (C=子音、V=母音、N=鼻音)。

表 19 接中辞

-rn-	→	-mn-	/ C__VN
	→	-r-	/ C__w, yV
	→	-n-	/ C__rV
	→	-rn-	/ elsewhere

- (27) a. t-mn- $\lambda$ n 「言葉」(話す-[名])  
 b. k-r-wac 「箒」(掃く-[名])  
 c. j-n-rak 「櫛」(梳く-[名])  
 d. t-rn-uy 「杵」(搗く-[名])

この接中辞も生産性が低く、例えば jak 「行く」を\*j-rn-ak としても意味は通じない。

### 5.2 複合語

名詞を主要部とした複合語を中心に観察される。複合語は、前半部分の母音が弱化したり、子音が消失したり、音節構造が変化する場合がある。ただし、複合語の全てに音声的な変化が見られるわけではなく、また句にも弱化現象は観察されるため、実際には複合語と句を音声的に区別することは難しい。よって、意味的な不透明性を持つものを複合語とし、句と区別する。

表 20 複合語

「火打ち石」	kol+hlek	[k <sup>o</sup> l. <sup>o</sup> lek]	「棒」+「鉄」
「ムラブリ」	m <sup>l</sup> a? <sup>?</sup> +bri?	[m <sup>l</sup> a. <sup>?</sup> bri <sup>?</sup> ]	「人」+「森」
「夫婦」	my <sup>x</sup> +gla <sup>n</sup>	[my <sup>x</sup> .la <sup>n</sup> ]	「妻」+「夫」
「年寄り」	sak+ <sup>?</sup> im.ro <sup>ç</sup>	[sa.k <sup>o</sup> m. <sup>?</sup> ro <sup>ç</sup> ]	「体」+「子」
「虎」	bra <sup>n</sup> + <sup>?</sup> di <sup>n</sup>	[bra <sup>n</sup> . <sup>?</sup> di <sup>n</sup> ]	「犬」+「大きい」
「コップ」	k <sup>o</sup> k+w <sup>x</sup> k	[k <sup>o</sup> k. <sup>?</sup> w <sup>x</sup> k]	「パイプ」+「飲む」

なお、複合語と句の区別は、他の要素の介在可能性によっても判断しうる。つまり、複合語は他の要素の介在を許さないが、句は介在を許す (例 28)。

- (28) a.  $\text{brap} + \text{?diŋ}$   
 犬 + 大きい  
 「トラ」
- b.  $*\text{brap} \text{ hik } \text{?diŋ}$   
 犬 とても 大きい
- c.  $\text{brap} \text{ tr.nap}$   
 犬 大きい  
 「大きい犬」
- d.  $\text{brap} \text{ hik } \text{tr.nap}$   
 犬 とても 大きい  
 「とても大きい犬」

### 5.3 重複法・感情語

重複法は非常に生産性が低く、明確な例は2例しか観察できていない(表21)。

表21 重複法

「枯れている」	$\text{bl} \sim \text{buul}$	$\text{buul}$ 「死ぬ」
「なくなっている」	$\text{hla} \sim \text{hlak}$	$\text{hlak}$ 「ない」

一方で、繰り返しのみられる語根は多く観察される(表22)。これは、入力に相当する形式がない点で表21の例とは異なる。オーストロアジア語族の研究では、繰り返しなどの音象徴を利用する語形成・形態法を広く感情語(expressive)と呼ぶが、これらの語根も感情語に該当するものとする(c.f. 長田2009)。

表22 感情語

「腫れる」	$\text{bŋ.bəŋ}$	$*\text{bəŋ}$
「蟬」	$\text{dl.dəl}$	$*\text{dəl}$
「微笑む」	$\text{yik.yək}$	$*\text{yik}, *yək$
「カワセミ」	$\text{jrik.jrek}$	$*\text{jrik}, *jrek$

重複法とこの種の感情語は、要素が繰り返されている点で共通するが、観察できる数に大きな違いがあり、また入力が見られるかどうかという点でも異なるため、別の機構と考える<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> Avram (2011) では、繰り返しのみられる感情語と類似した例を疑似重複(pseudo-reduplication)と呼び、形態法の重複(reduplication)と区別している。

## 6 その他の文法範疇

### 6.1 連結接語

多くの機能を持つ連結接語 (linker) *di=*が存在する。連結接語は名詞、動詞の両方をホストとしうる接語で、所有、再帰、動詞の副詞化など、様々な機能を持つ (例 29)。

(29) a. *ʔoh di=ʔεw ʔa=jak hon.hian*

[1 単] [連]=子 [完]=行く 学校

「私の子供は学校へ行った。」

b. *ʔoh ʔa=wɔl di=gεŋ*

[1 単] [完]=帰る [連]=家

「私は自分の家に帰った。」

c. *guut di=pyaʔ.kleh*

考える [連]=良い

「よく考える」

本稿では所有についてのみ詳しくみる。所有を表す表現は、所有者-標識-被所有物の順序となり、主要部終端型 (head-final) の構造を示す。主要部終端型の構造は、AVO 型の言語の類型に反している点、また同地域の言語には見られない特徴である点で注目に値する。また、Dixon (2010: 262, 263) によるところの、所有、全体-部分関係、親族関係を表しうる (例 30)。

(30) a. *ʔoh di=gεŋ*

[1 単] [連]=家

「私の家」

b. *ʔoh di=ket*

[1 単] [連]=耳

「私の耳」

c. *ʔoh di=ʔεw*

[1 単] [連]=子

「私の子」

一方で、属性、位置、関連を表せない。関連を表す場合は、並置によって表す (例 31)。

(31) a. *ʔoh di=rup*

[1 単] [連]=写真

「私の所有する写真/\*私の映っている写真」

b. *rup ʔoh*

写真 [1 単]

「\*私の所有する写真/私の映っている写真」

## 6.2 数詞

数詞は「一」から「十」まで存在する(表 23)。

表 23 数詞

「一」	mɔy	「六」	tal
「二」	bɛr	「七」	gul
「三」	pɛʔ	「八」	tiʔ
「四」	pon	「九」	gac
「五」	t <sup>h</sup> ɣŋ	「十」	gal

数詞を用いて数量を表す場合、数詞と類別詞からなる数量句にして表す。数量句は、述語として機能する場合、名詞を修飾する場合、動詞を修飾する場合がある(例 32)。

- (32) a. ʔoh di=luk.ʔɔm bɛr klɔʔ  
 [1 単] [連]=飴 二 [類]  
 「私の飴が2つある。」
- b. mlaʔ bɛr mlaʔ  
 ムラブリ 二 [類]  
 「ムラブリ2人」
- c. jak nɔn bɛr lɛk  
 行く 寝る 二 [類]  
 「2日間寝に行く」

特殊な用法として、数詞「四」を数量句に用いると「たくさんの/全ての」という意味を普通意味し、「4つの」という意味で解釈されることは稀である(例 33)。

- (33) pleʔ pon klɔʔ  
 実 四 [類]  
 「たくさんの実/全ての実/4つの実」

数量句に後置して「プラス1」を表す標識が存在する(例 34)。

- (34) pleʔ sɔŋ klɔʔ <sup>h</sup>loy  
 実 二 [類] プラス1  
 「3つの実」

数詞「二」の時に「プラス1」の標識が表れやすいという傾向がある(cf. Rischel 1995: 147)。ただしこの標識が用いられる動機や pɛʔ「三」を用いた場合との差異は不明である。

## 6.3 人称

## 6.3.1 人称代名詞

人称代名詞に、一人称・二人称・三人称、単数・双数・複数の系列がある。ただし、指示と照応で、使用される形式が違う。まず、指示用法における人称代名詞を表 24 に示す。

表 24 指示用法における人称代名詞

	単	双	複
1	ʔoh	ʔah	ʔah+t <sup>h</sup> ʔŋ
2	mɛh	bah	bah+t <sup>h</sup> ʔŋ
3	mɔy	ʔak+bɛr	jum+ɲʌʔ

一人称・二人称、単数・双数が最も基本的な体系をなし、三人称と複数の系列は全て2次的な表現である。一人称・二人称の複数形は、それぞれの双数形と数詞「五」からなる。三人称、単数は数詞「一」と同形である。三人称・双数は定冠詞 ʔak と数詞「二」からなる。三人称・複数 は jum 「集団」と遠称で名詞用法の指示語 ɲʌʔ からなる。

複数形が双数形から派生されている点で類型論的に特異である。なお、双数、複数に包括・除外の区別、また人・動物・無生物などによる違いは確認されていない。

照応用法では、二人称・双数形が三人称の双数・複数に対しても用いられる(表 25 下線部)。

表 25 照応用法における人称代名詞

	単	双	複
1	ʔoh	ʔah	ʔah+t <sup>h</sup> ʔŋ
2	mɛh	bah	bah+t <sup>h</sup> ʔŋ
3	mɔy	ʔak+bɛr, <u>bah</u>	jum+ɲʌʔ, <u>bah</u>

二人称・双数形が三人称・複数形で用いられている例を挙げる(例 35)。

- (35) A : bah+t<sup>h</sup>ʔŋ jak kaleŋ  
 [3 複] 行く どこ  
 「彼らはどこへ行くのか？」
- B : bah ʔa=wʌl  
 [2 双] [完]=帰る  
 「彼らは帰った。」

二人称・双数形の照応用法における意味範囲は、次節で説明する人称所有標識と対応している(例 37b)。



## 6.3.2 人称所有標識

人称代名詞から派生した、人称所有標識が存在する。人称所有標識は、一人称・二人称、単数・双数のみ存在する (表 26)。

表 26 人称所有標識

	単	双
1	ʔok	ʔak
2	mɛk	bak

単数の所有標識は、それぞれ「私の」、「あなたの」を表す。通常の名詞句と異なり、主要部終端型 (head-final) の構造を示す点で、連結接語による所有表現と同じである。意味する範囲も、所有、全体-部分関係、親族関係と、連結接語を用いる場合と同じである (例 36)。

- (36) a. ʔok      gɛŋ  
       [1 単有] 家  
       「私の家」  
       b. ʔok      ket  
       [1 単有] 耳  
       「私の耳」  
       c. mɛk      ʔɛw  
       [2 単有] 子  
       「あなたの子」

双数形から派生した所有標識には、特殊な用法が存在する。一人称・双数から派生した ʔak は、二人称・双数の所有「私達ふたりの (所有する)～」を表しうるが、「定冠詞」として用いられることが多い (例 37a)。二人称・双数から派生した bak は、二人称・双数の所有だけでなく、三人称の双数・複数、すなわち非単数の所有「彼らの/彼女らの」を表す (例 37b)。この二人称・双数の所有標識の意味範囲は、照応における人称代名詞の意味範囲と対応している (cf. 表 25)。

- (37) a. ʔak    ʔbɯɯ    kɔbɔ    jɬɛ  
       [定] 葉    [否] 美味しい  
       「その葉は美味しくない。」  
       b. bak      gɛŋ    hik      ʔyɛʔ  
       [2 非単有] 家    とても 遠い  
       「彼らの家はとても遠い。」

#### 6.4 所格・向格

所格接語 (locative) と向格標識 (allative) は名詞句をホストとし、副詞句、名詞修飾句を形成する (例 38)。

- (38) a. ?oh bih lam ni=bri?  
 [1 単] 切る 木 [所]=森  
 「私は森で木を切る。」  
 b. ?ah+t<sup>h</sup>ɣŋ hɣuh luŋ bri?  
 [1 複] 居る [向] 森  
 「私たちは森の方にいる。」

向格標識のみ、指示語と人称代名詞をホストとしうる (例 39)。

- (39) a. ?oh hɣuh luŋ gɬh  
 [1 単] 居る [向] [近 2]  
 「わたしはこっちの方に座る。」  
 b. ma? luŋ ?oh ↗  
 与える [向] [1 単]  
 「私の方に渡せ。」

#### 6.5 否定

否定標識 kɔbɔ と否定接語 ki= の 2 種類が存在する。否定標識は動態動詞と共起しやすく、否定接語は状態動詞と共起しやすい (例 40)。ただし、これは飽くまで傾向であり、義務的な使い分けではない。

- (40) a. kɔbɔ jak  
 [否] 行く  
 「行かない」  
 b. ki=tr.nap  
 [否]=大きい  
 「大きくない」

また、二重否定は標識-接語の順序のみ観察されている (例 41)。

- (41) ?oh kɔbɔ ki=jaj ?ɣh  
 [1 単] [否] [否]=できる する  
 「私はできなくはない。」

6.6 テンス・アスペクト・モダリティ

テンス・アスペクト的な意味を表す形式は、接語と標識に分けられる。接語には、完了 (perfect) ?a=がある。標識には、現在未完了 (present imperfect) kalΛy.kuur、過去未完了 (past imperfect) kalΛy、継続 kuu、先行 ?ar が認められる。表 27 にそれぞれ示す。

表 27 テンス・アスペクト

完了	現在未完了	過去未完了	継続	先行
?a=	kalΛy.kuur	kalΛy	kuu	?ar

未完了にのみ、現在と過去の区別がある。例 42 にそれぞれの例文をあげる。

- (42) a. ?oh ?a=?y? yuk  
 [1 単] [完]=食べる [穀] ご飯  
 「私はご飯を食べた。」
- b. ?oh kalΛy.kuur ?y? yuk  
 [1 単] [現未完] 食べる [穀] ご飯  
 「私はまだご飯を食べ終わっていない。」
- c. ?oh kalΛy ?y? yuk  
 [1 単] [過未完] 食べる [穀] ご飯  
 「私はご飯を食べなかった。」
- d. møy kuu nɔn  
 [3 単] [継] 寝る  
 「彼は寝ている。」
- e. ?oh ?ar wɔl  
 [1 単] [先] 帰る  
 「私は先に帰る。」

モダリティを表す形式は、接語と標識に分けられる。接語には、切迫 (imminent) ?a=、願望 si=を認める。標識には、義務 dalΛy、非義務 kalΛy、蓋然 ?ado の 3 種類が存在する。表 28 に形式、例 43 に例文を示す。

表 28 モダリティ

切迫	願望	義務	非義務	蓋然
?a=	si=	dalΛy	kalΛy	?ado

## ムラブリ語の文法スケッチ

- (43) a. ?oh ?a=jak  
[1 単] [迫]=行く  
「私はもう行く。」
- b. ?oh si=nɔn  
[1 単] [願]=寝る  
「私は寝たい。」
- c. ?oh dalɔy jak  
[1 単] [義] 行く  
「私は行かなければならない。」
- d. ?oh kalɔy ?ɣh  
[1 単] [非義] する  
「私はしなくてもよい。」
- e. mɛh ?ado nɔn  
[2 単] [蓋] 寝る  
「あなたは寝てもいいだろう。」

テンス・アスペクト・モダリティを表す形式で注目すべきは、形式の類似である。例えば、「完了」と「切迫」は、共に ?a=であり、「過去未完了」と「非義務」の形式は共に kalɔy である。また、「義務」と「非義務」は後半部分-lɔy が共通しており、分析できる可能性を残す。

### 6.7 ムード

#### 6.7.1 諾否疑問

諾否疑問には、諾否疑問標識を用いるものと、選択疑問文がある (例 44)。

- (44) a. ?a=?ɣ? yuk leh  
[完]=食べる ご飯 [穀] [諾否]  
「ご飯を食べたか？」
- b. ?a=?ɣ? yuk la <sup>h</sup>lak  
[完]=食べる [穀] ご飯 か ない  
「ご飯を食べたか否か？」

疑問語を含む疑問文については、3.2.1 節、4.5.2 節を参照されたい。

#### 6.7.2 命令・禁止

動態動詞を裏声イントネーションを伴いながら発話した場合、命令の意味を表す (例 45)。

- (45) jak ↗  
行く  
「行け！」

禁止の表現には、禁止標識 g<sub>AM</sub> を動詞の前に置く (例 46)。

- (46) g<sub>AM</sub> jak ↗  
 [禁] 行く  
 「行くな！」

命令、禁止する相手は文頭に置く (例 47)。親族には呼称を用いる (cf. 4.4.2 節)。

- (47) m<sub>VM</sub> g<sub>AM</sub> jak ↗  
 [呼. 父] [禁] 行く  
 「父よ、行くな！」

過去未完了/非義務の標識 kal<sub>Y</sub> は、二人称を主語にした場合、相手がまだその行動をしていないことを非難して、行動を促す意味合いが出る (例 48)。

- (48) meh kal<sub>Y</sub> jak ↗  
 [2 単] [過未完]/[非義] 行く  
 「あなたは早く行け！ (lit. あなたは行かなかった。/あなたは行かなくてもよい。)」

## 6.8 ヴォイス

### 6.8.1 使役

使役を表すには使役接頭辞を用いる方法と、maʔ 「与える」を用いる構文の 2 種類が存在し、意味的な差異が存在する。前者は使役接辞を用いた動詞の主語が動作を行い、後者は maʔ 「与える」の後にくる名詞句の指す人物が動作を行う (例 49)。

- (49) a. m<sub>VO</sub> ba-t<sup>h</sup>al<sub>EW</sub> w<sub>YK</sub> ʔok ʔ<sub>EW</sub>  
 医者 [使]-浴びる 水 [1 単有] 子  
 「医者が私の子を水を浴びさせた。(医者が子に水をかけている)」
- b. ʔoh si=<sup>ʔ</sup>day maʔ ʔok ʔ<sub>EW</sub> t<sup>h</sup>al<sub>EW</sub> w<sub>YK</sub>  
 [1 単] [願]=得る 与える [1 単有] 子 浴びる 水  
 「私は私の子に水を浴びをさせたい (子が自分で水浴びをする)」

### 6.8.2 受身

現段階では、ムラブリ語に受身を表す形式・構文は観察されていない。ただし、使役接辞を用いた慣用表現に、日本語の受身で訳せられる表現が存在する (例 50)。

- (50) meh ba-t<sub>AN</sub> ʔoh  
 [2 単] [使]-言う [1 単]  
 「(相手を非難して) お前は俺に言われたじゃないか。 (lit. お前が俺に言させた)」

### 6.9 手段の目的語

ムラブリ語には具格を表す形式が存在しない。具格に相当する表現は、具格を付与したい名詞句を直接目的語の位置に置くことで表す(例 51b)。目的語の位置にあり、具格の付与される名詞句を、本稿では「手段の目的語」(object of instrument)と呼ぶ(cf. イェスペルセン 2006: 85)。「目的語」と呼ぶのは、他動詞の後ろにこの両方が同時に現れえないことため、具格の付与される名詞句は目的語の位置を占めていると判断できるからである(例 51c、d)。

- (51) a. cuak bεʔ  
掘る 土  
「土を掘る」
- b. cuak soʔ  
掘る 鋤  
「鋤で掘る」
- c. \*cuak bεʔ soʔ  
掘る 土 鋤
- d. \*cuak soʔ bεʔ  
掘る 鋤 土

具格と目的格の両方を持つ表現(「鋤で土を掘る」など)を1つの動詞で表すことがムラブリ語はできない。そのような表現は、ʔek「取る」を用いた動詞連続によって表す(例 52)。

- (52) ʔek soʔ cuak bεʔ  
取る 鋤 掘る 土  
「鋤で土を掘る」

### 6.10 談話標識

対比談話標識(contrastive discourse marker)のkatʌŋとhakを認める。katʌŋは対比する相手、または相手の行動に限定はないが、hakの場合は「対比する相手とは異なる」ことが含意される。この標識の付く名詞句は、必ず節の最初に置かれる(例 53)。

- (53) a. ʔoh katʌŋ jak  
[1 単] [談] 行く  
「(他の人はともかく)私は行く。」
- b. ʔoh hak jak  
[1 単] [談] 行く  
「(他の人は行かないが)私は行く。/(他の人とは別方向だが)私は行く。」

## 6.11 節連結

### 6.11.1 関係節

関係節は、標識 *nii* を用いる。主語、目的語の関係節化は可能であるが、手段の目的語は関係節化できない (例 54)。

- (54) a. *brap nii kɾɔp mɛh*  
 犬 [関] 噛む [2 単]  
 「あなたを噛んだ犬」
- b. *brap nii ʔoh mak*  
 犬 [関] [1 単] 好む  
 「私の好きな犬」
- c. *\*tiʔ nii ʔoh tɛk*  
 手 [関] [1 単] 叩く  
 「\*叩くのに使った手」

### 6.11.2 従属節

従属節は、標識 *kana* を用いる (例 55)。従属節は主節に先行する位置が普通である。

- (55) *kana mɛʔ hot ʔoh hɲuh ni=gɛɲ*  
 [従] 雨 落ちる [1 単] 居る [所]=家  
 「雨が降ったら、私は家に居る。」

### 6.11.3 補文節

動詞により補文節の導入方法が異なる。*mɔc* 「見える・分かる」は標識を用いない (例 56)。

- (56) *mɛh ʔa=mɔc ʔoh wɔl hwan ʔdɔɔ leh*  
 [2 単] [完]=見える [1 単] 帰る いつ [諾否]  
 「あなたは私がいつ帰るか分かったか？」

*tɔɲ* 「言う」は標識 *ʔaa* を、*gɔɪt* 「考える」は標識 *tɔɲa* を用いる (例 57、58)。

- (57) *ʔoh tɔɲ ʔaa gɔɪm jak*  
 [1 単] 言う [補] [禁] 行く  
 「私は行くなと言った。」
- (58) *ʔoh gɔɪt tɔɲa mɛh ʔa=wɔl*  
 [1 単] 考える [補] [2 単] [完]=帰る  
 「私はあなたが帰ったと考えていた。」

## 7 語彙

## 7.1 食べる・飲む

「食べる」に相当する語彙が3種類存在する。それらは、食べる対象によって使い分けられる。 $\text{?x?}$  は米、パンなどの穀物や穀物由来のもの、 $\text{boŋ}$  は肉類を、そして  $\text{pxy}$  は果実やゼリーなど水分を多く含むものを食べる時にそれぞれ用いられる (例 59)。

- (59) a.  $\{\text{?x?}/\text{*boŋ}/\text{*pxy}\}$  yuk  
 {食べる [穀]/\*食べる [肉]/\*食べる [果]} ご飯  
 「ご飯を食べる。」
- b.  $\{\text{*?x?}/\text{boŋ}/\text{*pxy}\}$  cin  
 {\*食べる [穀]/食べる [肉]/\*食べる [果]} 肉  
 「肉を食べる。」
- c.  $\{\text{*?x?}/\text{*boŋ}/\text{pxy}\}$  ple?  
 {\*食べる [穀]/\*食べる [肉]/食べる [果]} 実  
 「実を食べる。」

「飲む」に相当する語は2種類存在し、これも飲む対象によって使い分けがある。水分のみからなる液体は  $\text{wɣk}$ 、固形物が含まれている液体は  $\text{sot}$  を用いる (例 60)。

- (60) a.  $\{\text{wɣk}/\text{*sot}\}$  jn.ra?  
 {飲む [液]/\*飲む [固]} 酒  
 「酒を飲む。」
- b.  $\{\text{*wɣk}/\text{sot}\}$  gn.roŋ  
 {\*飲む [液]/飲む [固]} 汁物  
 「汁物を飲む。」

ただし、本来食べ物でないものを口にする場合は、それが何由来か、または液体か固形かに関係なく、穀物を食べる場合に用いる  $\text{?x?}$  を用いる (例 61a)。さらに、人間以外の動物、例えば犬の食べる動作を表す場合も、食べる対象に関わらず  $\text{?x?}$  が用いられる (例 61b)。

- (61) a.  $\{\text{?x?}/\text{*boŋ}/\text{*pxy}/\text{*wɣk}/\text{*sot}\}$   $\text{?yak}$   
 {食べる [穀]/\*食べる [肉]/\*食べる [果]/\*飲む [液]/\*飲む [固]} 糞  
 「糞を食べる。」
- b.  $\text{brɔŋ}$   $\{\text{?x?}/\text{*boŋ}/\text{*pxy}/\text{*wɣk}/\text{*sot}\}$  cin cabut  
 犬 {食べる [穀]/\*食べる [肉]/\*食べる [果]/\*飲む [液]/\*飲む [固]} 肉 豚  
 「犬が豚肉を食べる。」

よって、穀物を食べる  $\text{?x?}$  が「食べる・飲む」行為を表す最も基本的な動詞であると考えられる。



以上でみた「食べる・飲む」を意味する語彙の関係を図2に示す。

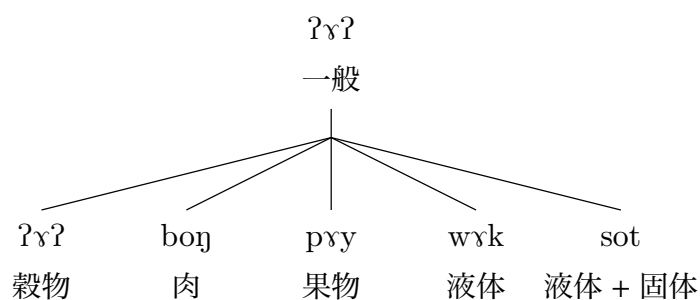


図2 「食べる・飲む」

## 7.2 借用語

タイ系言語からの借用語が多く観察される。その中で、タイ祖語 (Proto-Tai) の再建形には見られるが、現在のタイ系言語では声調対立に解消されてしまった頭子音の有声子音、無声側面音、声門化音・入破音 (implosive) を保持していると思われる語がいくつか存在する<sup>5</sup>。

表29 借用語

ムラブリ語	タイ祖語	タイ語	意味
bɛŋ	*beɛŋ <sup>A</sup>	p <sup>h</sup> ɛɛŋ <sup>1</sup>	「(値段が) 高い」
<sup>h</sup> lek	* <sup>h</sup> lek <sup>D</sup>	lek <sup>2</sup>	「鉄」
<sup>ʔ</sup> yaa	* <sup>ʔ</sup> yaa <sup>A</sup>	yaa <sup>1</sup>	「薬」
<sup>ʔ</sup> bɣɣ	* <sup>ʔ</sup> bɣɣ <sup>A</sup>	bay <sup>1</sup>	「葉」
<sup>ʔ</sup> dɣɣ	* <sup>ʔ</sup> dɣɣ <sup>A</sup>	day <sup>1</sup>	不定標識

また、タイ系言語からの借用語が豊富である反面、社会的に最も近いフモン語 (Hmong) やミエン語 (Mien) からの借用語がほとんどみられない点は興味深い。

<sup>5</sup> タイ祖語、タイ語 (Siamese) の形式は Pittayaporn (2009) を参照したが、本稿に合わせて表記を一部変更してある。Pittayaporn (2009) は長母音を長母音記号を用いて表しているが、本稿では母音を連続して表記する方法に変更してある (「(値段が) 高い」の例など)。また、わたり音は j から y に変更した (「薬」の例など)。タイ語の声調表記も、一部簡略化してある。

## 記号・略号

.(ピリオド)... 音節境界；-... 接辞境界；=... 接語境界；+... 複合語境界；~... 重複；↗... 裏声イントネーション；1... 一人称；2... 二人称；3... 三人称；C... 子音；N... 鼻音；V... 母音；単... 単数；双... 双数；複... 複数；非単... 非単数；有... 所有標識；間... 間投詞；呼... 呼称；近 1... 話し手と聞き手の両方に近い指示語；近 2... 話し手に近い指示語；遠... 遠称；定... 定冠詞；所... 所格；向... 向格；集... 集合名詞派生；名... 名詞派生；類... 類別詞；使... 使役；完... 完了；現未完... 現在未完了；過未完... 過去未完了；継... 継続；先... 先行；迫... 切迫；願... 願望；義... 義務；非義... 非義務；蓋... 蓋然；否... 否定；禁... 禁止；諾否... 諾否疑問標識；談... 談話標識；連... 連結標識；穀... 穀類を食べる；肉... 肉類を食べる；果... 果実類を食べる；液... 液体を飲む；固... 固体を含んだ液体を口にする；関... 関係節標識；従... 従属節標識；補... 補文標識

## 参考文献

- Avram, Andrei A. (2011) “Pseudo-reduplication, Reduplication and Repetition: The Case of Arabic-Lexified Pidgins and Creoles”, *Revue Roumaine De Linguistique-Romanian Review of Linguistics* 56(3): 225–256.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory*. Volume 2 Grammatical Topics. New York: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin & Uri Tadmor eds. (2009) *Loanwords in the World's Languages: A Comparative Handbook*. Berlin: Walter de Gruyter.
- イエスペルセン・オット著, 安藤貞雄訳 (2006) 『文法の原理 (中)』岩波文庫 青 657-4. 東京: 岩波書店.
- Nimonjiya, Shu (2014) “Another History of Chao Khao: The Mlabri in Northern Thailand.” *Aséanie*. (in press)
- 長田俊樹 (2009) 「ムンダ語の感情語」大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集』1: 35–66. 京都: 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト.
- Pittayaporn, Pittayawat (2009) *The Phonology of Proto-Tai*. Doctoral Dissertation, Cornell University.
- Rischel, Jørgen (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-Gatherer Language of Northern Indochina*. Copenhagen: Museum Tusulanum Press.
- (2007) *Mlabri and Mon-Khmer—Tracing the History of a Hunter-gatherer Language*. Copenhagen: The Royal Danish Academy of Science and Letters.
- Sidwell, Paul (2009) *Classifying the Austroasiatic Languages: History and State of the Art*. Muenchen: Lincom Europa.

付録

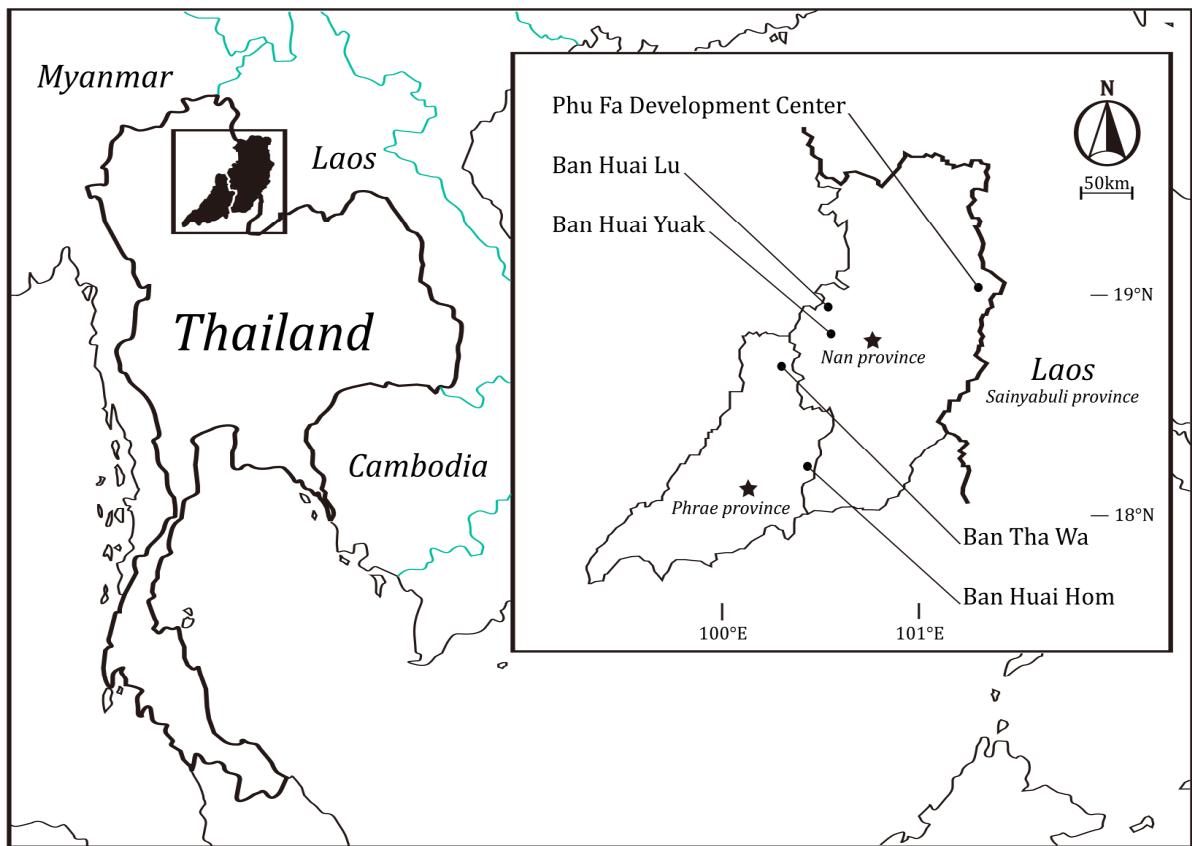


図3 タイ国におけるムラブリA方言話者の居住地 (Nimonjiya 2014)

# モンゴル語における語頭母音添加\*

植田 尚樹

京都大学／日本学術振興会

## 1 はじめに

モンゴル語ハルハ方言（以下モンゴル語とする）では、語頭の *r* や語頭の子音連続は許されず、そのような音韻構造を持つ語が借用されるとき、語頭母音添加や母音挿入によって許されない音韻構造を回避すると言われている。しかし実際には、語による差や個人差が大きく、そう単純に一般化することはできない。

本稿では、語頭に *r* を持つ借用語、ならびに語頭に *sC-*, *šC-* クラスターを持つ語を対象に、母音添加がどのような方法で、どの程度行われているかを検討する。そして、①母音が添加されるかどうかは、文中における音韻的環境によって頻度が大きく異なること、②母音添加は、「語頭の *r* や語頭子音連続」を避けるためというよりはむしろ、「3 つ以上の子音の連続」を回避するために行われる傾向にあること、③添加母音は音韻的なものではなく音声的なものであることを示す。

なお、以下では特に断らない限り、モンゴル国で用いられているキリル文字による正書法をローマ字転写した表記を用いる。詳しい転写方法は付録に示す。アクセント符号は正書法では用いられないが、強勢位置を示す必要がある場合に適宜使用する。

## 2 音韻構造

本節では、モンゴル語の借用語に見られる音韻構造について、先行研究で述べられていることを整理する。

### 2.1 借用語音韻論

モンゴル語にはロシア語からの多くの借用語がある。それらは主にソビエト時代に借用された。また最近では、英語からの借用語が増加している（塩谷・プレブジャブ 2001）。

ロシア語からの借用語について述べると、表記の面では、末尾の強勢のない母音が消去されることがある（例: *lógika* → *logik* 《論理学》）などの例外はあるが、原語表記に相違なく綴られるものが多い。

音声、音韻の面では、ロシア語でアクセントを持つ母音は長母音として発音され

---

\* 本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号 24・5181）および JSPS 科研費 12J05181 の助成を受けたものである。

る (例: bár [ba:r] 《バー》 cf. bar [bar] 《トラ》)。その他にも、モンゴル語の音節構造に合わせて母音の位置が変わる (Svantesson 1995; Svantesson et al. 2005)、母音調和に従って母音の音価が変わる (Svantesson 2004)、語の定着度によって母音の弱化が起こる (植田 2013) などの変化が起こることもあるが、これらはいずれも話者や語によって差がある。話者間での個人差は、話者のロシア語の知識や二言語併用のレベルなどの要因に左右されると言われている (Svantesson 2004; Svantesson et al. 2005)。

また、モンゴル語では許容されない音韻構造を持つ語が借用される場合、主に母音の添加・挿入によって音韻構造が改変される。そのような例として、2.2 節では語頭の r、2.3 節では語頭の子音連続を挙げる。

## 2.2 語頭の r

モンゴル語には r から始まる固有語はない。ロシア語やチベット語からの借用語で語頭に r があるものは、綴り字上は語頭に <r> が書かれる。そのような語は普通、語頭に母音を付け加えて発音される。 (“Such words are usually pronounced with an added initial vowel” Svantesson et al. 2005: 30、“in actual speech it is normally preceded by a prothetic vowel” Janhunen 2012: 27)

- |     |        |                         |                 |                                    |
|-----|--------|-------------------------|-----------------|------------------------------------|
| (1) | 語彙     | 発音                      | 原語              | 意味                                 |
|     | radio  | [aračəw]                | rádio (Ru.)     | 《ラジオ》                              |
|     | rinčen | [irənč <sup>h</sup> əŋ] | rin-chen (Tib.) | (人名)                               |
|     |        |                         |                 | (発音表記は Svantesson et al. 2005 の通り) |

より定着した借用語の中には、語頭に母音を添加した形で綴られるものもある (Janhunen 2012)。

- (2) arašaan 《鉱泉・聖水》 ← rašiyana (Sanskrit)

ロシア語からの借用語において、語頭に添加される母音は、普通はロシア語で強勢を持つ母音がコピーされる。 (“When a Russian word beginning with r is borrowed, a vowel is inserted before the r, usually a copy of the stressed vowel” Svantesson 2004: 105)

- |     |                            |                          |           |                                      |
|-----|----------------------------|--------------------------|-----------|--------------------------------------|
| (3) | Russian<br>transliteration | Russian<br>pronunciation | Mongolian |                                      |
|     | a. rádio                   | [rad <sup>l</sup> ɪɐ]    | aračəw    | ‘radio’                              |
|     | b. rezína                  | [r <sup>l</sup> ɪˈzina]  | irčəŋ     | ‘rubber’                             |
|     | c. rjúmka                  | [r <sup>l</sup> ʊmkə]    | urumk     | ‘wine glass’                         |
|     |                            |                          |           | (Svantesson 2004: 104 (22c) 表記は一部改変) |

## モンゴル語における語頭母音添加

しかし、本当に強勢を持つ母音がコピーされているかどうかは検討の余地がある。(3a, c) は、強勢を持つ母音がコピーされているという解釈のほか、直後の母音がコピーされていると考えることもできる。また (3b) の例は、[ɪ] ではなく [i] が添加されていることから、一見すると直後の母音ではなく強勢を持つ母音がコピーされているように見える。しかし、ロシア語の [ɪ] は、モンゴル語において [i] で発音されるため、[ɪ] と [i] のどちらの母音がコピーされたとしても語頭には [i] が現れることになり、どちらの母音がコピーされているのか判定することはできない。

モンゴル語の発音辞典である Sambuudorj (2011) によると、r から始まる語の発音には全て語頭に母音が添加されているが、強勢を持つ母音がコピーされるのではなく、r の直後の母音を基に語頭添加母音が決定されている。以下に 2 つの例を示す。

- (4) 語彙 発音 原語 意味  
rakét [arke:t] rakét (Ru.) 《ラケット》  
rédaktør [irda:ktar] redáktør (Ru.) 《編集者》

(発音表記は Sambuudorj (2011) の通り)

ロシア語で強勢を持つ母音がコピーされると考えると、(4) の例はそれぞれ [irke:t]、[arda:ktar] となるはずであるが、そのようになっていない。

また実際の発音では、語頭に母音が添加されず、語頭の r がそのまま発音されることもままある。その点については 5.1 節で述べる。

### 2.3 語頭子音連続

モンゴル語では、語頭の子音連続は許されない。借用語においては、語頭子音連続は母音挿入および語頭音添加によって回避される。Svantesson et al. (2005) によると、通常は原語で強勢を持つ母音がコピーされ、子音クラスターの中に挿入される(例: dráma → daram 《ドラマ》) が、子音クラスターが s または š で始まっているならば、子音クラスターの前に母音 i を添加することによって、語頭の子音連続を回避する。

- (5) spírť → ispirt 《アルコール》  
škáf → iškaf 《戸棚》

しかし Svantesson et al. (2005) には、例外的に 2 子音間に母音が挿入されている例も 1 例ある。

- (6) šljápa → šiľap 《帽子》 (Svantesson et al. 2005: 32 表記は改変)

この理由については何も述べられていない。また、母音の挿入・添加がなく、初頭子音連続をそのまま発音するケースが見られる。これについては 5.2 節で述べる。

### 3 問題提起

2 節では、語頭の r ならびに語頭の子音連続を回避するための母音添加について概観したが、いくつか問題があることが明らかになった。以下に問題点を整理する。

語頭の r について

- ・語頭に添加される母音は、どの母音なのか（強勢を持つ母音／直後の母音）

語頭の r および語頭子音連続について

- ・先行研究は実態を正しく記述しているか
- ・母音添加が行われる場合と行われない場合があるが、その有無はどのように決まっているのか（予測可能か否か）
- ・添加される母音は音韻的なものか、音声的なものか

母音添加の有無には、語による差、個人差のほか、音韻的環境によって差が出る可能性がある。語頭に r を持つ語や、語頭に子音クラスターを持つ語が文中に現れる場合、①直前の語の末尾子音の後、②直前の語の末尾母音の後、③文頭、という 3 つの環境が考えられる。添加される母音が音韻的なものであれば、どのような環境でも安定して母音挿入が行われると予想される。それに対して、添加される母音が音声的なものであれば、特定の環境に偏って母音添加が行われることが予想される。具体的には、母音の直後では音声的に母音が挿入される必要性がないため、母音挿入が行われにくいと考えられる。

以上の問題点を明らかにするため、調査を行った。

## 4 調査

### 4.1 調査内容

語頭に r を持つ借用語、語頭に s-, š- から始まる子音クラスターを持つ借用語を、以下のキャリア文の下線部に入れて、全文を読み上げてもらった。最初にキャリア文をキリル文字表記で提示し、その下にターゲットとなる語をキリル文字表記で列挙した。

- (3) a. tend \_\_\_\_ geј bičcestei baina 《あそこに\_\_\_\_と書いてある》  
b. minii duu \_\_\_\_ geј xelsen 《私の弟は\_\_\_\_と言った》  
c. \_\_\_\_ gedeg n<sup>1</sup> juu we? 《\_\_\_\_というのは何ですか？》

## モンゴル語における語頭母音添加

ターゲットとなる語が (7a) では子音の直後、(7b) では母音の直後、(7c) では文頭に位置する。文中における位置によって、母音添加の有無に差があるか否かを調べるのが目的である。読み上げられた文を録音し、praat (Boersma and Weenink 2012) を用いて音響分析することで、語頭の添加母音の有無と、添加母音がある場合にはその音価を確認した。

なお、ロシア語の知識を持つ話者にも、ロシア語の単語としてではなくモンゴル語の単語として読んでもらうため、(7a) と (7b) ではダミーとなるモンゴル語の単語を複数用意し、最初に読み上げる文のターゲットの語が必ずダミーの語となるようにした。その他の語の順序は、ランダム関数によりランダムに配置している。調査は (7a) → (7b) → (7c) の順に行い、(7c) ではダミーの語は入れていない。

### 4.2 調査語彙

語頭に r を持つ借用語に関しては、原語での強勢の位置、母音の音価を考慮に入れ、以下の 13 語を選んだ。第 2 音節以降に強勢を持つ語に関しては、第 1 音節の母音と強勢を持つ母音が異なる語を選ぶことで、母音添加の際にどの母音がコピーされているかが明らかになるようにした。

表 1：調査語彙（語頭 r）

強勢母音 第 1 音節	a	ê	ɔ	i
a	rádio 《ラジオ》 radiátor 《ラジエーター》	razmér 《サイズ》		
ê	rêklám 《広告》 rêdáktoꝛ 《編集者》 rêstorán 《レストラン》 rêfêrát 《論文》	réktóꝛ 《学長》	rekóꝛd 《記録》	rêzín 《ゴム》
ɔ	rómá 《長編小説》			
ɔ	ruánda 《ルワンダ》			rumín 《ルーマニア》

一方、初頭子音連続を持つ語に関しては、sp-, st-, str-, sk-, sl-, št-, štr-, šk- を語頭に持つ計 17 語を調査語彙とした。



sp-: spartakiad 《試合》, spirt 《アルコール》, sport 《スポーツ》  
 st-: stadion 《スタジアム》, standart 《標準》, stanc 《施設》, statistik 《統計》  
 str-: strategi 《戦略》, stress 《ストレス》  
 sk-: skai 《スカイ(店名)》, skoč 《セロハンテープ》  
 sl-: slêsar<sup>1</sup> 《修理工》, slowaki 《スロバキア》, slowêni 《スロベニア》  
 št-: štab 《司令部》  
 štr-: štrix 《修正液》  
 šk-: škaf 《戸棚》

### 4.3 インフォーマント

インフォーマントは以下の4名である。4名とも現在はウランバートルの大学で日本語を専攻している。また、学校教育で英語を6年以上学習している。

	年齢	出身地	ロシア語学習歴と会話能力
A	19	ウランバートル	2年
B	19	ホヴド県	5年・少し話せる
C	19	ダルハン	2年
D	29	ヘンティール県	6年・自由に話せる

## 5 結果

### 5.1 語頭の r

本節では、語頭に r を持つ借用語における語頭母音添加の結果を示す。5.1.1 において、母音添加の有無に関する全体的な傾向を概観した後、5.1.2 で添加される母音の音価について考察し、語内のどの母音が添加母音としてコピーされているのかを明らかにする。5.1.3 では環境別（子音の直後、母音の直後、文頭）に、母音添加について考察する。

#### 5.1.1 母音添加の有無

表2に、語頭に r を持つ語の語頭における母音添加の有無を示す。C<sub>-</sub> は子音の直後（つまり (7a) の結果）、V<sub>-</sub> は母音の直後（(7b) の結果）、#<sub>-</sub> は文頭（(7c) の結果）を表す。○は明らかな母音添加があること、△は非常に短く弱い母音が添加されていること、- は母音が添加されていないことを表す。なお、母音の有無や強弱については恣意的にならざるを得ないが、聴覚的に母音が聞こえ、準周期的波形を持ち、スペクトログラム上で第1フォルマントと第2フォルマントの帯が確認できる場合に「母音がある」とみなしている。

## モンゴル語における語頭母音添加

表 2：母音添加の有無（語頭 r）

話者/環境 語	インフォーマント A			インフォーマント B			インフォーマント C			インフォーマント D		
	C_	V_	#_	C_	V_	#_	C_	V_	#_	C_	V_	#_
radiátor	○	-	-	-	-	-	○	-	-	○	-	-
rádio	-	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-
razmér	○	-	-	△	-	-	○	○	-	○	-	-
rédáktør	○	○	-	○	-	-	○	-	-	△	-	-
rêfêrát	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-
rêklám	-	-	-	○	-	○	○	○	○	○	-	-
rekórd	-	-	-	○	-	-	○	-	-	-	-	-
réktør	○	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-	○
rêstørán	○	○	△	○	○	○	-	-	○	○	○	-
rêzín	-	○	-	○	-	△	○	-	-	-	-	-
rómán	-	-	-	-	-	-	△	-	-	-	-	-
ruánda	-	-	-	-	-	-	△	-	-	○	-	-
rumín	-	-	-	-	-	-	○	-	○	-	-	-

表 2 から、母音添加が起こりやすい語や起こりにくい語があるという傾向は見られるものの、全話者の全環境で必ず母音添加が起こる、という語は 1 語もないことがわかる。

話者別に見ると、こちらもインフォーマント C は比較的母音を添加している一方、インフォーマント A と D は母音添加が少ない、といった傾向は認められるものの、やはり全ての語の全ての環境で母音添加を起こしている話者はいない。

環境別に見ても、やはり全話者の全ての語で母音が添加されている環境は見られない。しかし、直前が子音であるという環境 (C\_) では、他の環境に比べて、どの話者でも母音添加が起こりやすい傾向が見て取れる。特にインフォーマント C では、rêfêrát 《論文》と rêstørán 《レストラン》を除いて、全ての語で母音の添加が起こっている。

### 5.1.2 添加される母音の音価

明らかな母音添加がある場合、どのような母音が現れるのであろうか。以下にくつか例を示す。

- (8) razmér 《サイズ》 [aradzme:r] (A, C, D)  
 rêklám 《広告》 [ĩrkla:m] (B), [ɛrekla:m] (C, D)  
 rêstørán 《レストラン》 [erstøra:ŋ] (A), [ɛrestøra:ŋ] (B)

(8) のように、アクセントを持つ母音ではなく、もともと第 1 音節にある母音がコピーされて、語頭に添加されている例が多い<sup>1</sup>。表 3 に、添加される母音の音価を示す。非常に短く弱い母音は ə で表している。「予測」は第 1 音節の母音から推定される添加母音の音価を示し、網掛けは予測と実際の音価が一致しないことを示す。

表 3： 添加母音の音価と予測との一致数

語	予測	インフォーマント A			インフォーマント B			インフォーマント C			インフォーマント D		
		C_	V_	#_	C_	V_	#_	C_	V_	#_	C_	V_	#_
radiátor	a	a	-	-	-	-	-	u	-	-	u	-	-
rádio		-	-	-	u	-	-	u	-	-	u	-	-
razmér		a	-	-	ə	-	-	a	a	-	a	-	-
rédáktor	e i	jo	e	-	e	-	-	e	-	-	ə	-	-
rêfêrat		-	-	-	e	-	-	-	-	-	-	-	-
rêklám		-	-	-	i	-	e	e	e	e	e	-	-
rekórd		-	-	-	e	-	-	e	-	-	-	-	-
réktor		e	-	-	-	-	e	e	-	-	-	-	e
rêstorán		e	e	ə	e	e	e	-	-	u	u	e	-
rêzín		-	e	-	i	-	ə	e	-	-	-	-	-
román		o	-	-	-	-	-	ə	-	-	-	-	-
ruánda	u	-	-	-	-	-	ə	-	-	u	-	-	
romín		-	-	-	-	-	-	e	-	u	-	-	

表 3 から、第 1 音節の母音のコピーされる例が多いことがわかる。明らかに母音が添加されている 41 例のうち、予測通り第 1 音節の母音のコピーされる例は 33 例（約 80.5%）に上る。一方、強勢を持つ母音のコピーされていると考えなければならない例はない。したがって、コピーされる母音は強勢を持つ母音ではなく、r の直後にある母音であることが明らかである。

予測に反する例は 8 例あるが、これらのうち 6 例では、子音の直後という環境において [u] が挿入されている。この例については次節で述べる。

### 5.1.3 母音挿入の実態

5.1.1 では、環境によって母音添加の頻度に差があることが示された。具体的には、子音の直後において最も頻度が高く、母音の直後および文頭では頻度が低い。

文頭において母音が添加される頻度が低いという事実から、語頭 r がモンゴル語

<sup>1</sup> ê は [e] または [i] として実現する。

## モンゴル語における語頭母音添加

において許容され得る音韻構造であることがうかがえる。仮に語頭 *r* が厳密に回避されるとすれば、文頭という環境においてこそ最も高い頻度で母音の添加が行われると予想される。しかし今回の調査では、その逆の結果が出た。よって、語頭 *r* は完全に許容されない音韻構造ではないことがわかる。

また、子音の直後という環境において、他の環境よりも母音が添加されやすいことから、母音添加は子音連続を避けるための音声的なものである可能性が高い。このことは、前節で述べた、子音の直後という環境において [u] が現れる現象からも示唆される。モンゴル語の *r* はふるえ音 [r]<sup>2</sup> であり、子音 *d* に後続する場合、子音の開放から *trill* の開始までのつなぎの母音として [u] が音声的に挿入されると考えられる<sup>3</sup>。

- (9) *tend radio...* 《あそこにラジオ・・・》 [tendura:dʒɔ...] (B, C, D)  
*tend rêstoran...* 《あそこにレストラン・・・》 [tendurestɔra:ŋ...] (D)

しかし、*ndr* という 3 子音連続は、一般にモンゴル語において許容される。

- (10) *sandral* 《不安》  
*xundrel* 《悪化》

したがって、なぜ「語末子音（連続）＋語頭 *r*」という構造を持つ場合に限って *ndr* という 3 子音連続が回避され、母音が添加されるのか、検討する必要がある。今後の課題としたい。

### 5.2 語頭子音連続

本節では、語頭に子音連続を持つ借用語の語頭母音添加の結果を示す。5.2.1 で母音添加の有無を確認した後、5.2.2 で母音添加の実態について考察する。

#### 5.2.1 母音添加の有無

表 4 に、語頭に子音連続を持つ語の母音添加の有無を示す。表 2 と同様、*C*<sub>-</sub> は子音の直後、*V*<sub>-</sub> は母音の直後、*#*<sub>-</sub> は文頭を表し、○は明らかに語頭に母音が添加されていること、△は非常に短く弱い母音が添加されていること、- は母音が添加されていないことを表す。また●は、子音クラスターの中に母音が挿入されている

<sup>2</sup> 筆者のデータでは、はじき音[r]で現れる例も多く見られた。

<sup>3</sup> [u]は一般音声学的に、持続時間が短く聞こえ度が低い母音であることから、挿入母音として用いられることは自然である。ただし、なぜ[i]ではなく[u]が挿入されるのかは、現在のところ不明である。また、実際に円唇性のある[u]で発音されているかどうか（非円唇の[ɯ]ではないか）についても、検討の余地がある。

ことを表す。

表 4：母音添加の有無（語頭子音連続）

話者/環境 語	インフォーマント A			インフォーマント B			インフォーマント C			インフォーマント D		
	C_	V_	#_	C_	V_	#_	C_	V_	#_	C_	V_	#_
skai	△	○	△	○	○	-	○	○	-	△	○	-
skoč	○	-	-	-	○	△	○	○	○	△	○	○
slêsar <sup>j</sup>	△	●	○	●	●	○●	●	●	●	●	●	●
slowaki	-	-	-	○	-	-	△	△	-	-	-	△
slowêni	△	-	-	-	-	-	○	△	-	○	-	-
spartakiad	-	-	-	○	△	△	○	○	-	-	○	-
spirt	○	○	○	○	△	△	○	△	△	○	△	-
spört	△	○	-	△	-	-	○	○	-	○	-	○
stadion	△	-	△	○	-	-	○	○	-	○	○	-
standart	-	-	-	○	-	-	○	○	-	○	-	○
stanc	-	-	△	△	○	-	○	○	-	○	○	-
statistik	○	○	-	-	-	-	○	△	-	○	-	△
strategi	-	○	-	○	○	○	○	○	○	-	△	-
stress	△	-	-	△	○	△	○	○	-	-	○	-
škaf	○	-	-	△	△	-	○	○	○	-	○	-
štab	△	-	-	△	-	-	-	-	-	△	-	-
štrix	○	-	△	○	-	-	○	○	-	-	○	△

表 4 から、母音添加が起こりやすい語や起こりにくい語があることがわかる。spirt 《アルコール》や skai 《スカイ（店名）》はかなり高い確率で母音が添加されるのに対し、slowaki 《スロバキア》や štab 《司令部》は母音添加が起こりにくい。この理由は明らかではないが、音韻構造が関係している可能性がある。sl- という語頭子音連続を持つ語は slêsarj 《修理工》、slowaki 《スロバキア》 slowêni 《スロベニア》の 3 語あるが、いずれも語頭への母音の添加は行われにくい。slêsarj 《修理工》では、子音クラスターの中に母音を挿入することで、子音クラスターを回避するという方法が優勢であり、これは (6) に示した例と同様である。

(11) slêsar<sup>j</sup> [sele:sar]

(12) šljápa → šil<sup>j</sup>ap 《帽子》 (=6 再掲)

これらの例から、sl-, sl- という子音クラスターを持つ語では、語頭の母音添加は行われにくいと言える。ただし、この構造を持っていても語頭に母音が添加される例もあるため、音韻構造が決定的な要因であるわけではない。

環境別に見ると、子音の直後で最も母音添加が起りやすく、次いで母音の直後、文頭という順序になっている。特にインフォーマント C では、子音の直後、母音の直後という環境において、*stab* 《司令部》を除く全ての語で母音の添加を行っている。

### 5.2.2 母音添加の実態

前節では、環境によって母音添加の起りやすさに差があることが示された。

文頭において母音が添加される頻度が最も低いという事実から、語頭 *r* と同様に、語頭子音連続がモンゴル語において、完全に許容されない音韻構造ではないことが示唆される。

子音の直後で母音が添加されやすい理由については、4 子音連続を避けるためであると考えられる。本調査では、子音の直後という環境において、母音挿入が行われなければ [ndst] [ndjt] という 4 子音連続が生じる。これを避けるために音声的な母音が挿入されるため、子音の直後という環境において、母音が挿入される頻度が最も高くなると考えられる<sup>4</sup>。

ただし、語頭に *r* を持つ語の場合とは異なり、母音の直後という環境でも、ある程度母音の添加が行われる。文頭では母音添加が行われにくく、母音の直後では行われやすい理由については、現段階では明らかでない。

## 6 まとめと今後の課題

前節では、語頭の *r* の前に添加される母音は、強勢を持つ母音ではなく、*r* の直後の母音がコピーされていること、語頭の *r* および語頭子音連続を持つ語に対して語頭母音添加が行われるか否かは、文中における音韻的環境が大きく関わっていることを示した。具体的には、語頭に *r* を持つ語、語頭子音連続を持つ語ともに、子音の直後という環境において最も母音添加の頻度が高く、文頭では頻度が低い。文頭で母音添加の頻度が低いことから、語頭の *r* および語頭子音連続はともに、厳密に回避される音韻構造ではないことがわかる。また、子音の直後で母音添加の頻度が高いのは、3 つ以上の子音の連続を回避するためであると考えられる。このことから、添加母音は、原語において語頭に *r* および子音連続を持っている借用語の語頭に音韻的に添加される母音なのではなく、特定の環境に現れる音声的なものであ

<sup>4</sup> 4 子音連続はモンゴル語において許容されないため、母音が挿入されることは自然である。しかし、許容される 3 子音連続 (例えば *rst*) においても、*st* の前に母音が挿入される傾向にあるのか否かは、本調査からは明らかでない。

る可能性が高い。ただし、子音の直後という環境において常に高い頻度で母音の添加が行われるのか、それとも今回の調査で用いた nd という子音連続の後に続く場合にのみ母音添加が行われるのかは明らかでなく、今後の課題である。

今回の結果は、2 節で述べた先行研究と異なる点が多い。その原因として、世代差や外国語学習歴など、言語外的要因も関与している可能性がある。これらを考慮に入れた綿密な研究が俟たれる。

付録（キリル文字転写）

キリル	а	б	в	г	д	е	ё	ж	з	и	й	к	л	м	н	о	ө	п
転写	a	b	w	g	d	je jo ê	jо	ǰ	z	i	i	k	l	m	n	o	o	p
キリル	р	с	т	у	ү	ф	х	ц	ч	ш	щ	ъ	ы	ь	э	ю	я	
転写	r	s	t	u	u	f	x	c	č	š	štš	-	ii	j	e	jü ju	ja	

※借用語に現れるキリル文字 e は ê で表す。

参考文献

- Boersma, Paul and David Weenink (2012) Praat: Doing phonetics by computer (Version 5.3.23). Online: <http://www.praat.org/>.
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Sambuudorj, Ochirbat (2011) *Mongol xelnii ügiin duudlagiin toli* [Pronouncing dictionary of Mongolian], Ulaanbaatar: Monsudar xewleliin gazar.
- 塩谷茂樹・E. プレブジャブ (2001) 『初級モンゴル語』東京：大学書林
- Svantesson, Jan-Olof (1995) ‘Cyclic syllabification in Mongolian’, *Natural Language and Linguistic Theory* 13: 755-766.
- Svantesson, Jan-Olof (2004) ‘What happens to Mongolian vowel harmony?’, in: Aniko Csirmaz, Youngjoo Lee and Mary Ann Walter (eds.), *Proceedings of WAFL 1: Workshop in Altaic Formal Linguistics*: 94-106.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Karlsson and Vivan Franzén (2005) *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- 植田尚樹 (2013) 「モンゴル語の母音調和と母音の弱化—外来語を用いた分析」『京都大学言語学研究』32: 37-76.

# ジンポー語の資料と文法注釈 —人間の唾の力はなぜなくなったか—

倉部慶太

京都大学／日本学術振興会

キーワード：ジンポー語、カチン語、チベット・ビルマ語派、カチン人、民話、ミャンマー

## 1 はじめに

### 1.1 本稿の目的

本稿の目的は、筆者がビルマのカチン州ミッチーナ市において行った臨地調査により収集したジンポー語民話資料のうち、「唾の力はなぜなくなったか」と題する民話資料の本文と文法注釈を提示することにある。1節ではジンポー語の概況、方言、本稿における表記法について記す。2節では民話資料本文を提示する。最後の3節では本文に対する文法注釈を示す。

### 1.2 ジンポー語に関する基本的事実

ジンポー語 (Jingpho) はシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する言語であり、ビルマのカチン州およびシャン州北辺を中心に分布するが、その分布の東端は中国雲南省、西端は東北インドにまで及ぶ (以下の図 1 を参照)。

ジンポー人は同じ民族意識を持つロンウォー Lhaovo (マル Maru)、ラチツ Lacid (ラシ Lashi)、ツァイワー Zaiwa (アツィ Atsi) などの民族とともにカチン (Kachin) と呼ばれる文化的集団を形成する。このうち、ロンウォー、ラチツ、ツァイワーなどの民族はロロ・ビルマ語支ビルマ語群に属する言語を話し、言語的にはジンポー人よりもむしろビルマ人に近い関係にある。しかし、カチン民族を構成する人々は共通の文化を持ち、ビルマ人とは異なるひとつの文化集団を形成している。このカチン民族において、ジンポー語は共通語 (lingua franca) の役割を担っており、ジンポー語はカチン語と呼称されることもある。

ジンポー語の話者人口に関しては、ビルマに 630,000 人、中国に 15,000 人、インドに 2,000 人の話者が居住すると推測される (Bradley 1996:751)。ただし、ジンポー語はカチン民族の共通語として機能しており、ロンウォー、ラチツ、ツァイワーなどのジンポー語を第二言語として用いる話者も含めるならば、ジンポー語の話者人口は 100 万人程度になると推測される。

### 1.3 ジンポー語の方言および本稿で対象とする方言

ジンポー語には少なくとも 17 の独立した方言 (または言語) が存在することが、先行研究および筆者の現地調査により明らかになってきた (Hanson 1896、西田 1960、劉 1984、Matisoff ed. 1996、Morey 2010、Kurabe 2014)。本稿でジンポー語と言う場合、このうちの標準方言



(Standard Jingpho) を指す。この方言は本来、カチン州バモー市 (Bhamo/Manmaw) を中心に分布する方言であったが、キリスト教の布教がこの地域を中心に始まったこと、1890 年代前半に考案されたジンポー語正書法がこの地の言語を基に制定されたことなどの事情から、後に他の地域へも普及した。ジンポー語話者はこの方言をバモー・シンリー語 (Manmaw-Sinli ga) と呼称している<sup>1</sup>。以下にジンポー語方言の地理的分布を示した図および方言のリストを提示する。

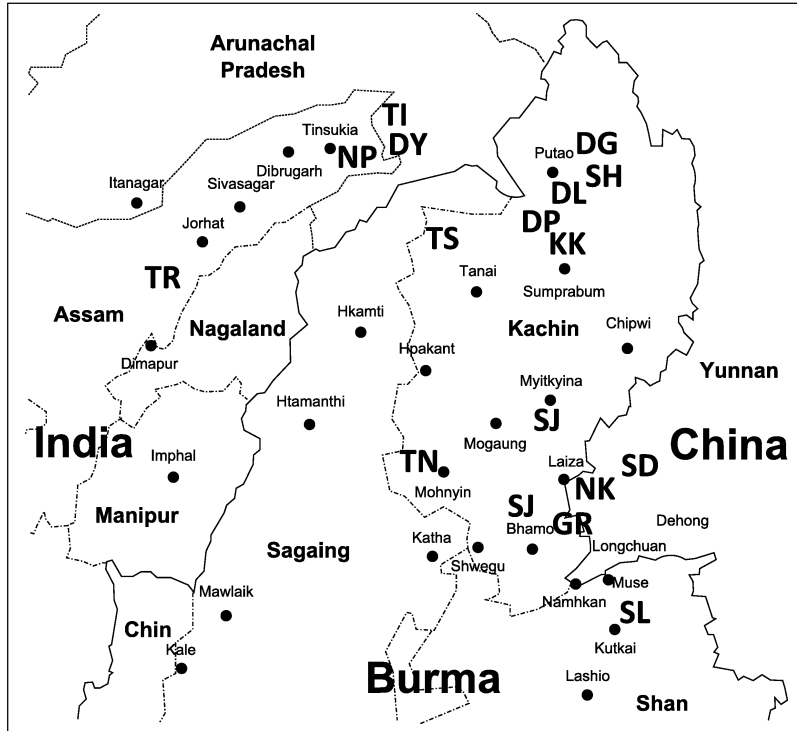


図 1 ジンポー語方言の分布

TR = Turung (India)	KK = Khakhu (Burma)
NP = Numphuk (India)	SJ = Standard Jingpho (Burma)
DY = Diyun (India)	TN = Thingnai (Burma)
TI = Tieng (India)	SL = Sinli (Burma)
TS = Tsasen (India/Burma)	GR = Gauri/Khauri (Burma/China)
DL = Duleng (Burma)	NK = Nkhun/Enkun (China)
SH = Shang (Burma)	SD = Shadan (China)
DG = Dingga (Burma)	JL = Jilí (Burma; extinct)
DP = Dingphan (Burma)	

<sup>1</sup> この名称から標準方言と Sinli 方言が系統的に近い関係にあることが推測されるが、本稿ではこれらを別の方言として扱う。その理由は、両者に重要な相違が観察されるためである。例えば、標準方言では疑問標識 =ʔi が必ず動詞複合の後に現れるのに対し、Sinli 方言ではこの標識が動詞複合の前に現れる。ただし、Sinli 方言の最終的な位置づけは今後の調査に俟たなければならない。

## ジンポー語の資料と文法注釈

筆者はジンポー語には少なくとも3つの方言群が存在すると考える。現代諸方言の共通祖先であるジンポー祖語は、最も初期に南部ジンポー祖語と北部ジンポー祖語に分岐し、続いて、北部ジンポー祖語は東北ジンポー祖語と西北ジンポー祖語に分岐したと推定する。本稿ではこれらをそれぞれ、南部方言群 (SJ、NK、GR)、東北方言群 (DL、SH、DG)、西北方言群 (NP、TR) と呼称する。後二者は地理的・言語的により近い関係にあるものの、相違が激しいことからそれぞれ独立のグループとして扱う。各方言群間では相互理解が困難と見られ、これらは言語学的には方言ではなく別言語と見なすべきかもしれない。上記三分割を支持する証拠には、規則的・不規則的な音韻改新の共有 (特定語彙にのみ観察される祖語の末子音 \*-k の脱落など)、語彙改新の共有 (以下の表)、文法改新の共有 (一致標識の消失など)、意味改新の共有 (\*牙 > 歯など) がある (倉部 2013b、Kurabe 2014)。一例として、以下にジンポー語方言を南部と北部に分断する語彙の例を提示する<sup>2</sup>。

表1 南部方言群と北部方言群の語彙の一例

	‘earthquake’	‘beautiful’	‘make’	‘in’
SJ	nnaɲnòn	tsom	gəlo	ʔè
NK	nnaɲnòn	tsom	kəlo	è
GR	nnaɲnòn	tsom	gəlo	ʔi
DL	dum	çòp	çəco	ʔaŋ
DG	dum	sòp	çəco	ʔaŋ
NP	dum <sup>4</sup> sun <sup>1</sup>	soop <sup>3</sup>	səjoo <sup>1</sup>	aŋ <sup>4</sup>
TR	dum <sup>3</sup> sun <sup>1</sup>	sop <sup>1</sup>	səjoo <sup>1</sup>	aŋ <sup>2</sup>

ジンポー語の危機度は方言により異なる。例えば、標準方言は全世代の話者に使用され、ある程度安定している (safe)。一方で、Shang 方言は両親世代かそれ以上の世代でしか使用されないという (definitely endangered)。また、Jilí 方言は 1800 年代の記録 (Brown 1837:1033) を最後に消滅した (extinct)。標準方言は諸方言の中では最も安定していると考えられるが、van Driem (2001:394) が指摘するように、どの方言であれ、カチン内部の様々な共同体で用いられる、ピジン化し文法的に単純化した共通語としてのジンポー語からの影響は避けられないと考えられる。

ジンポー語の分布域は多言語地域である。基本的に、ビルマのジンポー語話者は少なくともビルマ語との二言語併用、中国のジンポー語話者は少なくとも漢語との二言語併用、インドのジンポー語話者は少なくともアッサム語との二言語併用状態にあると考えられる。標準方言に関しては、特に若年層話者にビルマ語とのコードスイッチングが頻繁に観察される。また、東北インドに分布する Turung 方言は、アッサム語の強い影響下にあるとされる (Morey 2010:8)。

<sup>2</sup> 表中、Nkhum 方言 (NK) の形式は徐他 (1983) からの二次資料であり、また、Turung 方言 (TR)、Numphuk 方言 (NP) の形式はそれぞれ、Morey (2007a)、Morey (2007b) からの二次資料である。なお、Shang 方言 (SH) は共通の音韻改新などの証拠から北部方言群に属すると考えられるが、現時点においては語彙資料が少ないため、表には含めていない。

### 1.4 本稿の表記

本稿におけるジンポー語表記は、以下に示す筆者の分析による音素表記を用いる。ただし、成節鼻音は後続子音と調音点同化を起こすが、本稿ではすべて /n/ と表記することにする。ジンポー語には正書法も存在するが、正書法では声調と声門閉鎖音が表記されないため、本稿の表記には正書法を使用しない<sup>3</sup>。

以下に、筆者の分析によるジンポー語の子音体系を示す<sup>4</sup>。

表2 子音体系

	onset consonants				coda consonants			
voiceless unaspirated stops	p	t	k	ʔ	p	t	k	ʔ
voiceless aspirated stops	ph	th	kh					
voiced stops	b	d	g					
voiceless affricates	ts	c						
voiced affricate	dz	j						
voiceless fricatives	s	ɕ						
nasals	m	n	ŋ		m	n	ŋ	
preglottalized nasals	ʔm	ʔn	ʔŋ					
liquids	r	l						
preglottalized liquids	ʔr	ʔl						
glides	w	y			w	y		
preglottalized glides	ʔw	ʔy						

母音には次表に示す6つの母音がある。母音は基本的に大部分の末子音と自由に結合するが、/ə/は末子音とは決して結合しない。また、末子音 /w/ は /a/ とのみ結合し、末子音 /y/ は /a, o, u/ とのみ結合する。本稿では、正書法で *au*、*ai*、*oi*、*ui* と表記される二重母音をそれぞれ、/aw/、/ay/、/oy/、/uy/ と分析する。その根拠は、これらの連続が閉音節に決して現れないためである。このような音韻解釈を行うことにより、ジンポー語の最大の音節構造を  $C_1C_2VC_3/T$  へと還元することが可能になる (Cは子音、Vは母音、Tは声調を示す)。なお、末子音 /k/ は出現頻度が極めて低いが、これは標準方言においてジンポー祖語の末子音 \*k が ʔ へと音変化したためである。

<sup>3</sup> 正書法は1890年にカチン州に赴任した米国バプティスト派の宣教師 Olaf Hanson により1890年代前半に考案され、ローマ字による文字体系を持つ。これより以前にビルマ文字、シャン文字、カレン文字の組み合わせによるジンポー文字が Josiah Cushing により考案されつつあったがこれは普及しなかった (Crider 1963:368, 371)。

<sup>4</sup> 特に若年層話者は /ts/ を無声無気歯茎摩擦音 [s]、/s/ を無声有気歯茎摩擦音 [s<sup>h</sup>]、/dz/ を有声歯茎摩擦音 [z] で発音する傾向が強い。

## ジンポー語の資料と文法注釈

表3 母音と末子音の結合可能性

	-∅	-p	-t	-k	-ʔ	-m	-n	-ŋ	-w	-y
-a	-a	-ap	-at	-ak	-aʔ	-am	-an	-aŋ	-aw	-ay
-e	-e	-ep	-et	-ek	-eʔ	-em	-en	-eŋ	*-ew	*-ey
-i	-i	-ip	-it	-ik	-iʔ	-im	-in	-iŋ	*-iw	*-iy
-o	-o	-op	-ot	-ok	-oʔ	-om	-on	-oŋ	*-ow	-oy
-u	-u	-up	-ut	-uk	-uʔ	-um	-un	-uŋ	*-uw	-uy
-ə	-ə	*-əp	*-ət	*-ək	*-əʔ	*-əm	*-ən	*-əŋ	*-əw	*-əy

ジンポー語は音節声調を持ち、以下のミニマルペアにより実証されるとおり、開音節において4つの声調が対立し、閉音節において2つの声調が対立する。なお、成節鼻音 /n/ には音声的には高、中、低の3つの声調が実現するが、これらは2つの基底の声調に還元可能である(倉部2013a)。ただし、本稿の表記は音素表記であるため、表層の3つの声調を全て表記する。また、成節鼻音と同様の分析が /ə/ を主母音とする音節に適用可能である可能性があるが、この声調により弁別されるミニマルペアがほとんど存在しないため、本稿ではこの音節に声調を表記しないことにする。

表4 声調と語例

L	/yò/	[yo\]	‘to be worn out’
M	/yo/	[yo-]	‘to float’
H	/yó/	[yō]	‘to plan’
F	/yô/	[yo\]	‘SENTENCE-FINAL PARTICLE’
L	/gàt/	[gat↓]	‘to run’
H	/gát/	[gat̄]	‘market’

## 2 本文

本節では民話資料本文を提示する。本節で提示する民話は、筆者が2009年から2014年にかけて10回に渡り、ビルマに渡航した際に収集した資料のひとつである。本資料は2011年3月にカチン州ミッチーナ市において、Du Kahtawng 地区の男性(当時70代)から対面調査により収集したものである。調査では、まず筆者が話者宅に出向き、面接して民話の録音を行った。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にマイク (audio-technica AT9904) を接続して音声を取り込んだ。録音時のサンプリング周波数は44.1KHz、量子化ビット数は16bitである。続いて、筆者がその資料を書き起こし、翌日、調査協力者の協力を得て、グロスと文法注釈を付した。調査時の主な媒介言語はジンポー語であるが、ビルマ語も補助的に用いた。

資料本文の全体像を先取りする目的で、次に話の概要を先に記しておく。「昔、人間の唾には驚くべき力があつた。それは、唾を吐いて願うと実際にその願いが叶うという力であつた。ただし、唾を吐かないのであれば必ず飲み込まなければならない。そうしなければ唾の力は消え失せてしまう。精霊たちは人間の唾の力を恐れ、その力を失わせることを目論んだ。精霊たちは笛を作り、人間が通る道に置いておいた。人間がその笛を見つけて吹くと大変心地よい音が出た。笛を吹き続けると唾がポタポタ落ち、ついには人間の唾の力はなくなってしまった」。この種の俗信がどの程度通用しているかは不明であるが、筆者が20代の話者にインタビューしたところ、幼少時に森に入る際、精霊が現れないよう唾を吐いたことがあるということであった。

- (1) myì??yen phòy=màt=?ay lam.  
saliva lost=COMPL=NMLZ.NCS way  
「唾の力がなくなったこと」
- (2) yá? ɕoŋ=dè? tsun=lày=wà=say=thè? mərən  
now before=ALL say=PASS=COME=NMLZ.CS=COM same  
jìŋphò?+màwmù? grày ló=?ay.  
Jingpho+story very many=TAM.NCS  
「いま話して来たとおりの、ジンポーの民話はとてもたくさんある。」
- (3) nday=kó? mətɕiŋ=dá rà=?ay ləŋây+mi ɲà=?ay.  
this=LOC remember=RESL need=NMLZ.NCS one+one exist=TAM.NCS  
「この中で覚えておくべきものがひとつある。」
- (4) mòy+ɕoŋ=dè? ɕiŋgyim+məçà=ni ñnan làt=?ay ɕəlóy=gò  
before+before=ALL human+human=PL newly born=NMLZ.NCS when=TOP  
ɕiŋgyim+məçà=ni=?à? ñgùp=kó?=ñná pru=?ay myì??yen  
human+human=PL=GEN mouth=LOC=SEQ come.out=NMLZ.NCS saliva  
grày mau+pha ñgùn roŋ=?ay=dà?  
very wonder+what power contain=TAM.NCS=HS

## ジンポー語の資料と文法注釈

「昔、人間が最初に誕生したとき、人間の口から出る唾には大変驚くべき力があったそうだ。」

- (5) nday myiʔʔyen ŋa=ʔay=gò            dàyní=ná    mà=ni=gò    məʔyen  
 this saliva    say=NMLZ.NCS=TOP today=GEN child=PL=TOP saliva  
 mòy=ná    ji+ʔwoy=ni=gò                            myiʔʔyen=ŋú tsun=ʔay    rê.  
 before=GEN grandfather+grandmother=PL=TOP saliva=QUOT say=NMLZ.NCS COP  
 「この唾というものを今日の子供たちは məʔyen と発音し、昔の祖先たちは myiʔʔyen と発音した。」

- (6) myiʔʔyen+myiŋ ŋú-ŋú    məʔyen+myiŋ ŋú-ŋú    mərən=çà rê.  
 saliva+name    say-REDP saliva+name    say-REDP same=ADV COP  
 「myiʔʔyen と発音しようが、məʔyen と発音しようが同じものだ。」

- (7) dai=ni ʔánthe ce+nà=ʔay.  
 that=PL 1PL    know+hear=TAM.NCS  
 「(どう発音しようが) それらを私達は理解できる。」

- (8) mòy+çəŋ=dèʔ=gò            myiʔʔyen nday grày reŋ=ʔay.  
 before+before=ALL=TOP saliva    this    very fine=TAM.NCS  
 「昔、この唾はとても優れていた。」

- (9) çìŋgyim+məçà=ni=ʔàʔ    ñgùp=kóʔ=ñná    pru=ʔay                            myiʔʔyen.  
 human+human=PL=GEN mouth=LOC=SEQ come.out=NMLZ.NCS saliva  
 「人間の口から出る唾は。」

- (10) myiʔʔyen məthó=dàt=ñná    day byin=ʔùʔgàʔ wórà byin=ʔùʔgàʔ  
 saliva    spit=RELEASE=SEQ that happen=OPT that happen=OPT  
 ŋú=jàŋ gəja=wà    byin=ʔay.  
 say=if good=ADV happen=TAM.NCS  
 「唾を吐いてそれが起これ、あれが起これと言え、本当に起こる。」

- (11) thóra wa thèn+rùn=wà=ʔùʔgàʔ            si=ʔùʔgàʔ ŋú=ñná myiʔʔyen=phéʔ  
 that man broken+demolished=COME=OPT die=OPT    say=SEQ saliva=ACC  
 məthó=dàt=ʔay=thèʔ                            raw    gəja=wà    byin=ʔay=dàʔ.  
 spit=RELEASE=NMLZ.NCS=COM together good=ADV happen=TAM.NCS=HS  
 「あの人が滅びますように、死にますようにと言って唾を吐くと同時に本当に起こったそうだ。」

- (12) ráy tíʔ=mùŋ nday=kóʔ khùm=dá=ʔay                            lam ləŋây+mi ñà=ʔay.  
 COP but=also this=LOC prohibit=RESL=NMLZ.NCS way one+one exist=TAM.NCS  
 「しかしながら、ここには禁じられていることがひとつあった。」

倉部慶太

- (13) ʔə-jàʔ=wà khùm=dá=ʔay lam ləŋây+mi ɲà=ʔay.  
 ADV-hard=ADV prohibit=RESL=NMLZ.NCS way one+one exist=TAM.NCS  
 「固く禁じられていることがひとつあった。」
- (14) ɕiŋgyim+məɕà=ni myiʔʔyen=phéʔ ɲgùp=kóʔ=ɲná ɕiŋgàn=dèʔ  
 human+human=PL saliva=ACC mouth=LOC=SEQ outside=ALL  
 n-ɕə-pru lù=ɲná myiʔʔyen lóʔ=wà=jàŋ  
 NEG-CAUS-come.out get=SEQ saliva many=COME=if  
 məʔút=káu rà=ʔay.  
 swallow=THOROUGHLY need=TAM.NCS  
 「人間が唾を口から外に出せずに唾が多くなってきたら飲み込まなければならない。」
- (15) ɕiŋgàn=dèʔ gəjì=mùŋ n-ɕə-pru may=ʔay.  
 outside=ALL small=also NEG-CAUS-come.out okay=TAM.NCS  
 「外に少しも出してはならない。」
- (16) ɕiŋgyim+məɕà=ni myiʔʔyen=wa ɕiŋgàn=dèʔ  
 human+human=PL saliva=TOP outside=ALL  
 pru=wà=ʔay=kóʔ=ɲná=gò phòy=màt=na rê  
 come.out=COME=NMLZ.NCS=LOC=SEQ=TOP lost=COMPL=NMLZ.IRR COP  
 ɲú=ʔay məsàt+məsa+mədin+məlai ɲà=ʔay=dàʔ.  
 say=NMLZ.NCS mark+COUP+partition+COUP exist=TAM.NCS=HS  
 「人間が唾を外に出したときから (唾の力が) 消えてしまうという禁止事項があったそ  
 うだ。」
- (17) dai ʔətèn=thàʔ ndai nát numsum+nát ɲú=ʔay n-ju+n-daŋ=ʔay  
 that time=LOC this spirit PSN+spirit say=NMLZ.NCS NEG-attack+NEG-choked=NMLZ.NCS  
 nát=ni=gò ɕiŋgyim+məɕà=ni=ʔàʔ myiʔʔyen grày reŋ=ʔay nday=phéʔ  
 spirit=PL=TOP human+human=PL=GEN saliva very fine=NMLZ.NCS this=ACC  
 ce=ʔay.  
 know=TAM.NCS  
 「その時、この精霊、ヌムスムという悪い精霊たちは人間の唾がとても優れていること、  
 これを知っていた。」
- (18) day məjò ɕánthe=gò ɕiŋgyim+məɕà=ni=ʔàʔ myiʔʔyen=phéʔ khrit=ʔay.  
 that because 3PL=TOP human+human=PL=GEN saliva=ACC fear=TAM.NCS  
 「だから、彼らは人間の唾を恐れた。」

- (19) ɕiŋgyim+məɕà=ni=?è ɕánthe=ni=phé? si=?ù?gà? thèn+rùn=?ù?gà? ɲú  
 human+human=PL=NOM 3PL=PL=ACC die=OPT broken+demolished=OPT say  
 myì??yen məthó=dàt=jàŋ gəja=wà si=wà=?ay=phé? khrit=?ay.  
 saliva spit=RELEASE=if good=ADV die=COME=NMLZ.NCS=ACC fear=TAM.NCS  
 「人間が彼らに死にますように、滅びますようにと言って唾を吐くと本当に死んでしまう  
 ことを恐れた。」
- (20) day rê məjò nát=ni pha+bò? gəlo=?ay=?i.  
 that COP because spirit=PL what+kind do=TAM.NCS=Q  
 「それで精霊たちは何をしたか。」
- (21) nday ɕiŋgyim+məɕà=ni=?à? myì??yen=phé? jə-phòy=káw=ya=na  
 this human+human=PL=GEN saliva=ACC CAUS-lost=THOROUGHLY=BEN=NMLZ.IRR  
 mətu n-reŋ=màt=na mətu nday numsum+nát nyàn dò=?ay=dà?  
 for NEG-fine=COMPL=NMLZ.IRR for this PSN+spirit=PL intellect break=TAM.NCS=HS  
 「この人間たちの唾の力をなくしてやるために、劣らせるために、このヌムスムの精霊た  
 ちは知恵を絞ったそうだ。」
- (22) ráy=yaŋ ɕánthe gərə=khu gəlo=?ay=?i ɲa=yaŋ kəwá=thè? gəlo=?ay  
 COP=when 3PL which=along do=TAM.NCS=Q say=when bamboo=COM make=NMLZ.NCS  
 lərûŋ ɲú=?ay dùm=?ay bò? nkaw+mi=gò sumpyi=mùŋ ɲa=?ay  
 flute say=NMLZ.NCS play=NMLZ.NCS kind some+one=TOP flute=also say=TAM.NCS  
 pyithòt=mùŋ ɲa=?ay pyimàn=mùŋ ɲa=?ay pha+mi ráy-ráy  
 flute=also say=TAM.NCS flute=also say=TAM.NCS what+one COP-REDP  
 ñgùp=thè? dùm=?ay bò? nday gəlo=wà=ñná  
 mouth=COM play=NMLZ.NCS kind this make=COME=SEQ  
 ɕánthe yí?+wà+yí?+sa+lám=kó? ɕəná?+ńsín=?è  
 3PL swidden+return+swidden+go+way=LOC night+darkness=LOC  
 sa tòn=dá=ya=?ay=dà?  
 go put=RESL=BEN=NSCM=HS  
 「それで彼らはどうしたかということ、竹で作った lərûŋ という吹くもの、一部の人は  
 sumpyi と呼ぶ、pyithòt と呼ぶ、pyimàn と呼ぶ、何はともあれ口で吹くもの、こ  
 れを作って来て畑へ行く道に夜の暗闇に行っておいてやったそうだ。」
- (23) day ɕəlóy jəphòt ɕəní+ńthóy+?ətèn=thà? ɕiŋgyim+məɕà=ni lam+ńtsa=khu  
 that when morning day+day+time=LOC human+human=PL way+upon=along  
 lày=wà=?ay ɕəlóy day kəwá=thè? gəlo=dá=?ay lərûŋ=phé?  
 pass=COME=NMLZ.NCS when that bamboo=COM make=RELS=NMLZ.NCS flute=ACC  
 mù=mà=?ay=dà?  
 see=PL=TAM.NCS=HS



「その時、朝の時間に、人間たちが道の上を通るとき、その竹で作ってある笛を見つけた  
そうだ。」

(24) mù=yay ǰánthe lǝrûŋ=phé? thà? yu=?ay.

see=when 3PL flute=ACC pick look=TAM.NCS

「見つけると彼らは笛を拾って見た。」

(25) thà? yu=?ay ǰǎloy=gò ǰoŋ=dè? ní-mû=yu rê mǎjò pha+bò?

pick look=NMLZ.NCS when=TOP before=ALL NEG-see=TRY COP because what+kind

gǎlo=dá=?ay=?i nday=phé? lòy mù reŋ=?ay dzòn=gò rê=?è ŋú

make=RELS=TAM.NCS=Q this=ACC a.little see fine=NMLZ.NCS like=TOP COP=SFP say

yu=khray yu ?ǎdzi yu=ǰná ǰǎlaw=yu mǎthì?=yu yu=yu phaŋ+jǎthùm=yay

look=only look gaze look=SEQ turn.over=TRY pinch=TRY look=TRY after+last=when

ŋǰùp=thè? dǎgró?=ǰná gǎwùt=yu=?ay=dà.

mouth=COM put.on=SEQ blow=TRY=TAM.NCS=HS

「拾って見たとき、以前に見たことがなかったので、何が作ってあるのだろう、これは少し見る価値がありそうだと行って、見るだけ見て、見つめ裏返して、摘まんでみて、見てみて、最後には口に入れて吹いてみたそうだ。」

(26) ŋǰùp=thè? dǎgró?=ǰná gǎwùt=yu=?ay.

mouth=COM put.on=SEQ blow=TRY=TAM.NCS

「口に入れて吹いてみた。」

(27) ǰǎloy grǎy pyo=?ay ǰsén pru=wà=?ay=dà?

when very comfortable=NMLZ.NCS sound come.out=COME=TAM.NCS=HS

「するととても心地の良い音が出てきたそうだ。」

(28) day lǝrûŋ=kó?=ǰná.

that flute=LOC=SEQ

「その笛から。」

(29) day=kó?=ǰná ǰiŋgyim+mǎcà day=ni myì??yen myì??yen=thè? lǝrûŋ dùm=?ay

that=LOC=SEQ human+human that=PL saliva saliva=COM flute play=TAM.NCS

ŋú=ǰná myì??yen=phé?=è mǎthó=khray mǎthó gǎwùt=khray gǎwùt=?è

say=SEQ saliva=ACC=SFP spit=only spit blow=only blow=SFP

gǎthè?=kǎw=?ay=kó?=ǰná ǰiŋgyim+mǎcà=ni=?à?

drip=THOROUGHLY=NMLZ.NCS=LOC=SEQ human+human=PL=GEN

myì??yen=gò n-reŋ=màt=say=dà?

saliva=TOP NEG-fine=COMPL=TAM.CS=HS

「それから、その人間たちは唾、唾で笛を吹くと言って、唾を吐くけるだけ吐き、吹けるだけ吹いて、(唾が)ポタポタ落ちてしまってから人間の唾は価値がなくなってしまった

そうだ。」

- (30) gəðè məthó+bùn=tím n-reŋ=màt=say.  
 how.much spit+sprinkle=but NEG-fine=COMPL=TAM.CS  
 「いくら吐き散らしてももう価値がなくなってしまった。」
- (31) ráy tíʔ=mùŋ yáʔ+pràt=ná ráam+mà=ni nday lam=thèʔ seŋ=nná  
 COP but=also now+period=GEN youth+child=PL this way=COM related=SEQ  
 mətɕiŋ rà=ʔay lam ləŋây+mi=gò ɲà=ʔay.  
 remember need=NMLZ.NCS way one+one=TOP exist=TAM.NCS  
 「ただし、現代の若者たちはこの話に関して覚えておかなければならないことがひとつある。」
- (32) mòy=ná jìŋphòʔ=ni náat+jòʔ+pràt=ná jìŋphòʔ=ni  
 before=GEN Jingpho=PL spirit+give+period=GEN Jingpho=PL  
 məçà ləŋây+mi=phéʔ myìʔʔyen məthó=khray məthó+bùn=ʔay=gò  
 man one+one=ACC saliva spit=only spit+sprinkle=NMLZ.NCS=TOP  
 məçà ləŋây+mi yùk=mərùʔ=ʔùʔgàʔ ɲú=ʔay=khu rê.  
 man one+one lose.luck=?=OPT say=NMLZ.NCS=along COP  
 「昔のジンポー人、精霊信仰をしていた時代のジンポー人たちにとっては、人に唾を吐けるだけ吐き散らすのは人に不幸になれと言っているようなものだった。」
- (33) grày çə-reŋ=màʔ=ʔay.  
 very CAUS-fine=PL=TAM.NCS  
 「唾をととても大切にしていた。」
- (34) məjoy+mi məçà=phéʔ cíʔ=ʔàʔ çìŋdùʔ=dèʔ=nná tsan=ʔay=kóʔ=nná  
 no.purpose+one man=ACC 3SG.GEN=GEN behind=ALL=SEQ far=NMLZ.NCS=LOC=SEQ  
 ráy-ráy ʔəmyiŋ gaŋ=nná myìʔʔyen n-may məthó=ʔay.  
 COP-REDP name pull=SEQ saliva NEG-okay spit=TAM.NCS  
 「むやみに人に彼の背後から遠いところからであれ、名前を挙げて唾を吐いてはならない。」
- (35) məçà ləŋây+mi=phéʔ myiŋ gaŋ mətɕa=lèt myìʔʔyen məthó+bùn=jàŋ  
 man one+one=ACC name pull curse=while saliva spit+sprinkle=if  
 məthó+bùn=khom=ʔay wa çəwáʔ=çá  
 spit+sprinkle=MOVE=NMLZ.NCS man impose.fine=EMPH  
 mənàməkà gùmçèm may=ʔay.  
 extremely severe okay=TAM.NCS  
 「人ひとりを名前を挙げて呪いながら唾を吐くと、唾を吐いて回った人には大変重い罰金を課してよい。」

- (36) day rê məjò møy=ná=ni=gò myì??yen=phé grày ɕə-reŋ=màʔ=?ay.  
 that COP because before=GEN=PL=TOP saliva=ACC very CAUS-fine=PL=TAM.NCS  
 「そのために昔の人たちは唾をととても大切にした。」

### 3 文法注釈

本節では本文に対する文法注釈を提示する。以下の番号は本文に付した番号と対応している。

1. phòy は「力、運、栄光、名誉、味などが失われる」という意味を表す動詞である。以下のよ  
 うな例がある (Hanson 1906:548)。

- (37) màndan phòy=say.

charm lost=TAM.CS

「呪文の力が失われた。」

- (38) ɕíʔ=?àʔ ?əroŋ phòy=màt=say.

3SG.GEN glory lost=COMPL=TAM.CS

「彼の名誉が損なわれてしまった。」

- (39) sì phòy=màt=say.

fruit lost=COMPL=TAM.CS

「果物がおいしくなくなった。」

完了を表す助動詞 =màt は動詞 màt 「無くなる」の文法化により発展した形式である。ジン  
 ポー語にはこの種の文法化した動詞が非常に多いが、それらの詳細は倉部 (2010) を参照。

=ʔay は非変化相 (non-change-of-state; NCS) の名詞節を形成する標識である。名詞節を形成  
 する標識には他に、=say と =na がある。=say は変化相 (change-of-state; CS) の名詞節を形成す  
 る標識であり、=ʔay と対立しながら相体系を構成する (3 節 29 も参照)。一方、=na は非現実  
 (Irrealis; IRR) のモダリティを持つ名詞節を形成する標識である (3 節 16 を参照)。これら名詞  
 節は本文の例のように主要部名詞を修飾するという関係節的機能も果たし、ジンポー語の関係  
 節は名詞節の一種であると分析することが可能である。関係節と名詞節が同一標識により形成  
 される現象は他のチベット・ビルマ系言語に広く観察される現象として知られている (Matisoff  
 1972)。

ジンポー語の民話のタイトルは lam 「道、こと」を主要部とした名詞節または名詞句である場  
 合が多い。例えば、ジンポー語の民話集である *Kachin Reader 1* (Hanson Memorial Press) は全  
 38 話中 34 話のタイトルがそうであるし、*Kachin Reader 2* (Hanson Memorial Press) では収録  
 された 40 話全てのタイトルがそうになっている。

2. 格標識 =dèʔ は着点を標示する向格であるが、この文のように場所・時間を標示することが

## ジンポー語の資料と文法注釈

ある。この種の =dè? は「前、後」などの意味を表す場所名詞や「朝、夜」などの意味を表す時間名詞に付加される場合が多い(倉部 2012b)。類例は、#4、#25 に見られる。=dè? が着点を標示する本文中の例には、#14、#15、#16 がある。

=lày=wà=say は分析的には「=過ぎる=帰る=NMLZ.CS」であるが、全体で「ずっと～してきた」という時間的継続を表す。=lày は本来「過ぎる」を意味する動詞であるが、意味の抽象化が見られるため本稿では助動詞として扱い、グロスをスモールキャピタルにしておく。助動詞 =wà は単独では「帰る」を意味する動詞であるが、本動詞と共に用いられると「～てくる」という移動方向を表す。

TAM 標識 =?ay は非変化相の平叙文を形成する標識であり、変化相を示す TAM 標識 =say と対立しながら相体系を構成する。変化相は、開始点であれ終結点であれ、事態・状況が新しい局面に変化したことを現在のこととして述べる場合に用いられ、これ以外の事態・状況は非変化相の =?ay により表示される。この形式は名詞節化標識 =?ay と同形であり、これらは同源語であると考えられる。ただし、これらは機能が異なるため、本稿では別のグロスを付しておく。形式が同一であることを根拠としてこの言語の平叙文を名詞節と分析できる可能性がある。

3. =kó? は場所を標示する位格標識である。この形式が現れる例には、#4、#9、#12、#14、#16、#28、#29、#34 がある。位格標識には他に =thà? や =?è という形式もある。=thà? は基本的に時間を標示する形式である(倉部 2012b)。本文中に見られる =thà? の例として、#23、#17 がある。=?è の文法的特徴は現時点では不明であるが、母語話者によるとこの形式は文語で用いられる形式であるという。この形式と他の形式はスタイルにしたがって使い分けられるものと考えられる。

=dá は単独で「置く」を意味する動詞であるが、本動詞と共に用いられると結果相を示す助動詞として機能する。

rà は「必要だ」という意味を表す動詞であるが、他の動詞とともに用いられる場合には義務のモダリティを表す。この形式が動詞であり助動詞でないことはこの動詞に直接、否定辞 í- を付加することができることにより分かる。例えば、本文の mətɕiŋ=dá rà (remember=RESL need) 「覚えておくべき」は mətɕiŋ=dá í-râ というように否定することができる。

4. mòy+çoŋ (before+before) は類義語から構成される並列複合名詞である。特に文語ではこの種の類義語や反義語から成る並列複合語が多く出現し、この種の複合語はジンポー語文法において無視できない地位を占めている。並列複合語の配列順序はある程度予測可能である。配列順序には次の3つの法則が関与している(倉部 2011)。

- 法則 1：各構成要素の音節数が同一で、かつ、構成要素間で母音の広さが異なる場合、相対的に狭い母音を含む要素は、相対的に広い母音を含む要素に先行する。
- 法則 2：各構成要素の音節数が異なる場合、短い要素は長い要素に先行する。
- 法則 3：構成要素が固有語と借用語からなる場合、固有語は借用語に先行する。

これらのうち、法則 3 のランキングが最も高く、次に法則 1 と法則 2 が働く。例えば、*gənù+gəwà* (mother+father) 「両親」では女性が男性に先行するのに対し、*gəji+gəwoy* (grandfather+grandmother) 「祖父母」では男性が女性に先行しているが、この配列には法則 1 が関与していると考えられる。同様に、*gəphù+gənw* (elder.bro+younger.bro) 「兄弟」では年上が年下に先行するのに対し、*gəçù+gəçà* (grandchild+child) 「子孫」では年下が年上に先行するが、この配列にも法則 1 が関与している。一方、*mà+gəçà* (child-child) 「子供達」、*tsáʔ+cəru* (rice.wine+liquor) 「酒等」、*phún+kəwá* (tree+bamboo) 「木々」、*jum+məjəp* (salt+red.pepper) 「香辛料」、*dùt+məri* (sell+buy) 「売り買いする」などの例に観察される配列には法則 2 が関与している。このように、並列複合語の配列には意味的要因ではなく語種や音韻などの要因が関与的である。

ただし、上記の法則から本文中の *mòy+çəŋ* の順序を予測することはできない。この種の各構成要素の音節数が同一で、かつ、構成要素間で母音の広さが同一の場合、構成要素がどのように決定されるかに関しては現時点では不明である。本文中の並列複合語は他に、#5、#11、#16、#22、#23、#25 などに見られる。

*çəlóy* は単独で「その時」という意味を表すが (#27 を参照)、名詞 (関係) 節に修飾されると時を表す副詞節を形成する。

ジンポー語には *=ná* と *=ʔàʔ* の二種の属格標識がある。属格 *=ná* は基本的に場所・時間に付加される (#5、#31、#32、#36)。一方、属格 *=ʔàʔ* はそれ以外の名詞に付加される (#9、#17、#18、#21、#29、#34)。ただし、若年層話者は先行名詞に関わらず専ら *=ná* を用いる傾向にある。また、東北インドに分布する方言である *Turung* や *Numphuk* のように、属格標識として *=ná* のみを持つ方言も観察される。

起点は基本的に位格に継起を表す形式 *=inə* を付加することによって標示される (類例として、#9、#14、#16、#28、#29、#34 がある)。*inə* は *ná* と同発音され、属格標識 *=ná* も同源語であると考えられる。*=inə* は動詞にも付加することができ、この種の例は本文中 #10、#11、#14、#22、#25、#26、#29、#31、#34 に見られる。

*pha* は単独で「何」を意味する疑問語であるが、本文の例のように動詞と複合して動詞を名詞化する機能も果たす。

5. 「唾」を意味する語は *myiʔʔyen* または *məʔyen* と発音され、*myiʔʔyen* が古形であるという。ジンポー語は後者の形式のような弱強格 (iamb) を好む言語であり、二音節語基礎語彙の 83% はこの構造を持つ (倉部 2012a)。このため特に口語において二音節強強格の語が二音節弱強格で発音される例が散見される。例えば、*ginsùp* → *gəsùp* 「遊ぶ」、*çingrùp* → *çəgrùp* 「囲む」、*mìwà* → *məwà* 「漢族」、*gùpcóp* → *gəcóp* 「帽子」などの例がある。このような交替を示す語彙の中には、本来は強強格の構造を持っていたものが大部分の話者では専ら弱強格でのみ発音される語もある。例えば、*çinyên* 「カメレオン」、*sìnlù* 「水蒸気」、*sùmmyít* 「針」などの語は、大部分の話者にはそれぞれ *çənyên*、*səlu*、*səmyít* と発音され、強強格の形式は一部の高齢層の話者にしか知られていない。本稿で言及のある「唾」もこのような例の一種であると考えられる。なお、

「唾」の弱強格形 (məʔyen) の第一音節では本来の形式 (myiʔʔyen) の介子音 -y- が脱落しているが (\*myəʔyen)、これはジンポー語では母音 ə が子音結合を頭子音に取ることができないという制約があるためである (倉部 2012a)。

引用節を形成する =ŋú は動詞 ŋú 「言う」が文法化して発展した形式である。本文中、ŋú が動詞として用いられる例には、#6、#10、#11、#16、#17、#19、#22、#25、#29、#32 などがある。これに対して引用節を形成する =ŋú が動詞としての性質を失っていることはこの形式に否定辞を付加することができないことから示唆される。

6. 動詞の重複は「～しようが」という意味の副詞節を形成する。本文中の ŋú-ŋú (言う-REDP) は「～と言おうが」という意味を表す。本文中の他の重複の例としては #22、#34 がある。

=çà は動詞から副詞を派生する形式である。

7. 複合動詞 ce+nà (know+hear) は全体で「理解する」という意味を表す。

8. 本文中のこの文では指示代名詞 nday (this) が主要部名詞の後に現れているが、指示代名詞は主要部名詞の前後どちらに現れることも可能である。例えば、#8 と #29 では指示代名詞が主要部名詞の後に現れるのに対し、#5、#17、#21、#31 では指示代名詞が主要部名詞の前に現れている。指示代名詞の位置によりどのような違いがあるかは現時点では不明である。

10. 希求法を形成する形式には =ʔùʔgàʔ がある。希求文にはいくつかの制約が観察される。まず、この文の主語が人称代名詞である場合、2 人称または 3 人称でなければ容認度が下がる。また、希求文の述語動詞は無意志動詞でなければならず、意志動詞は lù 「できる」により無意志化した後でないと希求文の述語動詞として用いることができない。

=wà は動詞から副詞を派生する形式である。本文中 gəja=wà (good=ADV) は全体で「本当に」という意味を表す。

11. 共格標識 =thèʔ と副詞 raw (together) の組み合わせは「～するやいなや」という意味の副詞節を形成する。

12. ráy tíʔ=mùŋ (COP but=also) は全体で「しかし」という意味を表す。「しかし」という意味を表す場合、コピュラ動詞 ráy は必須ではないが現れることが多い。tíʔ=mùŋ は tím と短縮されて発音されることも多い。例えば、#30 の例では短縮形が現れている。

13. ʔə- は動詞から副詞を派生する接頭辞である。本文の例のようにこの接頭辞は副詞を派生する別の形式である =wà とセットで用いられることがあるが、=wà は必須ではない。接頭辞 ʔə- による動詞からの副詞派生の例として他に以下のような例がある (ʔə- が付加されると語幹の L は F へと変調する): tsòm 「美しい」 → ʔə-tsòm 「よく」、ŋùy 「穏やかな」 → ʔə-ŋùy 「穏や

かに]、sàn「綺麗な」→ʔə-sân「綺麗に」、ɕim「静かな」→ʔə-ɕim「静かに」、gəjòŋ「驚く」→ʔə-gəjòŋ「突然」。最後の例のように接頭辞 ʔə- は二音節語にも付加可能であるが、mərèn「同様だ」→ʔə-mərèn、gəja「よい」→ʔə-gəja のように二音節語に付加すると容認度が下がることがある。どのような場合に容認されるかに関しては現時点では不明である。

14. =phéʔ は対格標識である。目的語の標示には対格と絶対格の交替が認められる。対格の機能には主語と目的語を差異化する機能、および、目的語を明示化する機能の二種の機能が認められる。差異化や明示化が必要でない場合、基本的に目的語は絶対格で現れる(倉部 2012b)。

否定辞は [ní] と [n] の二種の異形態を持ち、これらは相補分布を成す。異形態 [ní] は L または H を持つ語幹に付加される場合に出現し、異形態 [n] は M を持つ語幹に付加される場合に出現する。また、否定辞が付加されると L を持つ語幹は F へと変調する。なお、この変調が起こる範囲は後続音節までである (e.g., ní-dĩnsà → [ní-dĩnsà]「古い」cf. \*[ní-dĩnsà]). また、否定辞が F を持つ語幹に付加される例は観察されないが、これはそもそも F で始まる動詞が存在しないためである。

- ní-lù → [ní-lù]「得ない」
- ní-lá → [ní-lá]「取らない」
- ní-sa → [n-sa]「行かない」

本稿では否定辞の基底形として ní- を立てる。その根拠は、この異形態の分布が相対的に広いこと、および、語幹の L の F への変調を自然に説明することができることによる。逆に、基底形 n- を立てるならば、L と H の直前という 2 つの環境において否定辞の M が H に変調するという規則を立てねばならず非経済的である。また、後者の分析により想定される M → [H]/\_\_L という変調は音声的にも自然ではない。なお、本稿の表記は音素表記であるため、本稿では変調後の形式を表記している。

使役動詞を派生する接頭辞には、jə- と ɕə- の二種の異形態がある。これら異形態は相補分布を成し、前者は頭子音に s または ɕ または有気閉鎖音を持つ語幹に付加され、後者はそれ以外の頭子音を持つ語幹に付加される。例として以下の表を参照されたい。

ジンポー語の資料と文法注釈

Stem	Meaning	jə-	ɕə-
thóy	‘bright’	jə-thóy	*ɕə-thóy
sù	‘wake’	jə-sù	*ɕə-sù
ɕút	‘mistake’	jə-ɕút	*ɕə-ɕút
tay	‘become’	*jə-tay	ɕə-tay
dìk	‘satisfied’	*jə-dìk	ɕə-dìk
tsom	‘beautiful’	*jə-tsom	ɕə-tsom
dzim	‘calm’	*jə-dzim	ɕə-dzim
nà	‘hear’	*jə-nà	ɕə-nà
lóʔ	‘many’	*jə-lóʔ	ɕə-lóʔ
rùn	‘demolished’	*jə-rùn	ɕə-rùn
ʔyúp	‘sleep’	*jə-ʔyúp	ɕə-ʔyúp

本稿では、より分布の広い ɕə- を基底形に立てる。使役接頭辞 ɕə- の分布において s および ɕ が有気閉鎖音と同一の類を成すことを根拠として、ジンポー語において s および ɕ が音韻論的には有気音であると分析しうる。実際に、s は音声的にも [s<sup>h</sup>] と発音される。また、ジンポー語の子音体系では c の有気音がギャップになっている。この事実は、ɕ が音韻論的には c の有気音であることを示唆する。ただし、本稿では音声実現を重視し、ɕ を用いて表記する。以上の分析を取るならば、ジンポー語の阻害音体系は以下のようなになる。

	onset consonants	coda consonants
voiceless unaspirated stops	p t k ʔ	p t k ʔ
voiceless aspirated stops	ph th kh	
voiced stops	b d g	
voiceless unaspirated fricative/affricate	s c	
voiceless aspirated fricative/affricate	sh ch	
voiced fricative/affricate	z j	

以上のように音韻分析を行うならば、使役接頭辞 ɕə- が s、ɕ、有気閉鎖音と同一語内に同居しないことは、基底表示において同じ弁別的素性が連続することを禁じる必異原理 (Obligatory Contour Principle) によりブロックされているためであると考えうる。

lù は「得る」という意味を表す動詞であるが、他の動詞の直前または直後に現れると可能の意味を表す。本稿ではこの形式を助動詞とはせず、動詞と見なしている。その根拠は、この形式の直前に否定辞を付加することが可能であるためである。例えば、本文の n-ɕə-pru lù (NEG-CAUS-come.out get) 「出すことができない」は ɕə-pru í-lù と言い換えることも可能である。



15. *may* は「よい」という意味を表す動詞であるが、他の動詞の直前または直後に現れると許可のモダリティを表す。本稿ではこの形式を助動詞とはせず、動詞と見なしている。その根拠は、この形式の直前に否定辞を付加することが可能であるためである。例えば、本文の *n-ɕə-pru may* (NEG-CAUS-come.out okay) は *ɕə-pru n-may* と言い換えることも可能である。

16. 本文中の *məsət+məsa+mədìn+məlai* (mark+COUP+partition+COUP) という例は2つの並列複合語 (*məsət+məsa* と *mədìn+məlai*) から構成される複合語である。この例のように、ジンポー語の並列複合語には無意味要素を含む例が多々観察される。本稿ではこの無意味要素に COUP というグロスを付している。無意味要素と有意味要素は形式的に類似している場合が多いが、これらは語彙的に指定されており、無意味要素の形式を有意味要素の形式から完全に予測することは不可能である。なお、無意味要素は並列複合語の前部要素にも後部要素にもなりうる。有意味要素と無意味要素の順序は3節4. に示した法則に従っている。本文中の例以外の例として、*nàmlo+nàmlàp* (COUP+leaf) 「葉」、*nìŋbo+nìŋla* (leader+COUP) 「指導者」などの例がある(更なる例は、倉部 2011 を参照)。

=*na* は非現実 (Irrealis; IRR) のモダリティを持つ名詞節を形成する標識である。類例は #21 に見られる。

17. 本文中の *n-ju* (NEG-attack) は語彙化しており、これ全体で「凶暴な」という意味を表す。また、*n-daŋ* (NEG-choked) も語彙化しており、これ全体で「出産時に母子ともに死ぬ」という意味を表す。カチン文化では人間の死に方は詳細に分類され、死に方にしたがって様々な呼び名が与えられている。上記のような死に方は *n-daŋ+si* (NEG-choked+die) と呼ばれ、最も不幸な死に方であると考えられている。この死に方をした女性は精霊 (*nát*) になるとされ、その精霊は *n-daŋ+nát* と呼称される (Hanson 1906:485, Gilhodes 1922:62–5, 181–5, 273)。

20. 複合語 *pha+bò?* (what+kind) は全体で「何」を表す。「何」という意味は *pha* 単独でも表しうるが、*bò?* と合わせて用いられることも多い。

ジンポー語の疑問文は動詞複合に =*?i* または =*ráy* を付加して形成される。前者は真偽疑問文を形成し、後者は疑問語疑問文を形成する形式である。以下のミニマルペアを参照されたい。

(40) *ɕàt ɕá=?ay=?i/\*=ráy.*

rice eat=TAM.NCS=Q/=Q

「ご飯を食べましたか。」

(41) *pha ɕá=?ay=ráy/\*=?i.*

what eat=TAM.NCS=Q/=Q

「何を食べましたか。」

ところが、本文中の例では =ʔi が疑問語疑問文を形成しているように見える。実は、心内の思考 (#25 を参照) や ɲa=yaŋ (say=when) 「～という」という形式からなる引用節中 (#22 も参照) では、疑問語疑問文は =ráy ではなく =ʔi により形成される。本文中のこの例は心内の思考ではない。以上から、本文の例は ɲa=yaŋ 「～という」という形式が省略された文であると考えられる。

21. 受益・受害の意味を表す助動詞 =ya は動詞 ya 「与える」に由来する。

nyàn dòʔ は直訳では「知恵を折る」であるが、全体で「知恵を絞る」という意味を表す。nyàn はパーリ語起源の語であるがジンポー語へはビルマ語を経由して借用されたと考えられる。

22. nkaw+mi (some+one) は全体で「いくつか、いく人か」を表す。

yíʔ+wà+yíʔ+sa+lám (swidden+come+swidden+go+way) は [[[yíʔ+wà]+[yíʔ+sa]]+lám] という構造を持つ複合名詞である。この複合語の lám を除いた部分は並列複合語であるが、この種の同一要素を含む 4 つの部分からなる並列複合語はジンポー語において多数観察される。例えば、jòʔ+lùʔ+jòʔ+çá (give+drink+give+eat) 「ご馳走する」などの例がある (更なる例は倉部 2011 を参照されたい)。

23. =màʔ は主語が複数の場合に用いられる形式である。ただし、これが義務的ではないことは #24 の例などから分かる。#24 では主語が複数であるにも関わらず、=màʔ が現れていない。

25. 助動詞 =yu は動詞 yu 「見る」に由来し、「～したことがある、～してみる」などの経験・試行の意味を表す。この形式は、本文中、ń-mû=yu (NEG-see=TRY) 「見たことがない」では経験の意味を表すのに対して、çəlaw=yu (turn.over=TRY) 「裏返してみる」、məthiʔ=yu (pinch=TRY) 「摘まんでみる」、yu=yu (look=TRY) 「見てみる」、gəwùt=yu (blow=TRY) 「拭いてみる」では試行の意味を表している。なお、若年層話者では =yu は試行の意味を表すのに用い、経験は =ga という別形式を用いて表すことが多い。

dzòn は「ように」を意味する格名詞 (case noun) である。格名詞は節の主要部たる述語に対する従属部名詞の関係を標示する機能を持ち、格標示形式の一種であるといえるが、格助詞とは異なり、格名詞は助詞の性質のみならず名詞の性質をも併せ持つ。具体的には、格名詞は単独で文を成さない点で助詞と共通するが、属格標示の従属部名詞によって修飾される点では名詞と共通する。この後者の性質を重視し、本稿では格名詞を名詞の一種であると見なす。

29. =say は変化相の平叙文を形成する標識である。この標識は、開始点であれ終結点であれ、事態・状況が新しい局面に変化したことを現在のこととして述べる場合に用いられる。吉田 (2011) などの文献ではこの標識を「過去」を表す標識と記述しているが、以下の例に示すとおり、この標識は時制が過去・現在・未来のいずれかに関わらず用いられることから、この標識は時制を表すものではないと考えられる。

(42) khàʔ ɕín=say.

water bathe=TAM.CS

「もう水浴びをした。」

(43) wà=say=yô.

return=TAM.CS=SFP

「もう帰りますね。」

(44) phótní ɕəta+man ləkhôŋ ráy=say.

tomorrow month+face two COP=TAM.CS

「明日はもう 2 月になる。」

この標識と同形の標識に変化相の名詞節を形成する =say がある。これらは同源語であると考えられるが、機能が異なるため、本稿では別のグロスを付している。

30. 疑問語 gəðè 「いくら」は逆接の副詞節を形成する tím とともに用いられると不定の意味を表す。tím は tíʔ=mùŋ (but=also) の短縮形である (3 節 12. を参照)。

32. nát+jòʔ+prət (spirit+give+period) 「精霊を信仰していた時代」は [[nát+jòʔ]+prət] という構造を持つ複合名詞である。nát jòʔ は全体で「精霊を信仰する」という意味を表す。

34. ɕíʔ (3SG.GEN) は 3 人称単数の属格形である。人称代名詞単数形は独自の属格形を持ち、主要部名詞に対する所有関係を標示することができる。一方、双数形と複数形は独自の属格形を持たず、所有関係は属格標識を用いて表される。人称代名詞のパラダイムを次表に掲げる。

	SG		DU		PL
	NOM	GEN			
1st	ŋay	nyéʔ	ʔán	ʔánthe	
2nd	naŋ	náʔ	nán	nánthe	
3rd	ɕi	ɕíʔ	ɕán	ɕánthe	

人称代名詞属格形は全て声門閉鎖音で閉じられており、歴史的には人称代名詞単数主格形と属格標識 =ʔàʔ の縮約から生じた可能性が高い。ただし、本文中に見られるように人称代名詞単数主格形と属格標識 =ʔàʔ は共起しうる。この場合、属格標識は必須ではない。

なお、人称代名詞複数形は双数形に the 「全て」を付加した形式である点に注意されたい。双数形の方が複数形よりも形態的に単純であることは双数形の形式が本来の複数形であり、後に新しい複数形の形式が成立するに伴い、本来の複数形が双数形へと特化したことを示唆するものと解釈しうる。

35. myinj gay (name pull) は全体で「名前を挙げる」という意味を表す。

助動詞 =khom は「～して回る」という意味を表し、動詞 khom 「歩く」に由来する。

記号・略号

1	First person	GEN	Genitive
2	Second person	H	High-level tone
3	Third person	HS	Hearsay
*	Ungrammatical/Ill-formed	IRR	Irrealis
-	Affix boundary	L	Low-falling tone
=	Clitic boundary	LOC	Locative
+	Compound boundary	M	Mid-level tone
/ /	Phonemic representation	NCS	Non-change-of-state
[ ]	Phonetic representation	NEG	Negative
ACC	Accusative	NMLZ	Nominalizer
ADV	Adverbializer	NOM	Nominative
ALL	Allative	OPT	Optative
BEN	Benefactive	PL	Plural
CAUS	Causative	PSN	Person name
COM	Comitative	Q	Question particle
COMPL	Completive	QUOT	Quotation
COP	Copula	REDP	Relative clause
COUP	Couplet	RESL	Resultative
CS	Change-of-state	SEQ	Sequential
DU	Dual	SFP	Sentence-final particle
EMPH	Emphatic	SG	Singular
F	High-falling tone	TAM	Tense-aspect-mood
GEN	Genitive	TOP	Topic

参考文献

Bradley, David. (1996) Kachin. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler, Darrell T. Tryon eds., *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and the Americas* vol. 2.1. 749–51. Berlin: Mouton de Gruyter.

Brown, Nathan. (1837) Comparison of Indo-Chinese languages. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 6: 1023–38.

- Crider, Donald M. (1963) The work among Kachins — including Lisus and Nagas. In Genevieve Soward and Erville Soward eds., *Burma Baptist Chronicle BOOK II*. 367–82. Rangoon: Burma Baptist Convention.
- Driem, George van. (2001) *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*. Leiden: Brill.
- Gilhodes, Charles. (1922) *The Kachins: Religion and Customs*. Calcutta: Catholic Orphan Press.
- Hanson, Olaf. (1896) *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Hanson, Olaf. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 倉部慶太 (2010) 「ジンポー語における動詞連続の文法化」『地球研言語記述論集』2: 15–37.
- 倉部慶太 (2011) 「ジンポー語における対句表現」『地球研言語記述論集』3: 37–57.
- 倉部慶太 (2012a) 「ジンポー語文法概要および民話資料 —兄弟が湖を動かした話—」『地球研言語記述論集』4: 61–100.
- 倉部慶太 (2012b) 「ジンポー語の格標示」『京都大学言語学研究』31: 133–80.
- 倉部慶太 (2013a) 「ジンポー語における成節鼻音の声調について」『日本言語学会第 146 回大会予稿集』336–41.
- 倉部慶太 (2013b) 「ジンポー語方言のサブグルーピングに向けて」『日本言語学会第 147 回大会予稿集』368–73.
- Kurabe, Keita (2014) On the genetic position of Jilí within the Jingpho dialects. Paper presented at the 8th International Conference of the North East Indian Linguistics Society, Don Bosco Institute, Guwahati, Assam, India.
- 劉路編 (1984) 『景頗族語言簡志・景頗語』北京: 民族出版社.
- Matisoff, James A. (1972) Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In John Kimball ed., *Syntax and Semantics 1*. 237–57. New York: Seminar Press.
- Matisoff, James A. ed. (1996) *Languages and Dialects of Tibeto-Burman*. STEDT Monograph Series #2. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Morey, Stephen. (2007a) Turung – English dictionary. ms.
- Morey, Stephen. (2007b) Draft dictionary, Singpho (Numhpuk Hkawng) – English. ms.
- Morey, Stephen. (2010) *Turung: A Variety of Singpho Language Spoken in Assam*. Canberra: Pacific Linguistics.
- 西田龍雄 (1960) 「カチン語の研究—バモ方言の記述ならびに比較言語学的考察」『言語研究』38: 1–32.
- 徐悉艱・肖家成・岳相昆・戴慶厦編 (1983) 『景漢辞典』昆明: 雲南民族出版社.
- 吉田敏浩 (2011) 「カチン世界」伊東利勝編『ミャンマー 概説』475–538. 東京: めこん.

きかいしまおのつ  
奄美喜界島小野津方言の談話資料\*

白田 理人

京都大学／日本学術振興会

## 1 はじめに

奄美喜界島方言(以下喜界島方言)は、鹿児島県大島郡喜界町(次頁地図参照<sup>1</sup>)で話されている、琉球諸語に属する方言である。琉球諸語が話される他の地域と同様、日本語へのシフトが進行しており、喜界島方言の話者はそのほとんどが日本語とのバイリンガルである。伝統的な方言は若い世代には継承されておらず、流暢な話者は主に50代以上に限られる。2013年7月31日現在の人口は町全体で7805人(小野津集落382人)である<sup>2</sup>が、年代別の人口からおよそ半分以上が流暢な話者であると考えられる。喜界島には30余の集落があり、語彙面・音韻面・形態面に渡って集落差が見られる。特に、本発表が対象とする小野津集落(方言名 *unucu* [únùtsú])を含む島内北部の諸方言は、\*ki>tci や\*kjV>tçV(及び\*#kjV>#sV)といった\*kの歯擦音化の音変化が起きていない点<sup>3</sup>(岩倉1934, 平山ほか1966, 大野2003, 木部2011参照)、前舌母音とこれに先行する(頭子音としての)子音+jの連続(CjV<sub>[+front]</sub>)が許され、jを伴わない場合(CV<sub>[+front]</sub>)と区別される点<sup>4,5</sup>などの保持的特徴により、中南部の諸方言と区別される。以下、2節で本稿で用いる表記について述べ、3節で談話資料を示す。

## 2 本稿で用いる表記

次頁に小野津方言の音素目録と本稿で便宜的に用いる表記を示す。[]内は異音である。説明の便宜のため、音節構造も併せて示す。

以下補足的な説明を加える。無声閉鎖音には有気音(非喉頭化音)と無気音(喉頭化音)の対立が認められる<sup>6</sup>が、語幹初頭を除いては中和し、無気音が現れる。音節末子音C<sub>3</sub>には、後

\* 本研究は、平成24~26年度JSPS科研費24・6463「喜界島方言を中心とする琉球語の記述的・歴史的研究」の助成を一部受けたものである。

<sup>1</sup> 本稿では、国土地理院発行の地図データをもとにThomas Pellard氏が作成した地図を適宜加筆・編集して用いている。

<sup>2</sup> 喜界町役場発行の資料に基づく。

<sup>3</sup> 以下に発表者の調査に基づく小野津方言と上嘉鉄方言(喜界島南部)の対応語例を小野津/上嘉鉄の順で挙げる:[k<sup>ʔ</sup>iN]/[tçiN]“着物”, [k<sup>ʔ</sup>iimu]/[tçimu]“肝”, [k<sup>h</sup>jurasu]/[surasa]“美しい”, [k<sup>h</sup>aku]/[saku]“客”, “[k<sup>h</sup>ak<sup>ʔ</sup>a:ru:]/[k<sup>h</sup>atçamu:]書きながら”。

<sup>4</sup> Ex. *ami* [ʔam<sup>ʔ</sup>i]“雨”, *amji* [ʔam<sup>ʔ</sup>i]“網”, *amee* [ʔam<sup>ʔ</sup>e:]“雨は”, *amjee* [ʔam<sup>ʔ</sup>e:]“網は”(Cf. 上嘉鉄:*ami* [ʔam<sup>ʔ</sup>i]“雨、網”, *amee* [ʔam<sup>ʔ</sup>e:]“雨は、網は”)

<sup>5</sup> これは、先行研究の多く(平山ほか1966, 上村1972・1992, 中本1976, 松本2000, 狩俣2000, 大野2002・2003, 木部2012)で前舌母音 vs. 中舌母音の区別として記述されてきた。

<sup>6</sup> Ex. “来る-INF” *khjii* [k<sup>h</sup>i:], “切る-INF” *k'jii* [k<sup>ʔ</sup>i:], “昆布” *khubu* [k<sup>h</sup>ubu], “口” *k'uci* [k<sup>ʔ</sup>utçi]

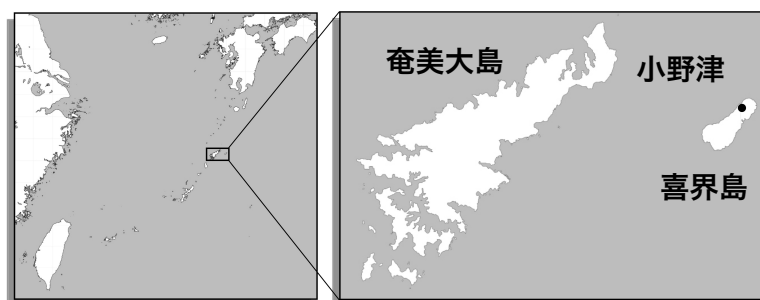


図1 小野津集落／喜界島の位置

続子音と同一調音点の阻害音あるいは鼻音が分布する。このうち語末に分布するのは鼻音のみである。本稿では音節末鼻音について形態素末では *n* を、それ以外では音声実現に応じて *m*, *n*, *ŋ* を用いて表記することとする<sup>7</sup>。C<sub>1</sub>C<sub>2</sub> には同じ無声阻害音の連続のみが許される。G には *j*, *w* が分布し、それぞれ先行する C<sub>1,2</sub> を口蓋化／唇音化する<sup>8</sup>。(w の前の C には軟口蓋音のみが分布する)。頭子音 (及びその連続) について、前舌母音も含め、すべての母音の前で *j* の有無が弁別的である。前舌母音に先行する子音について、歯茎摩擦音 *s*, *z*, *c* のみ口蓋化するものの、軟口蓋音は (日本語共通語や喜界島中南部方言と異なり) 前舌母音の前でも一般に口蓋化せず、また両唇音は (奥舌母音の前でのみならず) 前舌母音が後続する場合において軟口蓋化して実現する<sup>9</sup>。母音の長さについては、すべての母音において長短が弁別的であり、長母音は同じ母音の連続として解釈される。

- 子音：

- 閉鎖音: /p/[p~pʰ], /b/, /t/[t~tʰ], /tʰ/, /d/, /k/[k~kʰ], /kʰ/, /g/
- 破擦音: /ts/[ts~tɕ]
- 摩擦音: /ʃ/[ʃ~pʰ~pʰ̃], /s/[s~ɕ], /z/[z~dz~z̃~dz̃], /h/
- 鼻音: /m/, /n/, /ŋ/
- 弾音: /r/
- 接近音: /w/, /j/

- 母音: /i/, /e/, /a/, /o/, /u/

- 表記: *p*' = 語頭単子音の /p/, *th* = /tʰ/, *t*' = 語頭単子音の /t/, *kh* = /kʰ/, *k*' = 語頭単子音の /k/, *g* = /g/, *c*' = 語頭単子音の /ts/, *c* = 語中の /ts/, *cc* = /tts/, *f* = /ʃ/, *zz* = /dz/, *r* = /r/
- 音節構造: (C<sub>1</sub>)(C<sub>2</sub>)(G)V<sub>1</sub>(V<sub>2</sub>)(C<sub>3</sub>)

<sup>7</sup> Ex. *ammaa* [ʔamma:] “おばあさん、お母さん”, *jijga* [jijga] “男”, *kham-an-ba* [kʰamamba] “食べる-NEG.COND (食べなければ)”, *k'jin=ŋa* [kʰijŋa] “着物=NOM (着物が)”

<sup>8</sup> Ex. *hamja* [hamʲa] “神宮 (かみや、地名)”, *khjoodee* [kʰjo:de:] “兄弟”, *k'wee* [kʰwe:] ~ [kʰwe:] “鋏”, *duggwaddoo* [duggbaddo:] ~ [duggwaddo:] “六月燈 (祭事の名前)”

<sup>9</sup> Ex. *thuzi* [tʰuzi] “妻”, *sima* [ɕima] “島、集落”, *suuki* [su:ki] “お祭りのときのごちそう”, *sijaji* [ɕijaji] “白髪”, *jubi* [jubʲi] “ゆうべ”, *humi* [humʲi] “米”

### 3 小野津方言の談話資料

本節で記述する談話は、2012年3月に収録された小野津集落出身・在住の80代男性 $\alpha$ 、80代女性 $\beta$ と60代女性 $\gamma$ の会話の一部である。主に、七夕の時に子どもたちが海で机を清める風習について、 $\gamma$ が $\alpha$ と $\beta$ に問いかけ、 $\alpha$ と $\beta$ が答えている。一行目に本稿が採用している表記法による音韻表記と形態素境界、二行目に形態素ごとのグロス、三行目に日本語訳例を記している<sup>10</sup>。グロスの略記については巻末を参照されたい。発話ターンの交替や言いよどみで発話が途切れた箇所は…で示している。<>内は日本語へのコードスイッチングが見られる部分である。@@@は笑い声、(...)は聞き取り不能箇所である。

(1)  $\alpha$  wannaa sjoogakko=n dukji thanabata=njee bjenkjoo s-u-n sukudee

1.EXCL.GEN 小学校=GEN 時 七夕=LOC.TOP 勉強 する-NPST-ADN 机

muc-ci umji=kai oonjii si-inja

持つ-SEQ 海=ALL 泳ぎ する-PURP

私たちの小学校の時、七夕には、勉強する机を持って海へ泳ぎに（行った）

(2)  $\alpha$  sarumata t'icu na-ti sukudee=joba suna=zi ara-ti khaisui=zi <k'ijomjete>

さるまた 一つ なる-SEQ 机=ACC 砂=INST 洗う-SEQ 海水=INST 清めて

huri=joba <ukji=ni site> oonjii si-i

それ=ACC 浮きに して 泳ぎ する-INF

さるまた一つになって、机を砂で洗って海水で清めて、それを浮きにして泳ぐんだ

(3)  $\gamma$  oonjii si-i

泳ぎ する-INF

泳ぐの

(4)  $\alpha$  asisi bjenkjoo=ŋa diki-jun=nen <cukueo> sukudee=joba <daizinji daizinji

そして 勉強=NOM できる-NPST=ように 机を 机=ACC 大事に 大事に

mocikae...> muc-ci mudu-ti

持ち帰... 持つ-SEQ 戻る-SEQ

そして、勉強ができるように、机を、大事に大事に持ち帰... 持って戻って

(5)  $\gamma$  huri watana-n-kwaa=kai ik-ji=cci

それ PLN(LIT.??-L-DIM)=ALL 行く-INF=QUOT

それ、ワタナクウアーへ行くって？

(6)  $\alpha$  watana-n-kwaa

PLN(LIT.??-L-DIM)

ワタナクウアー

<sup>10</sup> 形態論／統語論の概略的記述について、白田（2013）を参照されたい。



(7)  $\gamma$  *watana-n-kwaa*

PLN(LIT.??-L-DIM)

ワタナクウアー

(8)  $\gamma$  *duunaa jaa=nu saa=nu umji=kai*

REF.PL.GEN 家=GEN 下=GEN 海=ALL

自分たちの家の下の海へ

(9)  $\beta$  *saa=nu*

下=GEN

下の

(10)  $\alpha$  *umji=kai*

海=ALL

海へ

(11)  $\gamma$  [ $\beta$ ]+*baa=ja huma-n-dee*

PN+ 姉さん=TOP ここ-L-APPR

[ $\beta$ ] 姉さんはこちらへん?

(12)  $\beta$  *huma*

ここ

ここ

(13)  $\beta$  *saa*

下

下

(14)  $\gamma$  *wannaa assee ufataee watana-n-kwaa=nu*

1.EXCL じゃあ HN.TOP PLN(LIT.??-L-DIM)=GEN

私たちは、じゃあ、ウファタイはワタナクウアーの

(15)  $\alpha$  *watana-n-kwaa*

PLN(LIT.??-L-DIM)

ワタナクウアー

(16)  $\beta$  *wanna=ja ccu+ubukk-as-aa*

1.EXCL=TOP 他の子を水の中に押し込むいたずらっ子 (LIT. 人 + 溺れる-CAUS-AGE)

私たちは他の子を水の中に押し込むいたずらっ子 (だった)

(17)  $\beta$  *usunku+dumaii=zi*

PLN(?+ 港.CM)=LOC  
ウスンクドウマイーで

(18)  $\gamma$  *wanna=ja watana-n-kwaa*

1.EXCL=TOP PLN(LIT.??-L-DIM)  
私たちはワタナクウァー

(19)  $\beta$  *basu*

場所  
場所

(20)  $\gamma$  *assee huma=zi assee hinnja-n-cu*

じゃあ そこ=LOC じゃあ みんな (LIT. みんな-L-人)  
じゃあ、そこで、じゃあ、全員なの？

(21)  $\gamma$  *khjoodee*

きょうだい  
きょうだい (全員なの？)

(22)  $\gamma$  *t'innaa nen=doonja jo sukudee=ja*

一つずつ ない.NPST=SFP DSC 机=TOP  
一つずつないでしょうが、机は

(23)  $\beta$  *assi jo*

そう DSC  
そうよ

(24)  $\alpha$  *theegee a-su=doo*

大概 ある.NPST-NMLZ=SFP  
大概あるんだよ

(25)  $\gamma$  *theegee a-su=na*

大概 ある.NPST-NMLZ=YNQ  
大概あるの？

(26)  $\alpha$  *in*

RESP  
うん

- (27)  $\beta$  *anu wanna=ja wanna=ja jo soomin+bakuu=zi*  
 DSC 1.EXCL=TOP 1.EXCL=TOP DSC そうめん + 箱.CM=INST  
 私たちは、私たちはね、そうめん箱で
- (28)  $\beta$  *soomin+bakuu*  
 そうめん + 箱.CM  
 そうめん箱
- (29)  $\gamma$  *huri=joba muc-ci duunaa=zi*  
 それ=ACC 持つ-SEQ REF.PL=INST  
 それを持って自分たちで
- (30)  $\beta$  *in in muc-ci-zi jo*  
 RESP RESP 持つ-ていく-SEQ DSC  
 うんうん、持って行ってね
- (31)  $\gamma$  *asisikara suna=zi assi ara-i=ja*  
 それから 砂=INST こう 洗う-INF=SFP  
 それから砂でこう洗うの？
- (32)  $\alpha$  *in in suna=zi*  
 RESP RESP 砂=INST  
 うん 砂で
- (33)  $\beta$  *suna=zi k'jijum-ji*  
 砂=INST 清める-INF  
 砂で清めるの
- (34)  $\alpha$  *<k'jijomje jo>*  
 清め DSC  
 清めるんだよ
- (35)  $\alpha$  *ora*  
 DSC  
 ほら
- (36)  $\beta$  *gjenkji=zi jo*  
 元気=INST DSC  
 元気でね

- (37)  $\gamma$  *bjeŋkjoo diki-ta=ka jaa @@@*  
 勉強 できる-PST=DUB DSC @@@  
 勉強できたかねえ
- (38)  $\beta$  *gjeŋkji=zi bjeŋkjoo dik-ju-roo*  
 元気=INST 勉強 できる-NPST-INFR  
 元気で勉強できるだろう
- (39)  $\alpha$  *sjuuzi=zi sumji-doo nuu-doo jungi-tun=karanji*  
 習字=INST 墨=APPR 何=APPR 汚れる-CONT.NPST=CSL  
 習字で墨やら何やら汚れているから
- (40)  $\alpha$  *<sunade sirozunade>*  
 砂で 白砂で  
 砂で、白砂で
- (41)  $\gamma$  *assi=na*  
 そう=YNQ  
 そうか
- (42)  $\beta$  *diki-timu diki-ran-timu diki-ju-n niŋee=doo=cci assi si-i*  
 できる-CONC できる-NEG-CONC できる-NPST-ADN 願い=SFP=QUOT こう する-INF  
*jo*  
 DSC  
 できてもできなくても、できる願いだよって、こうするのよ
- (43)  $\beta$  *<onegai>*  
 お願い  
 お願い
- (44)  $\gamma$  *assee*  
 じゃあ  
 じゃあ
- (45)  $\beta$  *<negai>*  
 お願い  
 お願い

- (46)  $\gamma$  *nuu=cci i-iba juta-sa-su=ka assee suu=ŋa fji-cju-n*  
 何=QUOT 言う-COND 良い-VLZ.NPST-NMLZ=DUB じゃあ 潮=NOM 引く-CONT.NPST-ADN  
*dukji=nji i-zi duunaa=zi*  
 時=LOC 行く-PST REF.PL=INCL  
 何て言えばいいのかのか、じゃあ潮が引いている時に行ったの？自分たちで
- (47)  $\gamma$  *kkwa-n-kjaa assi gaba ik-ji=ja*  
 子ども-L-PL こう たくさん 行く-INF=SFP  
 子供たちは、こう、たくさん行くの？
- (48)  $\alpha$  *in jaa ugii gaba-n-cu*  
 RESP DSC DSC たくさん-L-人  
 うん、それはもう大勢
- (49)  $\gamma$  *gaba-n-cju=wa*  
 たくさん-L-人=SFP  
 大勢？
- (50)  $\beta$  *fji-cu-n dukjee ik-an=nen=doowa*  
 引く-CONT.NPST-ADN 時.TOP 行く-NEG=ように=SFP  
 引いているときは行かないんだよ
- (51)  $\alpha$  *njaa fjiccii fjizjuu*  
 もう 一日 ずっと  
 もう、一日ずっと
- (52)  $\gamma$  *fji-iba ik-aa jaa*  
 干る-COND 行く-NEG DSC  
 干潮になれば行かないね
- (53)  $\beta$  *in jaa anu*  
 RESP DSC DSC  
 うん
- (54)  $\gamma$  *njaa joo+mjic-ii joo+mjic-i=nji*  
 もう 少し + 満ちる-INF.CM 少し + 満ちる-INF.CM=LOC  
 もう満ちかけた時、満ちかけた時に
- (55)  $\beta$  *ufusu=ŋa i-ju-n dukji*  
 大潮=NOM 入る-NPST 時  
 大潮が入る時

- (56)  $\beta$  *ufusu=ŋa i-ju-n dukji unui anu zikan thu-ti ik-ju-su*  
 大潮=NOM 入る-NPST 時 その時 DSC 時間 取る-SEQ 行く-NPST-NMLZ  
 大潮が入る時、その時、時間を見計らって行くの
- (57)  $\gamma$  *assi suru-ti ik-ji dusi-n-kjaa=kara khjoodee=kara*  
 こう 揃う-SEQ 行く-INF 友達-L-PL=ABL きょうだい=ABL  
 こう、揃って行くの？ 友達たちもきょうだいも
- (58)  $\beta$  *njaa sakji zembu in jaa i-zi wanna=ja*  
 もう 先 全部 RESP DSC 行く-SEQ 1.EXCL=TOP  
 もう先に全部、うん、行って、私たちは
- (59)  $\alpha$  *in zembu*  
 RESP 全部  
 うん、全部
- (60)  $\beta$  *dusi-n-kjaa=tu*  
 友だち-L-PL=COM  
 友達たちと
- (61)  $\beta$  *njaa numjii k'wata+k'wata jo*  
 もう たくさん いっぱい DSC  
 もうたくさん、いっぱいだよ
- (62)  $\alpha$  *meemee i-zu-su jo*  
 めいめい 行く-CONT.NPST-NMLZ DSC  
 めいめい 行っているのよ
- (63)  $\gamma$  *asisikara oonjii si-i=nati*  
 それから 泳ぎ する-INF=CSL  
 それから泳ぐから
- (64)  $\alpha$  *oonjii si-i*  
 泳ぎ する-INF  
 泳ぐんだ
- (65)  $\gamma$  *hun faku muc-ci assi ssi*  
 その箱 持つ-SEQ こうして  
 その箱を持ってこうして

- (66)  $\beta$  *asisikara isigakji=n wii=kara dossun=cici dondon unaju=mu jijja=mu dondon*  
 それから 石垣=GEN 上=ABL OMP=QUOT どんどん 女=も 男=も どんどん  
*thub-ji...*  
 とぶ-INF  
 それから石垣<sup>11</sup>の上からバシヤンて、どんどん、女も男もどんどん跳び..
- (67)  $\gamma$  (...)  
 (...)  
 (...)
- (68)  $\beta$  *anu thubjikum-ji*  
 DSC 跳び込む-INF  
 跳び込むの
- (69)  $\beta$  *suu=madi jo*  
 底=LMT DSC  
 底までよ
- (70)  $\alpha$  *mata oonjii s-u-n doo=ja hunu <njimjeetoruguraino> thaa-sa-n...*  
 DSC 泳ぎ する-NPST-ADN ところ=TOP DSC ニメートルぐらいの 高い-VLZ.NPST-ADN  
 また泳ぎをするところは二メートルぐらいの高い...
- (71)  $\gamma$  *watana-n-kwaa+ukjii=kai ik-ji*  
 PLN(LIT.??-L-DIM)+ 沖.CM=ALL 行く-INF  
 ワタナクウァー沖へ行くの？
- (72)  $\gamma$  *oonjii si-i=ja*  
 泳ぎ する-INF=TOP  
 泳ぐのは
- (73)  $\beta$  *k'uwa-sa-n doo=zi*  
 深い-VLZ.NPST-ADN ところ=LOC  
 深いところで
- (74)  $\alpha$  (...) *thun-zi uti*  
 (...) 跳ぶ-SEQ 落ちる-INF  
 (...) 跳んで落ちるんだ

<sup>11</sup> 海岸の崖の石のことを言い間違えたものと思われる。

- (75)  $\gamma$  *wannaa meebbaa ara watana-n-kwaa=kara watana-n-kwaa+ukjii=gari*  
 1.EXCL.GEN PLN.TOP DSC PLN(LIT.??-L-DIM)=ABL PLN(LIT.??-L-DIM)+ 沖.CM=LMT  
*ik-ji jo maru+isii=kara*  
 行く-INF DSC PLN(LIT. 丸い-石.CM)=ABL  
 私たちムエツバはね、ワタナクウァーからワタナクウァー沖まで行くのよ、マ  
 ルイシーから
- (76)  $\gamma$  *ama=gari ik-ji assee*  
 そこ=LMT 行く-INF じゃあ  
 あそこまで行くの、じゃあ
- (77)  $\alpha$  *ukjee njaa zjoozu=ŋa*  
 沖.TOP もう 上手=NOM  
 沖はもう上手 (な子) が
- (78)  $\gamma$  *ukji=garee*  
 沖=LMT.TOP  
 沖までは
- (79)  $\beta$  *zjoozu=ŋa ik-ji=doowa soo mannaka=n... mannaa=gari*  
 上手=.NOM 行く-INF=SFP ただ 真ん中=GEN 真ん中=LMT  
 上手 (な子) がいくんだよ、ただ真ん中の... 真ん中まで
- (80)  $\alpha$  *zjookjuusee zja jaa*  
 上級生 COP.NPST DSC  
 上級生だね
- (81)  $\gamma$  *ufuccju... ufuccju na-ti=kara jaa*  
 大人 大人 なる-SEQ=ABL DSC  
 大人になってからね
- (82)  $\alpha$  *watana-n-kwaa=ja mata sjosinsja*  
 PLN(LIT.??-L-DIM)=TOP また 初心者  
 ワタナクウァーはまた、初心者
- (83)  $\gamma$  *sjosinsja=ŋa u-i*  
 初心者=NOM いる-INF  
 初心者がいるの



- (84)  $\alpha$  *asisi mata namji=ŋa c'u-sa-n dukji=njee ufusu=nu dukji=njee*  
 そして また 波=NOM 強い-VLZ.NPST-ADN 時=LOC.TOP 大潮=GEN 時=LOC.TOP  
*<njimjeetoru sammjeeroru takai> isi=nu dan=kara...*  
 ニメートル 三メートル 高い 石=GEN 段=ABL  
 そしてまた、波が強い時には、大潮の時には、ニメートル、三メートル高い石の段か  
 ら...
- (85)  $\beta$  *t'oon=ci thub-ji*  
 OMP=QUOT とぶ-INF  
 トーンと跳ぶの
- (86)  $\alpha$  *<thobjikomji>*  
 跳び込み  
 跳び込み
- (87)  $\gamma$  *thubjiku-di*  
 跳び込む-SEQ  
 跳び込んで
- (88)  $\beta$  *thubikum-ji*  
 跳び込む-INF  
 跳び込むの
- (89)  $\gamma$  *asisi hun fakoo njaa ama ucii-tuk-ji ara-ti=kara*  
 そしてその箱.TOP もう あそこ 置く-ておく-INF 洗う-SEQ=ABL  
 そしてその箱はもう、あそこ置いておくの？洗ってから
- (90)  $\alpha$  *in jaa*  
 RESP DSC  
 うん
- (91)  $\beta$  *isi=n wii=nji...*  
 石=GEN 上=LOC  
 石の上に...
- (92)  $\alpha$  *ara-ti...*  
 洗う-SEQ  
 洗って...
- (93)  $\gamma$  *haarak-as-i*  
 乾く-CAUS-INF  
 乾かすの

(94)  $\alpha$  *haarak-as-i*

乾く -CAUS-INF  
乾かすの

(95)  $\beta$  *in jaa*

RESP  
うん

(96)  $\beta$  *nagas-an=nen jo isi=n wii uci-tuk-ji=doowa*

流す-NEG.NPST=ように DSC 石=GEN 上 置く-ておく-INF=DSC  
流さないようにね、石の上置いておくのよ

(97)  $\gamma$  *aa hagee ora wanoo fazimi-ti k'ji-cjan=mun funtoo=nji*

INTJ INTJ DSC 1.SG.TOP 始める-SEQ 聞く -PST=FN 本当=LOC  
私は初めて聞いたもの、ほんとに

(98)  $\beta$  *<sangoisino uenji> wii=nji...*

珊瑚石の 上に 上=LOC  
珊瑚石の上に、上に...

(99)  $\alpha$  *haarak-jun=gari oonjii si-i+huri jo*

乾く -NPST=LMT 泳ぎ する-INF+ 惚れ DSC  
乾くまで夢中でおよぐんだよ

(100)  $\gamma$  *oonjii s-si=kara mudu-i*

泳ぎ する-SEQ=ABL 戻る-INF  
泳ぎをしてから戻るの

(101)  $\gamma$  *asisi una-n-kwaa maa wii=gari k'ji-ci=doonja*

そして女-L-子.TOP DSC 上=LMT 着る-SEQ=SFP  
それで女の子は、まあ上まで着てでしょ

(102)  $\gamma$  *sjacu k'ji-ci...*

シャツ 着る-SEQ  
シャツを着て...

(103)  $\beta$  *k'jin+mama=jowa*

服 + まま=SFP  
服のままよ

(104)  $\beta$  *khantamfuku+mama=jowa*

簡単服 + まま=SFP  
簡単服のままよ

(105)  $\alpha$  *unajoo mukasi=nu appappaa jo*

女.TOP 昔=GEN アッパッパー DSC  
女は昔のアッパッパーだよ

(106)  $\beta$  *hagee appappaa=jowa*

INTJ アッパッパー=SFP  
ああ、アッパッパーよ

(107)  $\beta$  *khantamfuku k'ji-ci=doowa*

簡単服 着る-SEQ=SFP  
簡単服着てだよ

(108)  $\gamma$  *maa wanna=mu assi a-tan=nati*

DSC 1.EXCL=も そう COP-PST=CSL  
まあ私たちもそうだったから

(109)  $\beta$  *hagee*

INTJ  
ああ

(110)  $\alpha$  *hasisi*

そして  
そして

(111)  $\beta$  *ubus-sa*

重い-NPST  
重い

(112)  $\beta$  *ajja-ju-n dukjee jo njaa suu k'un-di gaccui gjii+gji jo*

上がる-NPST-ADN 時.TOP DSC もう 潮 含む-SEQ DSC OMP DSC  
上がる時はね、潮含んで、もう、ずっしりなのよ<sup>12</sup>

(113)  $\gamma$  *huri nannen=bee=kara s-u-ta=ka*

それ 何年=LMT=ABL する-IPFV-PST=DUB  
それ何年ごろからしていたかな

<sup>12</sup> *gjii+gji* は通常、背負った荷物が重いときに用いる表現である。

奄美喜界島小野津方言の談話資料

- (114)  $\gamma$  *nannen sjoogakkoo=nu nannen=kara s-u-ta=ka* *jo*  
 何年 小学校=GEN 何年=ABL する-IPFV-PST=DUB DSC  
 何年、小学校の何年からしていたかね
- (115)  $\beta$  *hagee nuu nannen=dukuru njaa ina-sa-i=n=kara* *jara*  
 INTJ DSC 何年=どころ もう 小さい-VLZ-時=DAT=ABL DSC  
 何年どころか、小さい頃からだよ
- (116)  $\alpha$  *gakkoo ik-a-n* *ccu=mu mazii=nji oonjii si-i* *jo*  
 学校 行く-NEG.NPST-ADN 人=も 一緒=LOC 泳ぎ する-INF DSC  
 学校へ行かない人も一緒に泳ぎをするのよ
- (117)  $\gamma$  *app-ji app-ji*  
 遊ぶ-INF 遊ぶ-INF  
 遊んで
- (118)  $\beta$  *in jaa*  
 RESP DSC  
 うん
- (119)  $\beta$  *ffizjuu s-u-su=doo*  
 ずっと する-NPST-NMLZ=SFP  
 ずっとするのよ
- (120)  $\gamma$  *asisikara*  
 それから  
 それから
- (121)  $\alpha$  *thanabata=n khuroo ac-cja-soo* *<acuikara>*  
 七夕=GEN 頃.TOP 暑い-VLZ.NPST-CSL 暑いから  
 七夕のころは暑いから
- (122)  $\gamma$  *manacu=nati*  
 真夏=CSL  
 真夏だから
- (123)  $\gamma$  *asisiriba c'juugakkoo ik-iba njaa si-ran=zjaroo*  
 そうすると 中学校 行く  $\ddot{i}$ RCOND もう する-NEG.NPST=INFR  
 そうすると、中学校行くともうしないでしょ

(124)  $\beta$  *oonjii=na*

泳ぎ=YNQ

泳ぎのこと？

(125)  $\gamma$  *a-raa*                    *hun sukudee+ara-i jo*

COP-NEG.NPST その机 + 洗う.INF DSC

いいえ、その、机洗いよ

(126)  $\alpha$  *njaa huree*      *si-raa*

もう それ.TOP する-NEG.NPST

もうそれはしない

(127)  $\beta$  *njaa huree*      *thanabata=nu fjii=nu icinjici=dakje jo*

もう それ.TOP 七夕=GEN      日=GEN 一日=LMT      DSC

もうそれは七夕の日の一日だけよ

(128)  $\gamma$  *sjoogakkoo*

小学校

小学校？

(129)  $\alpha$  *sjoogakkoo*

小学校

小学校

(130)  $\gamma$  *dakara sjoogakkoo=nu...=bee zja*                    *jaa*

だから 小学校=GEN=LMT      COP.NPST DSC

だから小学校の... だけだね

(131)  $\alpha$  *sjoogakkoo=nu dukji=nji*

小学校=GEN      時=LOC

小学校のときに

(132)  $\gamma$  *k'jittu jaa*

きっと DSC

きっとね

(133)  $\beta$  *in sjoogakkoo*

RESP 小学校

うん、小学校

(134)  $\gamma$  *huree njaa mjimun a-ta*

それ.TOP もう 見もの COP-PST  
それはもう見ものだった

(135)  $\beta$  *thanabata=nu icinjici=dakje=doo*

七夕の 一日=LMT=SFP  
七夕の一日だけだよ

(136)  $\beta$  *fjiccii*

一日  
一日

(137)  $\gamma$  *njaa numjii zja jaa watana-n-kwaa=ja assee*

もう たくさん COP.NPST DSC PLN(LIT.??-L-DIM)=TOP じゃあ  
もうたくさんだね、ワタナクウァーは、じゃあ

(138)  $\gamma$  *k'wacja+k'wacja*

OMP  
満杯

(139)  $\beta$  *hagee k'wacja+k'wacja=jowa*

INTJ OMP=SFP  
ああ、満杯だよ

(140)  $\alpha$  *hasisi mata meerabi-n-kjaa jo*

そしてまた 若い娘-L-APPR.TOP DSC  
そしてまた若い娘なんかは

(141)  $\beta$  *asisikara*

それから  
それから

(142)  $\beta$  *jiŋŋa=ŋa usikki=doowa*

男=NOM 押さえつける.INF=SFP  
男の子が（いたずらで海の中に）押さえつけるのよ

(143)  $\alpha$  *njaa zjuuhakkuizjoo=nu meerabi-n-kjaa hamaci (...) jugoobasii=nu k'uwazuimo=nu*

もう 十八九以上=GEN 若い娘-L-APPR.TOP 頭 (...) クワズイモ=GEN クワズイモ=GEN  
*faa=joba jo =zi hamaci k'uc-ci nur-as-an=nen*  
葉=ACC DSC =INST 頭 括る-SEQ 濡らす-NEG.NPST=ように  
もう十八、九以上の若い娘なんかは頭...、クワズイモの、クワズイモの葉をね、(葉)  
で頭を括って濡らさないように

(144)  $\gamma$  *an gukji=zi assee huma=nji k'ubb-ji=ja*

あの 茎=INST じゃあ ここ=LOC 括る-INF=SFP  
あの茎で?じゃあここに結ぶの?

(145)  $\alpha$  *aai huma=nji hamaci <thaorude simerunojo>*

RESP ここ=LOC 頭 タオルで 締めるのよ  
いや、ここに頭をタオルで締めるのよ

(146)  $\gamma$  *thaoru=zi=ja*

タオル=INST=SFP  
タオルで?

(147)  $\gamma$  *jugoo=nu faa=zi=ja*

クワズイモ=GEN 葉=INST=SFP  
クワズイモの葉っぱで?

(148)  $\alpha$  *jugoo=nu faa=joba mata thaoru=nessan mun=zi k'uc-ci*

クワズイモ=GEN 葉=ACC また タオル=みたいなもの=INST 括る-SEQ  
クワズイモの葉っぱをまた、タオルみtainなので縛って

(149)  $\beta$  *wannaa dukjee jugoo=zi=garee k'ubb-an-ti*

1.EXCL.GEN 時.TOP クワズイモ=INST=LMT.TOP 括る-NEG-PST  
私たちの時はクワズイモでまでは縛らなかった

(150)  $\beta$  *aree ja mojas=du mojas=du wii=ja habb-as-u-tan=doowa*

あれ.TOP DSC もやし=FOC もやし=FOC 上=TOP 被る-CAUS-PST-SFP  
あれはね、もやしに上は被せていたよ

(151)  $\beta$  *mojasi urus-ee jo siju+zuna=n naa=nji huree uru-cja=ŋa jo*

もやし 蒔く-INF.TOP DSC 白+砂=GEN 中=LOC それ.TOP 蒔く-PST=ように DSC  
*miicjaa=njee k'ubb-aa*

額=LOC.TOP 括る-NEG.NPST

もやし蒔くのはね、白砂の中に蒔いたがね、額には括らない

(152)  $\beta$  *hirozi+njiisan=nu dukjee k'uc-cja jaa*

PN +兄さん=GEN 時.TOP 括る-PST DSC  
廣次兄さんの時は括ったんだね

(153)  $\alpha$  *assee*

じゃあ

じゃあ

奄美喜界島小野津方言の談話資料

(154)  $\gamma$  meebba=ŋa k'ubb-ju-ta-su

PLN=NOM 括る-IPFV-PST-NMLZ

ムエーツバが括っていたの

グロス

ABL	ablative	奪格	L	linker	リンカー
ACC	accusative	対格	LMT	limitative	限界格
ADN	adnominal	連体	LOC	locative	処格
AGE	agentive	動作主	NEG	negative	否定
ALL	allative	方向角	NMLZ	nominalizer	名詞化
APPR	approximative	曖昧	NOM	nominative	主格
CAUS	causative	使役	NPST	nonpast	非過去
CM	compoundmarker	複合語標識	OMP	onomatopoeia	オノマトペ
COM	comitative	共格	PL	plural	複数
COND	conditional	条件	PLN	placename	地名
CONT	continual	継続	PN	personalname	人名
COP	copula	コピュラ	PST	past	過去
CSL	causal	理由	PTCT	particle	助詞
CONC	concessive	譲歩	PURP	purposive	目的
DIM	diminutive	指小	QUOT	quotative	引用
DSC	discoursemarker	談話標識	REF	reflective	再帰
DUB	dubitative	疑念	RESP	response	応答表現
EXCL	exclusiveplural	除外的複数	SEQ	sequential	継起
FN	formalnoun	形式名詞	SFP	sentencefinalparticle	文末助詞
FOC	focus	焦点	SFS	sentencefinalsuffix	文末接辞
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
HN	housename	屋号	TOP	topic	主題
INCL	inclusiveplural	包括的複数	VLZ	verbalizer	動詞化
INF	infinitive	不定形	YNQ	yes-noquestion	諾否疑問
INFR	inferential	推量	+	複合・重複境界	
INST	instrumental	具格	=	接語境界	
INTJ	interjection	間投詞	-	接辞境界	
IPFV	imperfective	未完了	??	不明	



参考文献

- 岩倉市郎 (1934) 「喜界語音韻概説」『方言』4(10): 12-23.
- 上村幸雄 (1972) 「琉球方言入門」『言語生活』251: 20-37.
- \_\_\_\_\_ (1992) 「琉球列島の言語 (総説)」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典世界言語編下2』771-814. 東京: 三省堂.
- 大野眞男 (2002) 「奄美方言における中舌母音の歴史的重層性」『国語研究』41: 78-69.
- \_\_\_\_\_ (2003) 「北奄美周辺方言の音韻の特徴」『岩手大学教育学部研究年報』63: 51-70.
- 狩俣繁久 (2000) 「奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ」『日本東洋文化論集』6: 43-69.
- 木部暢子 (2011) 「喜界島方言の音韻」『国立国語研究所共同研究報告 11-01 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』12-50. 東京: 国立国語研究所.
- \_\_\_\_\_ (2012) 「奄美喜界島方言の母音について」『国語研プロジェクトレビュー』3(1):3-14.
- 白田理人 (2013) 「奄美語喜界島小野津方言の談話資料」田窪行則 (編) 『琉球列島の言語と文化: その記録と継承』くろしお出版.
- 中本正智 (1976) 『琉球方言の音韻』東京: 法政大学出版局.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 松本幹男 (2000) 「沖永良部島方言と喜界島方言における中舌母音について」『語学研究』95: 169-173.

# スワヒリ語の前鼻音化阻害音について

古本 真

京都大学／日本学術振興会<sup>1</sup>

## 0 はじめに<sup>2</sup>

スワヒリ語の代表的文法のひとつである Ashton (1947: 3) には子音目録のなかに鼻音結合 (nasal compound) として mb, mv, nd, nz, nj, ng が挙げられている。この鼻音結合は (1) に挙げる通り語頭や語中を問わず現れる。

(1)	<i>mbona</i> 「なぜ」	<i>kamba</i> 「ロープ」
	<i>ndege</i> 「鳥」	<i>-enda</i> 「行く」
	<i>njoo</i> 「来い」	<i>manjano</i> 「黄色」
	<i>-ngoja</i> 「待つ」	<i>mlango</i> 「扉」
	<i>mvua</i> 「雨」	<i>chumvi</i> 「塩」
	<i>nzige</i> 「バツタ」	<i>chenza</i> 「みかん」

Conti-Morava (1997: 844) のようにこの鼻音結合を前鼻音化閉鎖音<sup>3</sup>という一つの音素とする立場もあるが、一般に<sup>4</sup>この鼻音結合が一つの音素として認められているとは言い難い。しかしながら一つの音素として認めない場合、音素表記に曖昧性が生じてしまう。また音節構造を考慮すると一つの音素とみなす方がより簡潔な記述となる。本稿ではまず1節で鼻音結合を一つの音素 (前鼻音化阻害音) として立てる理由を述べる。そして2節で前鼻音化阻害音を音素として立てる際に問題となりうる 9/10 クラスの名詞<sup>5</sup>の語頭に現れる前鼻音化阻害音について論じる。3節では語中の前鼻音化阻害音について述べる。

なお前鼻音化阻害音を音素として立てない場合、音素目録は (2) のようになる<sup>6</sup>。

<sup>1</sup> 本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費 (DC1) (課題番号: 25・3150) の研究成果の一部である。

<sup>2</sup> 本稿で用いるデータは特に明示しない限り、筆者がザンジバルストーンタウン在住の20代男性から得たものである。標準スワヒリ語はザンジバル都市部方言をもとに策定されており、本稿での議論をある地域方言に限定したものではなくいわゆる「スワヒリ語」の議論として大きな問題はないだろう。

<sup>3</sup> Conti-Morava (1997: 844) は鼻音+閉鎖音 (mb, nd, ng) のみを音素として立てている。

<sup>4</sup> Polomé (1967), Myachina (1981), 中島 (2000), Mohammed (2001) 参照。なお Mohammed (2001: 6) は前鼻音化阻害音を音素とするかには議論の余地があると述べている。

<sup>5</sup> スワヒリ語の名詞は [接頭辞-語幹] と分析される。名詞は1~11, (14), 15~18のクラスに分類され、名詞接頭辞はそのクラスに応じて異なる。10クラスまでは隣り合う奇数番号と偶数番号が単複の対をなす。多くの形容詞も形態的には名詞と同じふるまいをみせるが、本稿ではこうした形容詞も名詞として議論を進める。

<sup>6</sup> (1) は Polomé (1967: 38-39) をもとにしている。[] 内は異音を表す。なお標準スワヒリ語の正書法では /ɟ/=ch, /ʃ/=j, /g/=g, /ɸ/=f, /β/=v, /θ/=th, /ð/=dh, /ʃ/=sh, /ɣ/=gh, /ɲ/=ny, /ŋ/=ng' (鼻音結合に現れる際は n), /j/=y であり、それ以外は音素表記と同じである。本稿で正書法を用いる場合は斜体で表記する。

## (2) 子音

p, b[ <sup>6</sup> , b]	t, d[ <sup>6</sup> , d]	ʃ, ʒ [ʃ, dʒ]	k, g[ <sup>6</sup> , g]		
ɸ, β <sup>7</sup>	θ, ð	s, z	ʃ	ɣ	h
m	n	ɲ	ŋ		
	l, r				
w		j			
母音					
i, e, a, o, u					

また音節構造は V, CV, CCV, CCCV, N となる (Polomé 1967: 50)。このように音節を設定すると語の後ろから 2 番目に強勢が置かれるといえる。つまり音節は強勢を担う単位である。

## 1 前鼻音化阻害音を音素として立てる理由

## 1.1 音韻表記 /mb/ の問題

(2) のように音素を立てた場合、/mboga/ という音素表記が [m<sup>6</sup>boga] 「カボチャ (茎)」と [mboga<sup>6</sup>] 「野菜」を表すことになってしまう。同様の問題は /mbatata/ ([m<sup>6</sup>batata] 「ジャガイモの茎」[mbatata] 「ジャガイモ」), /mboβu/ ([m<sup>6</sup>boβu] 「腐った (3 クラス)」[mboβu] 「腐った (9/10 クラス)」), /mbaja/ ([m<sup>6</sup>baja] 「悪い (1, 3 クラス)」[mbaja] 「悪い (9/10 クラス)」) にも当てはまる<sup>8</sup>。

/m/ という一つの音素を立てるのであれば、その /m/ が音節を形成するかどうか、また後続する破裂音の条件異音<sup>9</sup>[<sup>6</sup>, b] がどのような環境で現れるかは音韻論的に説明されるべきであるが、そのような説明はこれまでのところ筆者の知る限りなされていない。上記の問題に限って言えばただ形態論的に成節的な /m/ は 1, 3 クラスの名詞接頭辞に、非成節的な /m/ は 9/10 クラスの名詞接頭辞に帰するということが言及されているだけである。

もし前鼻音化阻害音を音素として認めるとすると上記の /mb/ という音韻表記に関する問題はなくなる。鼻音と入破音と前鼻音化阻害音がそれぞれ別の音素となるからである。本節の最初に挙げた問題を例にとると、/m/と/b/と/mb/ という音素が立てられ、「カボチャ (茎)」は/m<sup>6</sup>boga/に、「野菜」は/mboga/になる。

なお Welmers (1973: 69) は「(1, 3 クラスの名詞接頭辞は) /b/, /v/ に前接する場合を除いてその音節性が明瞭に聞こえる」と述べており、/b/ と /v/ に前接する両唇鼻音が音節を形成しているかどうかの聞き分けが難しいことをほのめかしているが、筆者が聞いたところ、鼻

<sup>7</sup> /ɸ/, /β/ の音価は唇歯摩擦音とされるが、筆者が調べたところこの二つの音価は両唇摩擦音であった。

<sup>8</sup> これらの違いについては Polomé (1967), 中島 (2000) でも指摘されている。同様の問題は /mbuni/ 「コーヒーの木」「ダチョウ」、/mbaazi/ 「キマメの木」「キマメの実」にも当てはまるとされるが、これらの語を筆者のインフォーマントは知らなかった。

<sup>9</sup> Polomé (1967: 41) は [<sup>6</sup>] と [b] を条件異音みなし、成節的な m が前接する場合は [<sup>6</sup>] に、非成節的な m が前接する場合は [b] になるとしている。

## スワヒリ語の前鼻音化阻害音について

音の長さや後続する破裂音の音価にはっきりとした違いがみられた。また筆者のインフォーマントの直観でも /b/ に前接する 1, 3 クラスの名詞接頭辞と 9/10 クラスの名詞接頭辞は違う音として認識しているようである。

### 1.2 音節構造上の理由

鼻音結合の組み合わせは常に同一調音点の鼻音と有声阻害音である。鼻音に調音点の異なる有声破裂音が後続することも、語末が鼻音になることもない。こうした鼻音と有声破裂音の分布からこの音連続は同じ音節に属していると考えるのは問題ないだろう。

CCV という音節構造のありうる音素配列は鼻音+有声破裂音+母音、もしくは子音+半母音+母音である。鼻音+有声阻害音+母音という連続は音節を認定する際のひとつ大きな基準となる聞こえ度の原則（音節の始まりからピークに向かって聞こえ度が高くなり、ピークから音節の終りに向かって聞こえ度が低くなっていくという原則）に反している。他にこの原則に反している子音連続があるわけでもなく、非常に特異な音節構造である。記述の簡潔性という観点からも前鼻音化阻害音を認める分析の方が好ましいと言える。

### 1.3 前鼻音化阻害音をたてた場合の音素目録

以上のことを踏まえ前鼻音化阻害音を音素として立てるとすると子音の音素目録は (3) のようになる。以下の音素表記はこの音素目録に基づく。

(3)	p, b, mb	t, d, nd	ʃ, ʒ, ɲɔɟ	k, ɡ, ŋɡ		
	ɸ, β, mβ	θ, ð	s, z, nz	ʃ	ɣ	h
	m	n	ɲ	ŋ		
		l, r				
	w		j			

## 2 前鼻音化阻害音を音素とする場合の問題点

これまで前鼻音化阻害音が音素として認められなかったのは 9/10 クラスの名詞の語頭の前鼻音化阻害音の鼻音と有声阻害音の間に形態素境界が存在することが大きな理由として考えられる。本節では 9/10 クラスの名詞接頭辞について論じる。

### 2.1 語頭に現れる前鼻音化阻害音について

語頭に現れる前鼻音化阻害音の鼻音部分は、9/10 クラスの名詞接頭辞として分析される。つまり前鼻音化阻害音の鼻音部分と有声阻害音の間には形態素境界があるというのである。Welmers (1973: 68-69) はこのことによってスワヒリ語において鼻音と有声阻害音を別の音素としてたてる分析が魅力的に映っているのかもしれないと述べているが、それに続けて形態素境界があるかどうか、別個の音素を立てるか一つの音素とみなすべきかどうかは実際は関

係のない問題であるとも指摘している。語頭の前鼻音化阻害音は接頭辞付加ののち鼻音の調音点同化と有声阻害音の非入破音化<sup>10</sup>が起こる形態音韻変化と考えることができるが、その結果生じる鼻音+有声阻害音という音連続は 9/10 クラスの名詞の語頭以外にもスワヒリ語には存在する。もし 9/10 クラスの名詞の語頭以外の鼻音+有声阻害音を 1.2 節で述べたような理由で一つの音素とするのであれば、9/10 クラスの名詞接頭辞の付加の結果生じた鼻音+有声阻害音を一つの音素とみなしても問題はないだろう。

## 2.2 語頭の前鼻音化阻害音の形態音韻変化

ところで語頭の 9/10 クラスの名詞接頭辞と分析される鼻音については共時的にどのような形態音韻変化が考えられるだろうか。9/10 クラスの名詞接頭辞の異形態を先行研究 (Ashton 1947: 83-84, Polomé 1967: 68-70) に従いまとめると概ね (4) のようになる。

(4)  $n / \_ \text{vowel}$

e.g.)  $n$ -ama 「肉」,  $n$ -umba 「家」,  $n$ -ota 「星」,  $n$ -eupe 「白い(9/10 クラス)」,  $n$ -ingi 「多い(9/10 クラス)」

homorganic nasal /  $\_ \text{voiced obstruent}$

e.g.)  $m$ -buzi 「ヤギ」,  $m$ -βua 「雨」,  $n$ -dege 「鳥」,  $n$ -ziqe 「バッタ」,  $n$ -dzia 「道」,  $\eta$ -guo 「服」

[+aspirated]<sup>11</sup> /  $\_ \text{voiceless plosive}$

e.g.)  $p^h$ embe 「角」,  $t^h$ atu 「3 (9/10 クラス)」,  $k^h$ uku 「ニワトリ」

$\emptyset / \_ \text{elsewhere}$

e.g.) siku 「日」,  $\phi$ isi 「ハイエナ」,  $\eta$ ombe 「ウシ」

(4) をもとに考えると基底形に  $n$  という形態素をたて、その形態素が表層形においては母音の前ではそのままの形で、有声阻害音の前では逆行同化した鼻音で現れ、それ以外の前ではいったん付加されたのち削除される（ただし無声破裂音は有気音化される）と考えることができるだろう。

しかしながら、本稿では上述の共時的な形態音韻変化を認めないような考えを支持したい。その理由を次節で述べる。

## 2.3 9/10 クラスの名詞接頭辞の付加を共時的形態音韻変化として考える場合の問題点

Rzwuski (1975: 10) は  $n$ -jugu 「落花生」が  $m$ - $n$ -jugu 「落花生の草」に接辞交替せずに派生し

<sup>10</sup> 通言語的に前鼻音化入破音はみられない (Maddieson & Ladefoged 1993: 254)。

<sup>11</sup> 筆者のインフォーマントから得られたデータでは先行研究でいわれているような有気音と無気音の対立 ( $paa$  「屋根」:  $p^h$ aa 「ガゼル」,  $taa$  「灯り」:  $t^h$ aa 「エイ」,  $kamba$  「ロープ」:  $k^h$ amba 「エビ」) はなかった。これを踏まえると現代ザンジバル都市部方言では有気音を音素として立てるべきではないだろう。

## スワヒリ語の前鼻音化阻害音について

ていることを理由にスワヒリ語 9/10 クラスの名詞接頭辞は共時的分析では分離できないと述べている。Schadeberg (2009a: 90) も 9/10 クラスの名詞には共時的に分離できる名詞接頭辞がないと述べている。このように考えられるのであれば 9/10 クラスの名詞の語頭の鼻音と有声阻害音の間には共時的には形態素境界がないことになり、形態素境界があるから別の音素を立てるべきであるという主張は成立すらしなくなる。以下に 9/10 クラスの名詞接頭辞の付加を共時的な語形成とはせず、通時的变化の枠組みのなかで捉えるべきであると考えられる理由を二つ挙げる。

### 2.3.1 例外の存在

第一の理由としては (4) の変化に当てはまらない例の存在がある。(5) にその例を挙げる。なお括弧内には 9/10 クラスの名詞クラス接頭辞を仮に *j* としたうえで、接辞と語幹を分析した形式を示す。

- (5) a. *ndeɸu* (*j-reɸu*) 「長い(9/10 クラス)」
- b. *ndoa* (*j-oa*) 「結婚」
- c. *ɲɟema* (*j-ema*) 「良い(9/10 クラス)」
- d. *mbili* (*j-wili*) 「2 (9/10 クラス)」

まず (5a) では語幹の流音が 9/10 クラス接辞が付加されると有声破裂音に変化している。Polomé (1967: 69) は鼻音と流音が連続すると /nd/ となるとしている。仮にこの変化も含めた形態音韻変化の規則をたてたとしても (5b) は説明できない。*ndoa* 「結婚」という名詞は -*oa* 「結婚する」という動詞からの派生であることは容易に推察されるが、-*oa* の語頭には言わずもがな流音はない。スワヒリ語を含むサバキ語派の祖語の段階では -*oa* 「結婚する」に対して \**-lola* という形が再建されている (Nurse & Hinnebusch 1993: 101)。つまり *ndoa* についてはこの流音 *l* が保持されている時代に派生が起こったと考えるのが妥当であろう。同様のことは *ndoto* 「夢」についても言える。

(5c) の *ɲɟ* の由来についてははっきりとはわかっていない。サバキ語派<sup>12</sup>のコモロ語のマオレ方言<sup>13</sup>では /ngema~njema<sup>14</sup>/ という交替がみられる、サバキ語派の祖語の \**g* はスワヒリ語のミジケンダ方言<sup>15</sup>の *ɲɟ* に対応している、祖語の \**g* は多くの方言で失われているという事実 (Nurse & Hinnebusch 1993: 104-108) から通時的な変化については何らかの説明ができる可能性があるが、共時的に *ɲɟ* の出現を説明するのは非常に困難である。

(5d) の *b* の出現も不規則な変化である。基底形に *j* という形態素をたてた場合、スワヒリ語に *jw* という音連続は存在しており (eg. *jwele* 「髪」, - *kunwa* 「飲む」), \**jwili* という形

<sup>12</sup> スワヒリ語を含む東アフリカ沿岸部の近い系統関係にあるとされる 6 言語が属する言語グループ (Nurse & Hinnebusch 1993: 4)。

<sup>13</sup> マヨットで話される (Nurse & Hinnebusch 1993: 18)。

<sup>14</sup> ここでの表記法は Nurse & Hinnebusch (1993) に従う。/j/ は歯茎硬口蓋破擦音を表す。

<sup>15</sup> ケニアのマリンディからタンザニアのタンガで話される (Nurse & Hinnebusch 1993: 16-17)。

式が表層形において予想されうるが、このような語形では現れない。ちなみに語幹の-wiliの語頭のwはサバキ語派の祖語の両唇接近音\*Wに、更にこの\*Wはバントゥ祖語の\*bに対応しているとされる (Nurse & Hinnebusch 1993: 89-91)。このことから mbiliのbはバントゥ祖語の状態がそのまま保たれていることも可能性としてはある。

以上みてきたように 9/10 クラスの名詞接頭辞付加については (4) 以外の規則を立てなければ共時的変化として説明できない例、あるいはそもそも共時的変化としては説明が困難な例がある。

### 2.3.2 借用語<sup>16</sup>

Ashton (1947: 83) は 9/10 クラスには借用語も含まれるとしているが、挙げられている語 (*barua*「手紙」, *dawa*「薬」, *jinsi*「様子」, *daraja*「橋」; いずれもアラビア語由来) は名詞接頭辞が付加されていない<sup>17</sup>。ただし、借用語であれば総じて接辞が付加されていないかというところというわけではない。(6) に 9/10 クラスの名詞接頭辞が付加されたと考えられる借用語を挙げる。

(6) に挙げた語とは対照的に 19 世紀以降に入ってきたと考えられる英語からの借用語 (e.g. *baisikeli*「自転車」, *blanketi*「毛布」, *gazeti*「新聞」) にはこの 9/10 クラスの接頭辞は付加されていない。Nurse & Hinnebusch (1993: 355) はオマーンによる東アフリカ沿岸地域の支配が始まる 17 世紀以前までは 9/10 クラスに分類された借用語 (*ndama*「仔牛」, *ngamia*「ラクダ」) に名詞接頭辞が付加されていたと述べている。この指摘通りある時代以降 9/10 クラスの接辞付加が生産性を失っていたとすれば、9/10 クラスの名詞接頭辞が付加されている借用語とそうでない借用語があることは説明できる。こうした事実も 9/10 クラスの接辞付加が共時的に機能している語形成法とはいえない根拠になるだろう。

<sup>16</sup> 借用語かどうかの判断や、どの言語からの借用かについては Johnson (1939) や Schadeberg (2009b) による。

<sup>17</sup> 接頭辞が付加されないことから「外来語を受け入れるクラスとして開かれている (中島 2000: 51)」と言われることもある。

## スワヒリ語の前鼻音化阻害音について

### (6) 9/10 クラスの名詞接頭辞が付加されている借用語

語形	意味	借用元の言語	元の語形	借用年代
<i>mbatata</i>	ジャガイモ	ポルトガル語	<i>batata</i>	1500–1700
<i>mbuzi</i>	ヤギ	Hindi-Urdu 語 ペルシア語	<i>buz ~ būz</i> <i>buz</i>	-3000–1
<i>ndimu</i>	ライム	アラビア語 Hindi-Urdu 語 ペルシア語	<i>līm, laimū(n)</i> <i>līmū(n)</i> <i>līmū</i>	800–1940
<i>ngalawa</i>	カヌー	Hindi-Urdu 語 マレー語 (マラガシ語)	<i>gallawat</i> <i>gadawa</i> ( <i>ngadawa</i> )	800–1940
<i>ngamia</i>	ラクダ	アラビア語	<i>ǧamal</i>	700–800
<i>ngano</i>	小麦	Hindi-Urdu 語	<i>gandum</i>	800–1940

(Schadeberg 2009b に基づく)

### 2.4 成節的な鼻音について

9/10 クラスの名詞接頭辞は単音節語幹に前接した場合、ストレスを担う成節的な鼻音になる (Polomé 1967: 68, 69)。9/10 クラスの名詞接頭辞が成節的になるのはストレス担うためとも言われる (Batibo & Rottland 1992: 93)。2.3 節で述べたように 9/10 クラスの名詞の語頭に現れる鼻音をかつて生産的だった接頭辞の痕跡と考えるのであれば、単音節語幹に前接する鼻音が成節的である理由については二通りの可能性が考えられる。ひとつは通時的には他の 9/10 クラスの名詞接頭辞と同じく弱化しており、共時的には基底において多音節語幹に前接する場合と同様に非成節的であるが、強勢付与の要請から表層では成節的になっているという可能性である。もうひとつはかつては後続する語幹の音節数に関わらず成節的であった<sup>18</sup>9/10 クラスの名詞接頭辞が、単音節語幹に前接する場合のみ強勢を置かれたために弱化が進まなかったという可能性である<sup>19</sup>。後者の考え方では共時的な変化は想定されない。成節的鼻音が有聲阻害音だけでなく無声阻害音や鼻音の前でも現れることや、延長されているの

<sup>18</sup> Meinhof (1932: 39, 113-115) はバントゥ祖語 (Ur-Bantu) の 9 クラスの名詞接頭辞に \**ni-* という形式を再建して、スワヒリ語の 9/10 クラスの語頭鼻音はそこから変化したものとしている。筆者の調査しているザンジバル・ウングウジャ島南部のマクンドゥチ方言では動詞の完了形は [人称接頭辞-動詞語幹] という構造だが、1 人称の人称接頭辞 *ni-* は動詞語幹の最初の子音に調音点同化した鼻音と自由交替する。この際鼻音は成節性を保持している。こうしたことを踏まえると、9/10 クラスの名詞接頭辞が後続する子音に調音点が同化して成節性を保持していた段階を想定してもそれほど不自然ではないだろう。

<sup>19</sup> Marten (2002: 6) によってこの指摘はなされている。



が母音でなく鼻音であることを説明するためには後者の立場を採るのが妥当であろう<sup>20</sup>。以下 (7) に成節的な鼻音が現れる 9/10 クラスの語を挙げる。

- (7) m̩bu 「蚊」    m̩bwa 「犬」  
 mpja 「新しい (9 クラス)」  
 m̩βi 「白髪」    n̩ta 「蠟」  
 n̩ne 「4」    n̩zi 「蠅」  
 n̩tʃa 「先端」    n̩tʃi 「国」  
 n̩dʒe 「外」    n̩dʒe 「サソリ」

成節的鼻音は (3) の音素目録の鼻音 (m, n, ɲ, ŋ) の条件異音と考えられ、成節的になる条件は (8) のようになる。

- (8) m, n, ɲ, ŋ → [+syll] / \_ [+cons]<sup>21</sup>

なお鼻音の直後の有声破裂音の音価は筆者が確認したところ入破音 [b], [g] であったが、有声破擦音 [dʒ] は非入破音であった。本稿ではとりあえずこの[dʒ] を /f/ の条件異音 (/f/ → [dʒ] / [+nasal] \_) とする。なお前鼻音化阻害音を音素としてたてた場合この条件異音はこの語にのみ現れる。

## 2.5 共時的な接頭辞付加を認めない分析の問題点

2.3 節で 9/10 クラスの名詞接頭辞付加が共時的には生産性を失っているとしたが、この分析には問題点がある。名詞接頭辞が付加されるものの中には形容詞や 11 クラスの名詞の複数形にあたる 10 クラスの名詞のように接辞の交替によって屈折するものもある。この接辞付加を共時的に認めない場合、レキシコンに名詞、形容詞ともに接頭辞が付加された形で存在することになり、レキシコンに登録されている語の数は増えてしまう。

- (9) 9/10 クラスの形容詞の例
- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| mbaja (-baja) 「悪い」  | mbili (-wili) 「2」  |
| ndofo (-dofo) 「小さい」 | ngumu (-gumu) 「固い」 |
| nzuri (-zuri) 「良い」  | ndeφu(-reφu) 「長い」  |
| jeupe (-eupe) 「白い」  | ningi (-ingi) 「多い」 |

<sup>20</sup> ケニア南部の沿岸部で話されるチフンディ方言では鼻音は成節的ではなく母音が延長されている (Batibo 1985: 76-77)。またマクンドゥチ方言には多くの方言のもつ語の後ろから 2 番目の音節に強勢が置かれるという規則がないようであるが、(7) に対応する語の有声破裂音の前の鼻音部分は非成節的であり母音の延長もみられない。

<sup>21</sup> 1, 3 クラスの名詞接頭辞、動詞に前節する人称接辞、いくつかの動詞語幹 (e.g. -amka 「起きる」, -zungumza 「会話する」, -pumzika 「休む」, -chemka 「沸く」) の中に m̩ という成節的鼻音があるが、この規則を想定しても大きな問題はない。ただし/h/の前でも m̩は現れる。また借用語の中にはこの規則に当てはまらないものもある (e.g. benki 「銀行」 dansi 「ダンス」: いずれも英語からの借用語) が本稿では論考の対象としない。

## スワヒリ語の前鼻音化阻害音について

- (10) 10/11 クラスの名詞の例  
sg. u-limi : pl. n-dimi 「舌」  
sg. u-bawa : pl. m-bawa 「翼」

また 9/10 クラスの接頭辞の中には他の名詞接頭辞と交替する（かのようにみえる）ものもある。(11) では交替した接頭辞がそれぞれ指小辞、指大辞として機能している。(12) は接頭辞 *ma-* と交替する例である。通常単数形の 9 クラス名詞と複数形の 10 クラスの名詞は接頭辞が変わることなく同形であるが、接頭辞 *ma-* との交替によっても複数を表しうる。

- (11) *n-umba* 「建物、家」 : *ɸ-umba* 「小さい建物、部屋」 : *f-umba* 「大きい建物、邸宅」  
*n-degè* 「鳥」 : *ki-degè* 「小鳥」

- (12) *n-dizi* : *ma-dizi* 「バナナ」  
*n-dzia* : *ma-fia* 「道」  
*ŋ-guo* : *ma-guo* 「服」  
cf. *ŋombe* : *?ma-gombe* 「ウシ」

(9) (10) (11) (12) から 9/10 クラスの名詞に対する接辞付加は共時的にも機能しているようにみえる。2.3 節での議論に対して「名詞接頭辞付加はレキシコンの特定のグループ（例えば 18 世紀以後に借用された語以外）に適用される」「接頭辞付加は概ね生産的で不規則な変化をするものだけが接頭辞付加された形式でレキシコンに登録されている」という主張も成り立ちうる。

ところで (12) の複数を表す *ma-* との交替は一応容認されたが、それに加えてあまり一般的に使う表現ではないというコメントもインフォーマントから得られた。ちなみに *ŋombe* 「ウシ」の語頭の鼻音は通時的にみると 9/10 クラスの名詞接頭辞に由来すると言われるが<sup>22</sup> (Nurse & Hinnebusch 1993: 148)、この例での *ma-* との交替はとりわけ容認度が低かった。こうしたインフォーマントの直観を踏まえると、(12) の例の語頭の鼻音部分は共時的には分析的ではなく、(9) (10) (11) など接辞の交替によって形成される（ように少なくともみえる）語の類推から (12) の接辞の交替が起きていることが推測される。

また (10) の 11/10 クラスの名詞については辞書<sup>23</sup>の記述では 11 クラスと 10 クラスの間で単複の対を成しているとされながら、インフォーマントから得られたデータではそうならない例が散見される。

<sup>22</sup> 祖語の段階では *\*ŋombe* という再建形がたてられ、その変化については鼻音+有声破裂音に鼻音+子音（あるいは鼻音）が後続する場合に鼻音+有声破裂音が鼻音重複もしくは鼻音として実現するというマインホフの法則で説明される

<sup>23</sup> TUKI (2001) を参照した。

(13) 11 クラスと 10 クラスで単複の対を成していない例 (括弧内は辞書の記述)

sg. u-*baβu* : pl. mi-*baβu* (m-*baβu*<sup>24</sup>) 「脇」

sg. u-*bao* : pl. mi-*bao* (m-*bao*) 「板」

sg. u-*bale* : pl. βi-*bale* (m-*bale*) 「切れ端」

sg. u-*wanda* : pl. βi-*wanda* (n-*anda*) 「開けた場所、平原」

sg. u-*wandza* : pl. βi-*wandza* (n-*wandza*) 「広場、グラウンド」

sg. w-*imbo*/n-*imbo* (w-*imbo*) : pl. n-*imbo* 「歌」

sg. u-*φaǰio* : pl. mi-*φaǰio* (φaǰio) 「箒」

sg. u-*φunguo* : pl. φunguo/mi-*φunguo* 「鍵」

sg. *kuǰa* (u-*kuǰa*) : pl. *kuǰa* 「爪」

(13) のような例を踏まえると 11 クラスと 10 クラスの間の接辞の交替も生産性を失いつつあるように見える。指小辞・指大辞との交替も限定的であることは既に指摘されており (Ashton 1947: 295)、名詞接頭辞が付加される形容詞もその数は限られている<sup>25</sup> (Polomé 1967: 103)。

名詞接頭辞の付加が共時的に行われているのかどうかという問題の解決のためにはまず語幹が共通しており接頭辞の交替によって名詞クラス (と意味) が変わる語がどれだけあるのかを調べるべきである。仮に語幹が共通しており接頭辞の交替によって名詞クラス (と意味) が変わる語が膨大にあれば接頭辞付加が共時的に行われていることを検討する必要があるだろう。しかしながら上述のことを鑑みると 9/10 クラスの名詞接頭辞付加は仮に共時的に行われているとしても、一般的に考えられているよりも少ない可能性が高い。

### 3 語中の前鼻音化阻害音について

本節では語中の前鼻音化阻害音について簡単に述べる。Polomé (1967: 58) は語中の前鼻音化阻害音の直前に半長母音が現れるとしている。この観察の通りであれば母音の長さと同鼻音化阻害音の関連について Maddieson & Ladefoged (1993: 275-277) がスクマ語に対して行った<sup>26</sup>分析を用いて説明できるかもしれないが、筆者が聞いた限りでは前鼻音化阻害音に先行する母音とそれ以外の子音に先行する母音の間に差はみられなかった。母音の長さに対する正確な評価は音響分析でなされるべきであるが、あえて説明すべき事象が存在するとは考えにくい。(14) に筆者が母音長の聞き取りを行った語を挙げておく。一番左側に前鼻音化阻害音が含まれる語を、右側にそれと (疑似) 最小対を成す語を挙げる。なおすべての語について語単独ではなく、その語を含む文または句を発音してもらっている。詳細については付録

<sup>24</sup> なお *mbaβu*, *mbao* は語彙として存在しないわけではなく、それぞれ「肋骨」「材木」という意味になり、意味の分化が起こっているようである。

<sup>25</sup> Ashton (1947: 48-49) は 49 語を挙げ概ね網羅的としている。また Polomé (1967: 104) は 39 語を挙げている。

<sup>26</sup> 基底では鼻音がモーラと結びついており、派生の結果表層ではそのモーラが先行する母音と鼻音に割り当てられるという分析を行っている。

を参照されたい。

- (14) *ʃenza* 「みかん」 : *-ʃeza* 「遊ぶ」  
*-ɸumbua* 「開ける」 : *-ɸumua* 「ほどく」  
*kamba* 「ロープ」 : *-kaɸa* 「絞める」 : *-kama* 「しぼる」  
*kiumbe* 「被創造物」 : *kiume* 「男性」  
*kombe* 「二枚貝」 : *koɸe* 「陸ガメ」  
*-kuɸɔɗa* 「たたむ」 : *-kuɸa* 「来る」 : *-kuna* 「おろす」  
*-ponda* 「けなす」 : *-pona* 「治る」  
*ɸamba* 「畑」 : *ɸaɸa* 「銅」  
*-ɸinda* 「勝つ」 : *ɸida* 「困難」  
*-soɸgea* 「押す」 : *-soɸea* 「詰める」  
*-imba* 「歌う」 : *-iɸa* 「盗む」  
*-bembea* 「揺らす」 : *-beɸea* 「背負う」  
*ɸumba* 「家」 : *ɸuma* 「後ろ」  
*-ɸandikika* 「貼ってある」 : *-ɸanikika* 「閉じてある」  
*-ɸandua* 「剥がす」 : *-ɸanua* 「開ける」  
*-ɸaɸɔɗa* 「割る」 : *-ɸana* 「裂く」

#### 4 おわりに

これまでスワヒリ語の記述において前鼻音化阻害音を音素としてたてるのは一般的ではなかった。本稿では1節で [ɱɓ] と [mb] に対立があることと、音節構造を考慮した場合の記述の簡潔性を理由に前鼻音化阻害音を音素としてたてるべきであるという主張を行った。2節ではこれまで音素としてたてる障害のひとつとなっていた 9/10 クラスの名詞接頭辞について論じた。3節では語中の前鼻音化阻害音について先行研究での観察が不正確である可能性が高いことを述べた。

2.5 節で 9/10 クラスの名詞接頭辞付加が共時的に行われているかについて疑問を呈し、それを調べる必要性を述べたが、接頭辞付加が共時的な語形成法（あるいは語形変化）であるかどうかは 9/10 クラスに限らず他のクラスの名詞接頭辞も対象となる問題だろう。

## 付録

ここでは3節に挙げた語中に前鼻音化阻害音を含む語の前鼻音化阻害音の直前の母音の長さを調べるためにインフォーマントに発音してもらった文と句を挙げる。比較対象となる語は太字で示す。なお名詞と動詞を比較する場合は *ni-na* (一人称単数の所有表現「私は～を持っている」) *ni-na-* (一人称単数進行(現在)「私は～をしている」) をそれぞれ前接させて作例している。どちらの *nina* も強勢を置かれることなどなく音調上の違いはないと言える。文と句の表記はスワヒリ語の正書法の慣例に従う。

*ʃenza* 「みかん」 : *-ʃeza* 「遊ぶ」

*ni-na **chenza** kweli* (1SG-POSS mandarin orange really) 「私は本当にみかんをもっている」

*ni-na-**cheza** kweli* (1SG-PROG-play really) 「私は本当に遊んでいる」

*-ɸumbua* 「開ける」 : *-ɸumua* 「ほどく」

*ni-na-**fumbua** tu* (1SG-PROG-open just) 「私はあけているだけ」

*ni-na-**fumua** tu* (1SG-PROG-undo just) 「私はほどいているだけ」

*kamba* 「ロープ」 : *-kaba* 「絞める」 : *-kama* 「しぼる」

*ni-na **kamba** kidogo* (1SG-POSS rope a little) 「私はロープを少しもっている」

*ni-na-**kaba** kidogo* (1SG-PROG-choke) 「私は少し絞めている」

*ni-na-**kama** kidogo* (1SG-PROG-squeeze) 「私は少ししぼっている」

*kiumbe* 「被創造物」 : *kiume* 「男性」

***kiumbe** kidogo* (creature small) 「小さな存在」

***kiume** kidogo* (male small) 「小さな男性」

*kombe* 「二枚貝」 : *kobe* 「陸ガメ」

***kombe** kubwa* (shell big) 「大きな二枚貝」

***kobe** kubwa* (tortoise big) 「大きな陸ガメ」

*-kujɔɔza* 「たたむ」 : *-kujɔɔ* 「来る」 : *-kuna* 「おろす」

*na-**kunja** tena* (PROG<sup>27</sup>-fold again) 「(私は) 再びたたむ」

*na-**kujɔɔ** tena* (PROG-come again) 「(私は) 再び来る」

*na-**kuna** tena* (PROG-scratch again) 「(私は) 再びおろす」

*-ponda* 「すりつぶす」 : *-pona* 「治る」

*ni-na-**ponda** kiharaka* (1SG-PROG-pound hastily) 「私は急いですりつぶしている」

*ni-na-**pona** kiharaka* (1SG-PROG-recover hastily) 「私は急いで治る」

<sup>27</sup> *na-*という形態素は *n-a-* (1SG-PRS) と分析されるとも言われるが本稿では *na-*を単一の形態素とみなし、1人称単数の標識は省略されているものとする。

## スワヒリ語の前鼻音化阻害音について

ɟamba 「畑」 : ɟaba 「銅」

*hili ni shamba pana* (this COP field large) 「これは広い畑だ」

*hii ni shaba pana* (this COP metal flat) 「これは平たい金属だ」

-ɟinda 「勝つ」 : ɟida 「困難」

*ni-na-shinda kweli* (1SG-PROG-win really) 「私は本当に勝つ」

*ni-na shida kweli* (1SG-POSS really) 「私は本当に困難を抱えている」

-songea 「押す」 : -soɟea 「つめる」

*ni-na-songea kwa nguvu* (1SG-PROG-push by power) 「私は精一杯押している」

*ni-na-soɟea kwa nguvu* (1SG-PROG-move by power) 「私は精一杯つめている」

-imba 「歌う」 : -iɓa 「盗む」

*u-na-imba sana* (2SG-PROG-sing very much) 「あなたはすごく歌っている」

*u-na-iba sana* (2SG-PROG-steal very much) 「あなたはすごく盗む」

-ɓembea 「揺らす」 : -ɓeɓea 「背負う」

*ni-na-m-bembea kaka yangu* (1SG-PROG-3SG-swing brother my) 「私は兄をゆらしている」

*ni-na-m-bebea kaka yangu* (1SG-PROG-3SG-carry brother my) 「私は兄をおぶっている」

ɟumba 「家」 : ɟuma 「後ろ」

*nyumba yangu* (house my) 「私の家」

*nyuma yangu* (back my) 「私の後ろ」

-ɓandikika 「貼ってある」 : -ɓanikika 「閉じてある」

*i-me-bandikika karatasi* (G9-PRF-be stuck paper) 「紙が貼ってある」

*i-me-banikika karatasi* (G9-PRF-be closed paper) 「紙が閉じてある」

-ɓandua 「はがす」 : -ɓanua 「開く」

*ni-me-bandua karatasi* (1SG-PRF-tear paper) 「私は紙をはがした」

*ni-me-banua karatasi* (1SG-PRF-open paper) 「私は紙を開いた」

-ɟandza 「割る」 : -ɟana 「裂く」

*a-na-chanja kidogo* (3SG-PROG-break a little) 「彼は少し割った」

*a-na-chana kidogo* (3SG-PROG-split a little) 「彼は少し裂いた」

参考文献

- Ashton, E. O. (1947). *Swahili Grammar (2nd. ed.)*. London: Longman.
- Bakari, M. (1985). *The Morphophonology of the Kenyan Swahili Dialects*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Batibo, H. M., & Rottland, F. (1992). The minimality condition in Swahili word forms. *Afrikanistische Arbeitspapier*, 89-110.
- Contini-Morava, E. (1997). Swahili Phonology. In A. S. Kaye, *Phonologies of Asia and Africa* (pp. 841-860). Winona Lake, Ind: Eisenbrauns.
- Johnson, F. (1939). *A Standard Swahili-English Dictionary*. Nairobi: Oxford University Press.
- Maddieson, I., & Ladefoged, P. (1993). Phonetics of Partially Nasal Consonants. In M. K. Huggman, & R. A. Krakow, *Phonetics and Phonology* vol. 5: *Nasals, Nasalization, and the Velum* (pp. 251-301). San Diego: Academic Press.
- Marten, L. (2002). A lexical treatment for stem markers in Swahili. *Afrikanistische Arbeitspapiere: Swahili Forum IX*, 82-100.
- Meinhof, C. (1932). *Introduction to the Phonology of the Bantu Languages translated by N. J. van Waremelo*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Mohamed, M. A. (2001). *Modern Swahili Grammar*. Nairobi: East African Publishers.
- Myachina, E. N. (1981). *The Swahili Language translated by G.L. Campbell*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993). *Swahili and Sabaki: A Linguistic History*. Berkeley: University of California Press.
- Polomé, E. C. (1967). *Swahili Language Handbook*. Washington, DC: Center for Applied Linguistics.
- Rzewuski, E. (1975). Phonetic Structure of Swahili Nominal Roots. *Kiswahili*, Vol. 45/1, 10-15.
- Schadeberg, T. C. (2009a). Loanwords in Swahili. In M. Haspelmath, & U. Tadmor, *Loanwords in the World's Languages: A Comparative Handbook* (pp. 76-102). Berlin: Walter de Gruyter.
- (2009b). Swahili vocabulary. In M. Haspelmath, & U. Tadmor, *World Loanword Database*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology.  
(URL: <http://wold.livingsources.org/vocabulary/1>, Accessed on 2014-02-11.)
- Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili. (TUKI). (2001). *Kamusi ya Kiswahili-Kiingereza*. Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili (TUKI).
- Welmers, W. E. (1973). *African Language Structures*. Berkeley: University of California Press.
- 中島久 (2000) 『スワヒリ語文法』 東京: 大学書林.

謝辞

本稿執筆に際して有益なコメントをくださった仲尾周一郎氏、京都大学言語学研究室の先生方や学生の皆様、また調査に協力してくれたザンジバルストーンタウンの友人に感謝いたします。

# コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロークと音素配列 -自由形態素を中心に-

宮川 創

京都大学

## 1. はじめに

コプト・エジプト語<sup>1</sup>サイド方言<sup>2</sup>のスペリングにおけるスープリニアーストローク（以下、SS と略す）は、Worrel (1933) 以来、成節子音を表す記号であるとみなされ、近年の参照文法（Layton 2002）でもこの解釈が採用されている。しかしながら、この説は、音韻論的検証は十分になされていない。そこで、本論文は、この「SS=成節子音」説を音韻論的に検証することを目的とする。

## 2. 書記素と音素目録

サイド方言は、コプト文字をもちいて書かれた。サイド方言で用いられるコプト文字は、24 文字のギリシア文字由来の文字と 6 文字の民衆文字由来の文字を組み合わせる音素文字である。音素文字であるため、基本的には、実際の音素と文字が対応していると考えられる。本研究は紀元後 3-4 世紀ころのコプト語サイド方言を対象とする。この時期のコプト語は、コプト文字が使われだした時期に比較的近く、大幅な音変化は被っていないと思われる。以下で、コプト語サイド方言の本来語<sup>3</sup>の書記体系と音素体系、推定音価との関係を表す。

---

<sup>1</sup> コプト語と略称される。この言語は、系統的には、アフロ・アジア語族エジプト語派に属するエジプト語の歴史的最終段階である。エジプト語史は、概略すると、古エジプト語>中エジプト語>新エジプト語>民衆文字エジプト語>コプト・エジプト語（コプト語）となる。コプト語は、20 世紀のクラウディオス・ラビーブ（イクラディユース・ラビーブ）を端緒とする言語復興運動の中で育った「母語話者」とされる者がエジプトに数人いることを除けば、現代では死語であるが、コプト・キリスト教会の典礼言語として用いられ学ばれている。

<sup>2</sup> コプト・エジプト語の一方方言である。サイド方言の文献は主に紀元後 3 世紀から 14 世紀の間、残されている。他の方言には、ボハイラ方言、ファイユーム方言、オクシュリンコス方言、リュコポリス方言、アクミーム方言などがある。サイド方言は、紀元後 3 世紀から 9 世紀の間、コプト語における「標準語」としての言語社会的役割を果たした。そのため、コプト語諸方言の中でも、文献がより多く残されている。

<sup>3</sup> ギリシア語借用語については、コプト語本来語にない、発音の規則がいくつかある。本研究は、ギリシア語借用語については、対象としないため、ここでは省略する。



## (1) 子音字

無声破裂音:	π <p> <sup>4</sup> /p/ *[p]	τ <t> /t/ *[t]	κ <k> /k/ *[k]
口蓋化破裂音:	χ <ć> /tj/ *[tʃ]	σ <c> /kʲ/ *[kʲ]	
有声破裂音 <sup>5</sup> :	Δ <d> /d/ *[d]	Γ <g> /d/ *[g]	
無声摩擦音:	φ <f> /f/ *[f]	ς <s> /s/ *[s]	ψ <š> /ʃ/ *[ʃ]      Ϸ <h> /h/ *[h]
有声摩擦音:	β <b> /β/ *[β]	ζ <z> /z/ *[z]	
鼻音:	μ <m> /m/ *[m]	ν <n> /n/ *[n]	
側面接近音:	λ <l> /l/ *[l]		
震え音 <sup>6</sup> :	ρ <r> /r/ *[r]?		

## (2) 母音字

無強勢母音:	ε <e> /ə/ *[ə], α <a> /e/ *[e]
強勢弛緩母音:	ε <e> /ε/ *[ε], α <a> /α/ *[α], ο <o> /ɔ/ *[ɔ]
強勢緊張母音 <sup>7</sup> :	ι <i> /i/ *[i], ει <ei> /i/ *[i], η <ê> /e/ *[e], ω <ô> /o/ *[o] οΥ <ou> /u/ *[u]

## (3) 母音字の特殊な読み方

母音+声門閉鎖音:	vv <sup>8</sup> <vv> /vʔ/ *[vʔ(ə)], v <# <sup>9</sup> v> /ʔv/ *[ʔv]
半母音:	ι <i> /j/ *[j], ει <ei> /j/ *[j], οΥ <ou> /w/ *[w], Υ <u> /w/ *[w]

## 3. スープリニアーストロークについて

本稿が問題とするスープリニアーストローク (SS) は文字の上に置かれる線である。この線がふさされるのは、大別すると、聖名 (Sacra Nomina) などの省略がなされる場合 (ϛϛ = ιησους 「イエス (・キリスト)」など) と子音字の上につく場合である<sup>10</sup>。本稿では、子音字の上に置かれる場合を問題にする。なお、SS が母音字につく文献もあるが、3世紀前

<sup>4</sup> <>は書記素表記, //は音素表記, []は音声表記である。\*は推定音であることを表す。

<sup>5</sup> 主に、ギリシア語借用語にみられ、コプト語本来語には、少ない。

<sup>6</sup> ふるえ音以外である可能性もある。

<sup>7</sup> 緊張母音の代わりに、長母音であるとする捉え方もある。(Loprieno 1995: 46) 本稿は、Allen (2013) の緊張母音であるとする説を採用している。

<sup>8</sup> vは母音字, <v>は母音字素, /v/は母音音素, [v]は母音を表す。

<sup>9</sup> #は語頭を表す。

<sup>10</sup> Ϸⲙⲉⲗⲗのように、機能が不明なものもある。

## コプト・エジプト語サイド方言のスプリングにおける スープリニーストロークと音素配列

後の「ナグ・ハマディ写本」など、主なテキストは、たいていは子音字1字につく<sup>11</sup>。本稿は、この3世紀前後のコプト語サイド方言の書記法を対象とする。

SSが成節子音を表すとした最初の研究は Worrell (1933) である。彼は、イエスペルセンの成節子音の概念をあげ、ϣⲁⲛⲓ <sapR> = *šabr* (vernacular Arabic) など、コプト文字で書かれたアラビア語単語の例から SS が成節子音 (syllabic consonant) をあらわすということを示唆している。しかし、彼の場合、モーラと音節との区別がついていないなど、現代の音韻論からみれば、かなり問題がある。

「SS=成節子音」説をコプト語サイド方言固有の単語にあてはめると、音節の区切りと子音音素体系を最もミニマルかつ体系的に解釈できることを示したのが、Depuydt (1993) である。Depuydt (1993) の解釈は、コプト語サイド方言のリファレンスグラマーである Layton (2002) によって採用されている。彼の理論はエレガントであるが、SS が音節子音を表す証拠については十分に提示されていない。

成節子音とみる見方に対して、SS がついた子音字を読むときは、前後に schwa を挿入すると考える Loprieno (1995) などの解釈も存在する。しかしながら、Beltzung & Patin (2007: 1-2) の言うように、ドイツ語の *sagen* [za:gən] ≈ [za:gŋ] (Siebs 1961, cited in Clark & Yallop 1995: 68; Beltzung & Patin 2007:2), 英語の *sudden* [sʌdən] ≈ [sʌdŋ] (Clark & Yallop 1995: 68; Beltzung & Patin 2007:2) など、ç と əc は多くの言語で free variation であり、この場合、əc は音声実現の結果であって、音韻レベルでは ç であると解釈するほうが少ない音素での解釈が可能になる<sup>12</sup>。このように、音韻レベルでは成節子音であるが、音声レベルでは成節子音の前後に「支え」の schwa が入ることはできる、とすれば「SS=成節子音」説と「SS=schwa 挿入」説の2つの解釈を統合する事ができる。そのため、本稿はこの統合的立場をとる。

### 4. 音韻論的分析<sup>13</sup>

サイド方言の辞書である、Smith (1999) の *Coptic-English Concise Dictionary* (2nd ed.) から、SS が付されている単語を抽出し、どの字の上にその SS が付されているか調べた。Smith (1999) は、「ナグ・ハマディ写本群 (Nag Hammadi Codices)」を讀解するための辞書である、そのため、方言は、3世紀前後のサイド方言が主である。中には、いくつかのリュコポリス方言形も記載されているが、それは[ ]で辞書編集者自ら示されている。今回の調査では、リュコポリス方言は分析対象からはずした。対象とする単語は、接語や接辞を除く自由形態素のみを抽出した。なお、動詞は、基本形のみを対象にした。そのほか、複合語は対象に入れなかった。

<sup>11</sup> 写本上、ϣⲱⲧⲛⲓのように、SS が伸ばされて隣接する子音字の上に来ているものもある。この例の場合は、ϣⲱⲧⲛⲓであると解釈される。

<sup>12</sup> 筆者が知る限り、現代東アルメニア語など、free variation の schwa を書かない音素文字体系も存在する (Dum-Tragut 2009: 30ff)。

<sup>13</sup> 以下、SS 付き子音の翻字をラテン文字の大文字で表す。ex. ⲛ = M, ⲙ = m。

## 宮川創

抽出した単語を音素表記にし、それぞれの音素をその音素が対応するソノリティの値に書き換え、SS が付された子音字が、ソノリティのピークに合致しているか調べた。一般には、音節核は、ソノリティのピークにあると考えられ、それが子音の場合、その子音は成節子音とされる<sup>14</sup>。

以下の(4)は、本稿が採用したソノリティ値とそれに対応する子音音素である。

(4)

ソノリティ値	1	2	3	4	5	6	7
音素	/t/, /p/, /k/, /ʔ/, /kʰ/, /tʰ/	/d/, /g/	/f/, /s/, /ʃ/, /h/	/β/, /z/	/m/, /n/, /r/, /l/	/w/, /j/	/i/, /e/, /ɛ/, /e/, /ə/, /ɑ/, /ɔ/, /o/, /u/

(5)-(7)は、SS が付された文字に対応する音素がソノリティピークであったパターンである。これらの語は、全体の 171 語のうち、114 語、パーセンテージになおすと約 67%を占めた。

(5) 語末のソノリティピークの子音に SS がくるパターン

a. vcC#のパターン

No.	コプト文字	意味	翻字	音素表記	ソノリティ値
1.	ⲱⲟⲙ̄	extinguish	<ôšM>	/'ʔo.fɱ/	#17\$35#
2.	ⲱⲁ̄	stop	<ôčN>	/'ʔo.tʰɳ/	#17\$25#
3.	ⲉⲓⲧ̄	ground	<eitN>	/'ʔi.tɳ/	#17\$15#
4.	ⲱⲕ̄	be gloomy	<ôkm>	/'ʔo.kɱ/	#17\$15#
5.	ⲱⲟ̄	be cold	<ôcB>	/'ʔo.kʰβ/	#17\$14#
6.	ⲛⲟⲩ̄	be saved	<nouhM>	/'nu.hɱ/	#57\$35#
7.	ⲟⲩⲱ̄	knead	<ouôšM>	/'wo.sɱ/	#67\$35#
8.	ⲟⲩⲱ̄	repeat	<ouôhM>	/'wo.hɱ/	#67\$35#
9.	ⲛⲟⲩ̄	yoke	<nouhB>	/'nu.hβ/	#57\$34#
10.	ⲱⲟ̄	sweep	<sohR>	/'so.hʀ/	#37\$35#

<sup>14</sup> Goldsmith (2011) はこの立場を、”sonority view”と呼んでいる。

コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーstrokeと音素配列

11.	ⲛⲟϥⲗⲃ̄	copulate	<nouhB>	/'nu.hβ/	#57\$34#
12.	ⲟϥⲱⲗⲃ̄	answer	<ouôsb>	/'wo.hβ/	#67\$34#
13.	ⲛⲟϥⲧ̄ⲛ̄	rest	<moutN>	/'mu.t̄ɲ/	#57\$15#
14.	ⲛⲟϥⲧ̄ⲛ̄	be sweet	<noutM>	/'nu.t̄ɲ/	#57\$15#
15.	ⲗⲁⲕⲛ̄	piece	<lakM>	/'la.k̄ɲ/	#57\$15#
16.	ⲟϥⲱⲧ̄ⲛ̄	change	<ouôtN>	/'wo.t̄ɲ/	#67\$15#
17.	ⲟϥⲱⲧ̄ⲃ̄	pour	<ouôtB>	/'wo.t̄β/	#67\$14#
18.	ⲭⲟⲗ̄ⲛ̄	be unclean	<čohM>	/'t̄ɔ̄.h̄ɲ/	#37\$35#
19.	ⲥⲱⲗ̄ⲡ̄	sweep	<sôhR>	/'so.h̄ɲ/	#37\$35#
20.	ⲥⲱⲡ̄ⲛ̄	be faint	<sôšM>	/'so.ʃ̄ɲ/	#37\$35#
21.	ⲡ̄ⲱⲥ̄ⲛ̄	be faint	<šôsM>	/'ʃo.s̄ɲ/	#37\$35#
22.	ⲗⲟⲥ̄ⲃ̄	market	<hosB>	/'ho.s̄β/	#37\$34#
23.	ⲡ̄ⲱⲗ̄ⲃ̄	be withered	<šôhB>	/'ʃo.h̄β/	#37\$34#
24.	ⲗⲟⲕ̄ⲛ̄	wither	<hôkM>	/'ho.k̄ɲ/	#37\$15#
25.	ⲗⲟⲧ̄ⲡ̄	be joined	<hôtR>	/'ho.t̄ɲ/	#37\$15#
26.	ⲭⲟⲕ̄ⲛ̄	wash	<čôkM>	/'t̄ɔ̄.k̄ɲ/	#17\$15#
27.	ⲭⲟⲕ̄ⲡ̄	salt	<čôkR>	/'t̄ɔ̄.k̄ɲ/	#17\$15#
28.	ⲥⲟⲥ̄ⲛ̄	ointment	<socN>	/'so.k̄ɲ/	#37\$15#
29.	ⲥⲱⲧ̄ⲛ̄	hear	<sôtM>	/'so.t̄ɲ/	#37\$15#
30.	ⲥⲱⲧ̄ⲡ̄	be turned	<sôtR>	/'so.t̄ɲ/	#37\$15#
31.	ⲡ̄ⲱⲧ̄ⲛ̄	shut	<šotM>	/'ʃɔ̄.t̄ɲ/	#37\$15#
32.	ⲗⲟⲥ̄ⲃ̄	wither	<hôcB>	/'ho.t̄β/	#37\$14#
33.	ⲗⲟⲥ̄ⲃ̄	be cold	<hôcB>	/'ho.t̄β/	#37\$14#
34.	ⲗⲟⲧ̄ⲃ̄	murder	<hôtB>	/'ho.t̄β/	#37\$14#
35.	ⲡ̄ⲱⲧ̄ⲃ̄	muzzle	<šôtB>	/'ʃo.t̄β/	#37\$14#
36.	ⲥⲟⲥ̄ⲛ̄	storm	<cosM>	/'k̄ɔ̄.s̄ɲ/	#17\$35#
37.	ⲡ̄ⲱⲡ̄ⲛ̄	serve	<pôšN>	/'po.ʃ̄ɲ/	#17\$35#
38.	ⲧⲱⲗ̄ⲛ̄	knock	<tôhM>	/'to.h̄ɲ/	#17\$35#
39.	ⲧⲁⲡ̄ⲛ̄	cumin	<tapN>	/'ta.p̄ɲ/	#17\$15#
40.	ⲧⲱⲥ̄ⲛ̄	repel	<tôcN>	/'to.k̄ɲ/	#17\$15#
41.	ⲧⲱⲕ̄ⲛ̄	pluck	<tôkM>	/'to.k̄ɲ/	#17\$15#
42.	ⲥⲱⲭ̄ⲃ̄	be small	<côčB>	/'k̄ɔ̄.t̄ɲ/	#17\$14#
43.	ⲗⲟⲥ̄ⲃ̄	kill	<hôsB>	/'ho.s̄β/	#37\$34#
44.	ⲟϥⲱⲧ̄ⲃ̄	change	<ouôtB>	/'wo.t̄β/	#67\$14#
45.	ⲗⲟⲕ̄ⲛ̄	wither	<hôkM>	/'ho.k̄ɲ/	#37\$15#

## b. vccC#のパターン

1.	βολβλ	dig up	<bolbL>	/βɔl.βl/	#475\$45#
2.	ροογτ̄ñ	road	<hooutN>	/hɔw.t̄n/	#376\$15#
3.	σοογτ̄ñ	be straight	<sooutN>	/sɔw.t̄n/	#376\$15#
4.	φορφ̄p̄	upset	<šoršR>	/ʃɔr.ʃr/	#375\$35#
5.	χογτ̄ñ	headlog	<čoftN>	/t̄ɔf.t̄n/	#373\$15#
6.	χολχλ	fence	<čolčL>	/t̄ɔl.t̄l/	#275\$15#
7.	τηγτ̄ñ	you pl. obj. <sup>15</sup>	<têutN>	/tew.t̄n/	#176\$15#
8.	σoмσ̄ñ	touch	<comcM>	/k'ɔm.k'ɪ̃/	#175\$15#
9.	τοнт̄ñ	be like	<tontN>	/tɔn.t̄n/	#175\$15#
10.	товт̄b̄	form	<tobtB>	/tɔβ.t̄β/	#174\$14#
11.	ογoστ̄ñ	broaden	<ouostN>	/wɔs.t̄n/	#673\$15#
12.	γτοmt̄ñ	be darkened	<htomtM>	/htɔm.t̄m/	#3175\$15# <sup>16</sup>
13.	εβορβ̄p̄	push	<hborbR>	/hβɔr.βr/	#3475\$45#
14.	ελοστ̄ñ	mist	<hlostN>	/hlɔs.t̄n/	#3573\$15#
15.	φτορτ̄p̄	disturb	<štortR>	/ftɔr.t̄r/	#3175\$15#

## (6) 第一音節のソノリティピークの子音に SS がくるパターン

## a. #Ccv のパターン

1.	ḗβε	enclosure	<Rbe>	/r.'βe/	#5\$47#
2.	λ̄εηη	roar	<Lhêm>	/l.'hem/	#5\$375#
3.	ḗφoη	cloak	<Ršon>	/r.'ʃɔn/	#5\$375#
4.	λ̄εoβ	steam	<Lhôb>	/l.'hoβ/	#5\$374#
5.	ḗγιτ	north	<Mhit>	/m.'hit/	#5\$371#
6.	ḗφoτ	be hard	<Nšot>	/n.'ʃɔt/	#5\$371#
7.	ḗγaαγ	tomb	<Mhaau>	/m.'ha.ʔw/	#5\$37\$16#
8.	ḗσo	animal pen	<Rsô>	/r.'so/	#5\$37#
9.	ḗτοoγ	they	<Ntoou>	/n.'tɔw/	#5\$176#
10.	ḗτοoγη	then	<Ntooun>	/n.'tɔwn/ <sup>17</sup>	#5\$1765#
11.	ḗτεγnoγ	immediately	<Nteunou>	/n.təw.'nu/	#5\$175\$57#

<sup>15</sup> 他の人称「接尾辞」は拘束形態素だが、この辞書では、2人称複数形のみ、自由形態素として扱われている。これは、2人称複数形の接尾辞は、他の人称にはないふるまいをするからである。

<sup>16</sup> 英語の stink #31751#のように、初頭の子音でソノリティピークが形成されているが、初頭の無声摩擦音+無声閉鎖音の組み合わせでは、初頭の無声摩擦音は成節的とはされない場合が多い。

<sup>17</sup> 最大頭子音制約から考えれば、<NtoouN> /n.'tɔ.wɪ/になってもおかしくはない。

コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーstrokeと音素配列

12.	ḿκαε	be painful	<Mkah>	/ḿ.'kah/	#5\$173#
13.	ḿτοφ	he	<Ntof>	/ḿ.'tɔf/	#5\$173#
14.	ḿτοσ	she	<Ntos>	/ḿ.'tɔs/	#5\$173#
15.	ḿκοτκ	sleep	<Nkotk>	/ḿ.'kɔtk/	#5\$1711#
16.	ḿτοκ	you.sing.masc.	<Ntok>	/ḿ.'tɔk/	#5\$171#
17.	ḿτησ	plant	<Ntêc>	/ḿ.'tek <sup>i</sup> /	#5\$171#
18.	ḿτωτḿ <sup>18</sup>	you pl.	<NtôtN>	/ḿ.'to.tḿ/	#5\$17\$15#
19.	ḿπο	mute	<Mpo>	/ḿ.'pɔ/	#5\$17#
20.	ḿτο	presence	<Mto>	/ḿ.'tɔ/	#5\$17#
21.	ḿτω	depth	<Mtô>	/ḿ.'to/	#5\$17#
22.	ḿκα	thing	<Nka>	/ḿ.'ka/	#5\$17#
23.	ḿτο	sing., fem. you	<Nto>	/ḿ.'tɔ/	#5\$17#
24.	ḿπε	temple	<Rpe>	/ḿ.'pe/	#5\$17#
25.	ḿτον	be at rest	<Mton>	/ḿ.'tɔn/	#5\$175#
26.	ḿφε	forgetfulness	<Bše>	/β <sup>i</sup> 'fe/	#4\$37#

b. #Cccv#のパターン

1.	ḿκφα	sneer	<Lkša>	/l <sup>i</sup> 'kfa/	#5\$137#
2.	ḿθε	like	<Nthe>	/ḿ.'the/	#5\$137#

c. #cCcv#のパターン

1.	ḿβιλε	kernel	<bLbile>	/βl <sup>i</sup> .'bilɛ/	#45\$47\$57#
2.	ḿλχε	pottery	<bLče>	/βl <sup>i</sup> .'tʃɛ/	#45\$17#
3.	ḿḿωτ	staff	<hRbôt>	/hḿ.'βot/	#35\$471#
4.	ḿḿαλ	servant	<hMhal>	/hḿ.'hal/	#35\$375#
5.	ḿλχο	lukewarm water	<sLho>	/sl <sup>i</sup> .'hɔ/	#35\$37#
6.	ḿḿε	be at leisure	<sRfe>	/sḿ.'fe/	#35\$37#
7.	ḿḿε	serve	<šMše>	/ʃḿ.'fe/	#35\$37#
8.	ḿḿε	navel	<hLpe>	/hl <sup>i</sup> 'pe/	#35\$17#
9.	ḿλσομ	mustard	<šLcom>	/ʃl <sup>i</sup> .'k <sup>i</sup> ɔm/	#35\$175#
10.	ḿḿτω	linen robe	<šNtô>	/ʃḿ.'to/	#35\$17#
11.	ḿḿχο	set on fire	<tMho>	/tḿ.'hɔ/	#15\$37#
12.	ḿḿτε	fig	<kNte>	/kḿ.'te/	#15\$17#
13.	ḿλσε	torn cloth	<pLce>	/pl <sup>i</sup> .'k <sup>i</sup> ɛ/	#15\$17#

<sup>18</sup> vcC#のパターンにも入れることができるが、煩雑さを避けるため、ここだけにおいておく。

## d. #cCc#のパターン

1.	χ̄nc	spike of wheat	<hMs>	/h̄ms/	#353#
2.	φ̄nc	linen	<šNs>	/f̄ns/	#353#
3.	φ̄nt	worm	<fNt>	/f̄nt/	#351#
4.	τ̄bt	fish	<tBt>	/t̄βt/	#141#
5.	τ̄nh	wing	<tNh>	/t̄nh/	#153#

## e. #ccCcv#のパターン

1.	θ̄ncō	seat	<thMso>	/th̄m.'sō/	#135\$37#
2.	θ̄nko	afflict	<thMko>	/th̄m.'kō/	#135\$17#
3.	τ̄cñko	breast-feed	<tsNko>	/ts̄n.'kō/	#135\$17#
4.	τ̄cβko	reduce	<tsVko>	/ts̄β.'kō/	#134\$17#

## (7) 第一音節および語末のソノリティピークの子音にSSがくるパターン

## a. #cCcC#のパターン

1.	β̄p̄β̄p̄	boil	<bRbR>	/β̄r.β̄r/	#45\$45#
2.	τ̄λ̄τ̄λ̄	drip	<tLtL>	/t̄l.t̄l/	#15\$15#
3.	χ̄m̄χ̄m̄	roar	<hMhM>	/h̄m̄.h̄m̄/	#35\$35#
4.	c̄ñc̄ñ	resound	<sNsN>	/s̄n̄.s̄n̄/	#35\$35#

ここまでは、SSとソノリティピークの子音が一致する例をみてきた。次に、SSとソノリティピークが合致しない例をみていく。これらの例は、i) ソノリティピークに同じソノリティの子音音素の連続 ('sonority plateau')ができ当該の子音音素がその sonority plateau に入るとき、ii) sonority plateau にもその子音音素が入らないとき、の2つに分けられる。i)は p̄r̄h̄ε /rmhε/, ii)は τ̄β̄β̄o /tββo/のような場合である。

これらの語では、SSとソノリティピークは一致していない。しかしながら、①一音節内に非成節的な/m, n, β, l, r/が連続してはならぬとする制約 >> ②初頭音節以外の音節は、頭子音を1つ持たなければならない制約 >> ③ソノリティピークは音節核を形成する制約、という制約ランキングで音節を考えると、少数を除きうまく説明できる。この制約ランキング以外のランキングは、説明できない例がより多くなる。なお、この制約群と制約ランキングは、いままでみてきた(5)-(7)の例にもすべて適合するため、ここで導入しても問題はない。

## コプト・エジプト語サイド方言のスプリングにおける スープリニアーストロークと音素配列

たとえば, ἀμῆντε /ʔemnte/ を考えてみる. ʔe.mnte や ʔemn.te とすれば①に違反し, ʔem.nte とすれば①には適合であるが, ②に違反する. ʔe.m̄n.te とすれば, ③には違反するが, それよりも制約ランキングの高い①と②には違反せず, 最適解となる.

これを, 最適性理論 (Prince & Smolensky 1993) で用いられるタブローで示すと(8)のようになる.

### (8) ἀμῆντε のタブロー<sup>19</sup>

	①	②	③
ʔe.mnte	*!		*
ʔemn.te	*!		
ʔem.nte		*!	
☞ ʔe.m̄n.te			*

(制約ランキング・・・①一音節内に非成節的な/j, w, m, n, β, l, r/が連続してはならならぬとする制約 >> ②初頭音節以外の音節は, 頭子音を1つ持たなければならないとする制約 >> ③ソノリティピークは音節核を形成するとする制約)

この制約群と制約ランキングで説明できる例は, ソノリティピークとSSが一致しない例57語のうち, 50語であり, パーセンテージで示すと, 約88パーセントである

### (9) 第一音節にSSがくるパターン

#### a. #Ccv のパターン

1.	ῥρητ	vow	<Rrêt>	/r̄.'ret/	#5\$571#
2.	ῥρο	king	<Rro>	/r̄.'rɔ/	#5\$57#
3.	ῖμον	truly	<Mmon>	/m̄.'mɔn/	#5\$575#
4.	λληβ	ridicule	<Llêb>	/l̄.'leβ/	#5\$574#
5.	ῖρις	new wine	<Mris>	/m̄.'ris/	#5\$573#
6.	ῖλαρ	battle	<Mlah>	/m̄.'lah/	#5\$573#
7.	ῖνοϋτ	doorman	<Mnout>	/m̄.'nut/	#5\$571#
8.	ῖρω	harbor	<Mrô>	/m̄.'ro/	#5\$57#
9.	ῖρα	seed	<Bra>	/β̄.'ra/	#4\$57#
10.	ῖλααϋ	tomb	<Mlaau>	/m̄.'la.ʔu/	#5\$57\$17#

<sup>19</sup> 入力/ʔemnte/に対する出力は, ☞で示される. \*は制約違反を, !は重大な制約違反を示す.



宮川創

b. #cCcvのパターン

1.	ρ̄ḡε	free person	<rMhe>	/r̄m̄.'hε/	#55\$37#
2.	κ̄ñνε	be fat	<kNne>	/k̄ñ.'nε/	#15\$57#
3.	χ̄ββε	plow	<hBbe>	/h̄β̄.'βε/	#34\$47#
4.	τ̄ñνοοϋ	send	<tNnoou>	/t̄ñ.'nɔw/	#15\$576#
5.	τ̄ñμο	feed	<tMmo>	/t̄ñ.'mɔ/	#15\$57#
6.	χ̄ββεσ	coal	<čBbes>	/t̄'β̄.'βεs/	#14\$473#
7.	τ̄ββο	cleanse	<tBbo>	/t̄β̄.'βɔ/	#14\$47#
8.	τ̄ñνο	pound	<tNno>	/t̄ñ.'nɔ/	#15\$57#
9.	σ̄λμαϊ	jar	<cLmai>	/k̄l̄.'mai/	#15\$576#
10.	κ̄ρ̄μεσ	ash	<kRmes>	/k̄r̄.'mεs/	#15\$573#
11.	ανσ̄ḡμε	ordinance	<ansMme>	/ʔen.s̄m̄.'mε/	#175\$35\$57#
12.	ρ̄ḡμαν	pomegranate	<hRman>	/h̄r̄.'man/	#35\$575#
13.	τ̄β̄νη	farm animal	<tBnê>	/t̄β̄.'ne/	#14\$57#
14.	β̄ñνε	date palm	<bNne>	/β̄ñ.'nε/	#45\$57#
15.	β̄λλε	blind person	<bLle>	/β̄l̄.'lε/	#45\$57#
16.	β̄ρ̄ρε	new	<bRre>	/β̄r̄.'rε/	#45\$57#
17.	σ̄ḡμε	appeal	<sMme>	/s̄m̄.'mε/	#35\$57#
18.	σ̄ββε	be weak	<cBbe>	/k̄'β̄.'βε/	#14\$47#
19.	κ̄λλε	bolt	<kLle>	/k̄l̄.'lε/	#15\$57#
20.	χ̄ββε	plow	<hBbe>	/h̄β̄.'βε/	#34\$47#
21.	χ̄λλο	old man	<hLlo>	/h̄l̄.'lɔ/	#35\$57#
22.	τ̄ρ̄ρε	be afraid	<tRre>	/t̄r̄.'rε/	#15\$57#

c. #cCccv#のパターン

1.	η̄ñτρε	witness	<ñNtre>	/m̄ñt̄.'rε/	#551\$57#
----	--------	---------	---------	-------------	-----------

d. #ccCccv#のパターン

2.	τ̄χ̄β̄βιο	humiliate	<thBbio>	/th̄β̄.'βjɔ/	#134\$467#
----	-----------	-----------	----------	--------------	------------

(10) 語中音節に SS がくるパターン

1.	αν̄ñτε	hell	<amNte>	/ʔe.m̄ñ'tε/	#7\$55\$17#
----	--------	------	---------	-------------	-------------

(11) 語末音節に SS がくるパターン

a. vcC#のパターン

1.	εῑωρ̄ḡ	stare	<eīô̄rM>	/'jo.r̄m̄/	#67\$55#
----	---------	-------	-----------	------------	----------

コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーstrokeと音素配列

2.	ϥⲱⲣⲙ̄	get lost	<sôrM>	/ˈso.r̄m̄/	#37\$55#
3.	ϣⲱⲗⲙ̄	smell	<šôlM>	/ˈʃo.l̄m̄/	#37\$55#
4.	ⲱⲗⲙ̄	embrace	<ôlM>	/ˈʔo.l̄m̄/	#17\$55#
5.	ϫⲱⲣⲙ̄	point	<čôrM>	/ˈt̄o.r̄m̄/	#17\$55#
6.	ϫⲱⲣⲙ̄	drive	<čôrM>	/ˈt̄o.r̄m̄/	#17\$55#
7.	ⲧⲱⲗⲙ̄	be dirty	<tôlM>	/ˈto.l̄m̄/	#17\$55#
8.	ϩⲱⲣⲃ̄	be broken	<hôrB>	/ˈho.r̄β̄/ <sup>20</sup>	#37\$54#
9.	ⲱⲣⲃ̄	restrict	<ôrB>	/ˈʔo.r̄β̄/	#17\$54#
10.	ϥⲟⲟϥ̄	know	<soouN>	/ˈso.w̄ŋ̄/	#37\$65#

b. ccC#のパターン

1.	κⲣⲟⲙⲣ̄	be dark	<kromrM>	/ˈkrɔ̄m.r̄m̄/	#1575\$55#
2.	ϩⲟⲙⲗⲙ̄	be complicated	<hlomlM>	/ˈhlɔ̄ml̄m̄/	#3675\$55#

c. cCc#のパターン

1.	ϩⲟⲙ̄ⲛ̄ⲧ	copper	<homNt>	/ˈhɔ̄.m̄ŋ̄t̄/	#37\$551#
2.	ϣⲟⲙ̄ⲛ̄ⲧ	three	<šomNt>	/ˈʃɔ̄.m̄ŋ̄t̄/	#37\$551#
3.	ϥⲙ̄ⲛ̄ⲧ	west	<emNt>	/ʔɛ.m̄ŋ̄t̄/	#7\$551#

以上の 50 例は、(8)で用いた制約群と制約ランキングで説明できる例であるが、これを用いても、説明できない例が少数あった。

(12)

a.	κⲣ̄ⲙ̄ⲣ̄	murmur	<krMrM>	/kr̄m̄r̄m̄/	#15555#
b.	ϩⲣ̄ⲃ̄	form	<hrB>	/hr̄β̄/	#354#
c.	ⲧⲱⲃ̄ϥ	goad	<tôBs>	/tōβ̄s/	#1743#
d.	ϥⲗ̄ⲙ̄	sticks	<cLM>	/k̄l̄m̄/	#155#
e.	ϩ̄ⲙ̄ⲟ̄ϫ̄	be sour	<hMoč>	/hm̄ɔ̄t̄j̄/	#3571#
f.	ϩ̄ⲣ̄ⲟ̄κ	be still human	<hRok>	/hr̄ɔ̄k/	#3571#
g.	ⲃ̄ⲃ̄ⲣ̄ⲛ̄ϥ̄	lightning	<Bbrêce>	/β̄β̄r̄ek̄j̄ə/	#445717#

<sup>20</sup> 8-10 の例は、ソノリティピークに SS がきていないが、「①一音節内に非成節的な /j, w, m, n, β, l, r/ が連続してはならないとする制約 >> ②初頭音節以外の音節は、頭子音を 1 つ持たなければならないとする制約 >> ③ソノリティピークは音節核を形成するとする制約。」の制約ランキングで SS の位置に音節核がくる。

(12a.)は、1) /kr̥m.rm/でも 2) /kr̥.m̥rm/でも最適解である。しかしながら、この語は重複語であり、語形成の仕方を考えれば、2)は、重複部(reduplicant)と基体部(base)の境界をまたいで、音節境界がひかれるが、1)は重複部と基体部の境界と音節境界が一致しているため、1)のほうがより自然であるといえるであろう。また、(12d.)は、これまでと異なり、sonority plateau の全体に、SS が引かれていると考えれば、説明がつく。

しかしながら、残りはまったく説明できない。すなわち、(12b.)の<hrB>/hrβ/, (12c.)の<tôBs>/toβs/, (12e.)の<hMoč> /hmotʃ/, (12f.)の<hRok>/hrɔk/, (12g.)の<Bbrêce>/ββrekia/である。これらは今後、説明されなければならない。可能性のある説明としては、いくつかの形態素から、これらの語が形成された、とする説明がある。すなわち、(12b.)<hrB>は{hr}と{b}から、(12c.)<tôBs>は{tô}と{bs}から、(12e.)<hMoč>は{hm}と{oč}から、(12f.)<hRok>は{hr}と{ok}から、(12g.)<Bbrêce>は{b}と{brêce}から、エジプト語のある歴史的段階で語形成によって誕生し、その形態素境界がコプト語でも意識されたために、上記のような SS のつけ方がなされた、とする説明である。しかしながら、今回、Cerny (1976)の語源辞典をみても、そのような説明の証拠となるデータは得られなかった。今後の歴史的研究が待たれる。

## 5. おわりに

以上、コプト語サイド方言の、スープレリニアーストロックが成節性を表すかについて、音韻論的立場から検証を行った。

その結果、以下の事が分かった。

(13)

SS 付きの子音	M	N	B	R	L
出現数	58	47	30	22	18

調べた語（自由形態素、動詞は基本形、複合語はなし）のうち、SS が付されているのは、(13)からもわかるように、ソノリティが母音や半母音の次に高い<M>/m/, <N>/n/, <B>/β/, <R>/r/, <L>/l/であった<sup>21</sup>。ソノリティピークに SS が対応している例は、全 171 語のうち、114 語、対応していない例は、57 語であった。対応していない例で、「①一音節内に非成節的な/m, n, β, l, r/が連続してはならないとする制約>> ②初頭音節以外の音節は、頭子音を 1 つ持たなければならない制約>> ③ソノリティピークは音節核を形成する制約」という制約群と制約ランキングで音節形成を考えて説明できる例は、57 語中 50 語であった。それでも説明できない 7 語のうち、他の要因で説明できるものは、2 語であり、説

<sup>21</sup> 出現数であるため、単語数とは一致しない。例えば、τχτχなどは、2 つカウントされる。

## コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロークと音素配列

明できないものは、5語であった。よって、説明し得るものは、166単語で、全体の95%であった。

本稿によって、「SS=成節子音」説は、自由形態素についていえば、5語の例外はあるものの、調べた単語の95%について成り立つことがわかり、音韻論的にも有力であるということがわかった。残る課題は、拘束形態素についてである。拘束形態素は、自由形態素と異なるSSの配置の仕方を呈する。今後は、拘束形態素を中心に研究を進めていきたい。

### 参考文献

- Allen, James P. (2013). *The Ancient Egyptian language: An historical study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beltzung, Jean-Marc and Cédric Patin. (2007). A CVCV analysis of syllabic consonants in Coptic. <http://stl.recherche.univ-lille3.fr/sitespersonnels/patin/Presentations/2007-Beltzung&Patin-Coptic-syllabic-consonants.pdf>, accessed on 2014-4-30.
- Cerny, Jaroslav. 1976. *Coptic Etymological Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, John. and Colin Yallop. (1995). *An introduction to phonetics and phonology*. 2nd ed. Oxford: Blackwell.
- Clements, G.N. (1990). The role of the sonority cycle in core syllabification. In: John Kingston and Mary Beckman (eds.), *Papers in laboratory phonology*, volume 1, 283–333. Cambridge: Cambridge University Press.
- Depuydt, Leo. (1993). On Coptic sounds. *Orientalia* (new series) 63: 338-375.
- Dum-Tragut, Jasmine. (2009). *Armenian: Modern Eastern Armenian*. London; John Benjamins.
- Goldsmith, John. 2011. Syllables. In: Jason Riggie John Goldsmith and Alan Yu (eds.), *The handbook of phonological theory*, 2nd ed. 164–196. Malden, MA: Wiley Blackwell.
- Layton, Bentley. (2002) *A Coptic grammar: With chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*. Wiesbaden: Harrasowitz Verlag.
- Loprieno, Antonio. (1995). *Ancient Egyptian: A linguistic introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Prince, Allan and Paul Smolensky. (1993). *Optimality Theory: Constraint interaction in Generative Grammar*. Technical Report 2, Rutgers Center for Cognitive Science, Rutgers University.
- Smith, Richard. (1999). *A concise Coptic-English lexicon*, 2nd ed. Atlanta, GA: Scholars Press.
- Worrell, William H (1933). Syllabic consonants in Sahidic Coptic. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 69:130-131.

### 謝辞

本稿を書くにあたって、仲尾周一郎氏には鋭いご指摘を多数頂いた。コプト語を言語学的に研究する上では、Eitan Grossman氏、戸田聡氏、Martin Haspelmath氏には有力なご助言

## 宮川創

を頂いた。そして、京都大学言語学研究室の構成員のみなさんには、日頃からお世話になっている。彼らと、研究をずっと励まし、支え続けてくれる両親に、この場をもって感謝の意を表す。



## 編集後記

『言語記述論集』第6号をご覧いただき、ありがとうございます。引き続き電子出版となりましたが、今号は前号の倍ほどのボリュームです。現在の記述研の活気を表すことができた今号の出版を、とても嬉しく思います。記述研は京都大学に拠点を移し、現在も活動中です。研究会の開催は不定期で、メンバーも変わりつつありますが、「言語の学」に徹するその姿勢は受け継がれているように感じます。今後とも記述研究会をよろしく願いいたします。

ホームページのアドレスが <http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/kijutsuken> に変わりました。研究会の活動や、過去の論文を見られるよう更新する予定です。是非一度ご覧ください。

(2014年3月、伊藤雄馬記)

## 地球研言語記述論集 6

千田俊太郎・伊藤雄馬(編)

言語記述研究会

総合地球環境学研究所プロジェクト  
「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」  
(プロジェクトリーダー：大西正幸)

2014年3月29日発行

発行：総合地球環境学研究所  
京都市北区上賀茂本山457番地4

<http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/kijutsuken>

ISBN 978-4-906888-06-1